取扱説明書

お取り扱いについてお困りのとき

http://pioneer.jp/support/

カスタマーサポートセンター

フリーコール 0120-944-222

一般電話　03-5496-2986

受付時間

月曜〜金曜
9:30〜18:00
土曜・日曜・祝日
9:30〜12:00、13:00〜17:00

(弊社休業日を除きます。)

※ フリーコールは、携帯電話・PHSからはご利用になれません。一般電話は、携帯電話・PHSからご利用可能ですが、通話料がかかります。

AVマルチチャンネルアンプ

VSA-LX51

安全上のご注意

●安全にお使いいただくために、必ずお守りください。
●ご使用の前にこの「安全上のご注意」をよくお読みのうえ、正しくお使いください。

この取扱説明書および製品への表示は、製品を安全に正しくお使いいただき、あなたや他の人々への危害や財産への損害を未然に防止するために、いろいろな絵表示をしています。その表示と意味は次のようになっています。
内容をよく理解してから本文をお読みください。

警告

この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が死亡または重傷を負う可能性が想定される内容を示しています。

注意

この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が損害を負う可能性が想定される内容および物的損害のみの発生が想定される内容を示しています。

絵表示の例

△ 記号は注意(警告を含む)しなければならない内容であることを示しています。
図の中に具体的な注意内容(左図の場合は感電注意)が描かれています。

⊘ 記号は禁止(やってはいけないこと)を示しています。
図の中や近くに具体的な禁止内容(左図の場合は分解禁止)が描かれています。

● 記号は行動を強制したり指示する内容を示しています。
図の中に具体的な指示内容(左図の場合は電源プラグをコンセントから抜け)が描かれています。

⚠ 警告

異常時の処置

- 万一煙が出ている、変なにおいや音がするなどの異常状態のまま使用すると火災・感電の原因となります。すぐに機器本体の電源スイッチを切り、必ず電源プラグをコンセントから抜いてください。煙が出なくなるのを確認して販売店に修理をご依頼ください。お客様による修理は危険ですから絶対おやめください。

- 万一内部に水や異物等が入った場合は、まず機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

- 万一本機を落としたり、カバーを破損した場合は、機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

設置

- 電源プラグの刃および刃の付近にほこりや金属物が付着している場合は、電源プラグを抜いてから乾いた布で取り除いてください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

- 電源コードの上に重いものをのせたり、コードが本機の下敷きにならないようにしてください。また、電源コードが引っ張られないようにしてください。コードが傷ついて、火災・感電の原因となります。コードの上を敷物などで覆うことにより、それに気付かず、重い物をのせてしまうことがあります。

- 放熱をよくするため他の機器、壁等から間隔をとり、またラックに入れる時はすき間をあけてください。また、次のような使い方で通風孔をふさがないでください。内部に熱がこもり、火災の原因となることがあります。

→あおむけや横倒し、逆さまにする。
→押し入れなど、風通しの悪い狭いところに押し込む。
→じゅうたんやふとんの上に置く。
　テーブルクロスなどをかける。

- **着脱式の電源コード(インレットタイプ)が付属している場合のご注意:**
  付属の電源コードはこの機器のみで使用することを目的とした専用部品です。他の電気製品ではご使用になれません。他の電気製品で使用した場合、発熱により火災・感電の原因となることがあります。また電源コードは本製品に付属のもの以外は使用しないでください。他の電源コードを使用した場合、この機器の本来の性能が出ないことや、電流容量不足による発熱から火災・感電の原因となることがあります。

本機の上に火がついたろうそくなどの裸火を置かないでください。火災の原因となります。

使用環境

- この機器に水が入ったり、ぬらさないようにご注意ください。火災・感電の原因となります。雨天、降雪中、海岸、水辺での使用は特にご注意ください。

- 風呂場・シャワー室等では使用しないでください。火災・感電の原因となります。

- 表示された電源電圧（交流100ボルト50 Hz/60 Hz）以外の電圧で使用しないでください。火災・感電の原因となります。

- この機器を使用できるのは日本国内のみです。船舶などの直流（DC）電源には接続しないでください。火災の原因となります。

使用方法

- 本機の上に花びん、植木鉢、コップ、化粧品、薬品や水などの入った容器または小さな金属物を置かないでください。こぼれたり、中に入った場合、火災・感電の原因となります。

- ぬれた手で（電源）プラグを抜き差ししないでください。感電の原因となることがあります。

- 本機の通風孔などから、内部に金属類や燃えやすいものなどを差し込んだり、落とし込んだりしないでください。火災・感電の原因となります。特にお子様のいるご家庭ではご注意ください。

- 本機のカバーを外したり、改造したりしないでください。内部には電圧の高い部分があり、火災・感電の原因となります。内部の点検・整備・修理は販売店にご依頼ください。

- 電源コードを傷つけたり、加工したり、無理に曲げたり、ねじったり、引っ張ったり、加熱したりしないでください。コードが破損して火災・感電の原因となります。コードが傷んだら（芯線の露出、断線など）、販売店に交換をご依頼ください。

- 雷が鳴り出したらアンテナ線や電源プラグには触れないでください。感電の原因となります。

- 製品に付属の電源コンセントには、そのパネルおよび取扱説明書に表示された容量を超える消費電力を持つ電気機器を接続しないでください。火災の原因となります。電熱器具、ヘアードライヤー、電磁調理器などは接続しないでください。また表示してある電力以内であっても、電源を入れた時に大電流の流れる機器などは接続しないでください。

⚠ 注意

設置

- 電源プラグはコンセントに根元まで確実に差し込んでください。差し込みが不完全ですと発熱したり、ほこりが付着して火災の原因となることがあります。また、電源プラグの刃に触れると感電することがあります。

- 電源プラグは、根元まで差し込んでもゆるみがあるコンセントに接続しないでください。発熱して火災の原因となることがあります。販売店や電気工事店にコンセントの交換を依頼してください。

- ぐらついた台の上や傾いたところなど不安定な場所に置かないでください。落ちたり、倒れたりしてけがの原因となることがあります。

- 本機を調理台や加湿器のそばなど油煙、湿気あるいはほこりの多い場所に置かないでください。火災・感電の原因となることがあります。

- キャスター付きの場合にはキャスター止めをしてください。動いたり、倒れたりしてけがの原因となることがあります。

- テレビ、オーディオ機器、スピーカー等に機器を接続する場合は、それぞれの機器の取扱説明書をよく読み、電源を切り、説明に従って接続してください。また、接続は指定のコードを使用してください。

- 電源を入れる前には音量を最小にしてください。突然大きな音が出て聴力障害などの原因となることがあります。

- 本機の上に重いものや外枠からはみ出るような大きなものを置かないでください。バランスがくずれて倒れたり、落下してけがの原因となることがあります。

- 本機の上にテレビを置かないでください。放熱や通風が妨げられて、火災や故障の原因となることがあります。（取扱説明書でテレビの設置を認めている機器は除きます。）

異常時の処置

● 電源プラグを抜く時は、電源コードを引っ張らないでください。コードが傷つき火災・感電の原因となることがあります。必ずプラグを持って抜いてください。

● 電源コードを熱器具に近づけないでください。コードの被ふくが溶けて、火災・感電の原因となることがあります。

● 移動させる場合は、電源スイッチを切り必ず電源プラグをコンセントから抜き、外部の接続コードを外してから、行ってください。コードが傷つき火災・感電の原因となることがあります。

● 本機の上にテレビやオーディオ機器をのせたまま移動しないでください。倒れたり、落下してけがの原因となることがあります。重い場合は、持ち運びは2人以上で行ってください。

● アンテナ工事には技術と経験が必要ですので、販売店にご相談ください。
→送配電線から離れた場所に設置してください。アンテナが倒れた場合、感電の原因となることがあります。
→ＢＳ、ＣＳ放送受信用アンテナは強風の影響を受けやすいので、堅固に取りつけてください。

● 窓を閉め切った自動車の中や直射日光が当たる場所など異常に温度が高くなる場所に放置しないでください。火災の原因となることがあります。

使用方法

● ディスクを使用する機器の場合、ひび割れ、変形、または接着剤などで補修したディスクは使用しないでください。ディスクは機器内で高速回転しますので、飛び散ってけがの原因となることがあります。

● レーザーを使用している機器では、レーザー光源をのぞきこまないでください。レーザー光が目に当たると視力障害を起こすことがあります。

● 長時間音が歪んだ状態で使わないでください。スピーカーが発熱し、火災の原因となることがあります。

● 本機に乗ったり、ぶら下がったりしないでください。特にお子様はご注意ください。倒れたり、壊れたりしてけがの原因になることがあります。

● お子様がカセットテープ、ディスク挿入口に、手を入れないようにご注意ください。けがの原因になることがあります。

● ヘッドホンをご使用になる時は、音量を上げすぎないようにご注意ください。耳を刺激するような大きな音量で長時間続けて聞くと、聴力に悪い影響を与えることがあります。

● 旅行などで長期間ご使用にならない時は安全のため必ず電源プラグをコンセントから抜いてください。

電池

● 指定以外の電池は使用しないでください。また、新しい電池と古い電池を混ぜて使用しないでください。電池の破裂、液漏れにより、火災・けがや周囲を汚損する原因となることがあります。

● 電池を機器内に挿入する場合、極性表示(プラス(＋)マイナス(－)の向き)に注意し、表示どおりに入れてください。間違えると電池の破裂、液漏れにより、火災・けがや周囲を汚損する原因となることがあります。

● 長時間使用しない時は、電池を取り出しておいてください。電池から液が漏れて火災、けが、周囲を汚損する原因となることがあります。もし液が漏れた場合は、電池ケースについた液をよく拭き取ってから新しい電池を入れてください。また万一、漏れた液が身体についた時は、水でよく洗い流してください。

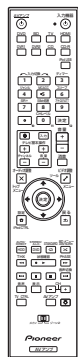
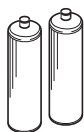
● 電池は加熱したり分解したり、火や水の中に入れないでください。電池の破裂、液漏れにより、火災、けがの原因となることがあります。

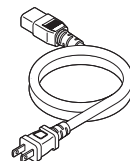
保守・点検

● 5年に一度くらいは内部の掃除を販売店などにご相談ください。内部にほこりがたまったまま、長い間掃除をしないと火災や故障の原因となることがあります。特に湿気の多くなる梅雨期の前に行うとより効果的です。なお掃除費用については販売店などにご相談ください。

● お手入れの際は安全のために電源プラグをコンセントから抜いて行ってください。

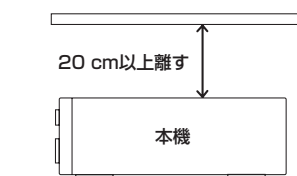
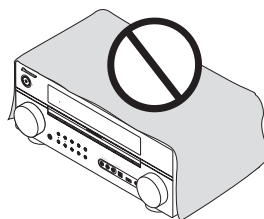
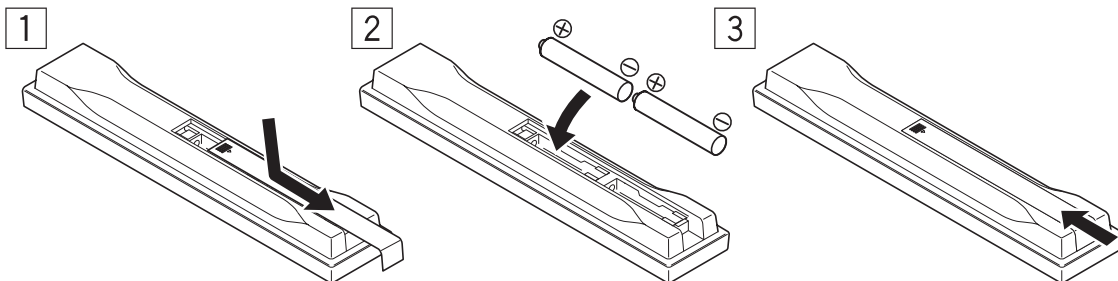
本機の使用環境温度範囲は5 ℃～35 ℃、使用環境湿度は85 %以下(通風孔が妨げられていないこと)です。
風通しの悪い所や湿度が高すぎる場所、直射日光(または人工の強い光)の当たる場所に設置しないでください。
D3-4-2-1-7c_Ja

付属品を確認する

リモコン

単3形乾電池（2本）
（IEC R6P）

セットアップ用マイク
（5 m）

電源コード

- 保証書
- 取扱説明書（本書）

設置について

- 放熱のため本機の上に物を置いたり、布やシートなどをかぶせた状態でのご使用は絶対におやめください。異常発熱により故障の原因となる場合があります。
- ラックなどに設置する場合は、上部に20 cm 以上空間をあけてください。

リモコンに電池を入れる

- リモコンの操作範囲が極端に狭くなってきたら、電池を交換してください。
- 電池を交換する際は、なるべく5分以内に行ってください。それ以上では、リモコンの設定が解除される可能性があります。再度リモコンの設定を行う場合は、「他機器を操作するためのリモコン設定をする」をご覧ください（85ページ）。

電池を直射日光の強いところや、炎天下の車内・ストーブの前などの高温の場所で使用・放置しないでください。電池の液漏れ、発熱、破裂、発火の原因になります。また、電池の性能や寿命が低下することがあります。

電池を誤って使用すると、液漏れしたり破裂する危険性があります。以下の点について特にご注意ください。

- 新しい乾電池と一度使用した乾電池を混ぜて使用しないでください。
- 乾電池のプラスとマイナスの向きを電池ケースの表示どおりに正しく入れてください。
- 乾電池には同じ形状でも電圧の異なるものがあります。種類の違う乾電池を混ぜて使用しないでください。
- 長い間（1 カ月以上）リモコンを使用しないときは、電池の液漏れを防ぐため、乾電池を取り出してください。液漏れを起こしたときは、ケース内についた液をよく拭き取ってから新しい乾電池を入れてください。
- 不要となった電池を廃棄する場合は、各地方自治体の指示（条例）に従って処理してください。

目　次

準備

ホームシアター入門

各部の名称

接 続

再 生

応用操作

設 定

目　次

リモコン

エキスパート

参考／技術資料

困ったとき

本機の特長　～こんなことができます～

高音質・多機能な本機VSA-LX51の主な特長をまとめました。「本書の掲載ページ」に進むと、それぞれの機能や操作を楽しんでいただけます。

本書の掲載ページ

1 Advanced MCACC を搭載

MCACCでは実際の製作現場で行われる高精度な調整を家庭でも実現できるように自動化し、チャンネル間の空間情報の歪みを補正。正確なマルチチャンネルの音場を再現します。
最新型のMCACCでは、リスニングルームの残響特性や定在波を解析した補正を行い、補正前後の特性の差をPCで表示することもできます。

P.12
「リスニング環境を測定して最適な設定をする ～ Auto MCACC ～」
P.67
「部屋の残響特性の測定と残響を考慮した補正（EQ Professional）」

2 PHASE CONTROL 機能

ソースからスピーカーまでの信号伝送経路によって生じていた低域の位相とタイミングのズレを補正し、原音に忠実な力強いサウンドを実現します。

P.43
「位相を合わせて音の打ち消し合いを防ぐ（PHASE CONTROL）」

3 フロントサラウンド・アドバンス 機能

フロントスピーカーとサブウーファーのみで自然なサラウンド再生を行います。

P.37
「リスニングモードでいろいろな音を楽しむ」

4 HDMI搭載

映像と音声をデジタル伝送できるHDMI端子(ドルビーデジタルプラス、ドルビー TrueHDやDTS-EXPRESS、DTS-HD Master Audioなどを含むあらゆるデジタル音声フォーマットに対応。また、DeepColor出力にも対応。HDMIコントロール機能も搭載し、HDMI機器との連動動作も実現)

P.27
「HDMI 対応機器の接続」
P.94
「HDMI コントロール機能で HDMI 機器を連動動作する」
P.102
「デジタル音声フォーマットについて」

5 THX SELECT2 PLUS の認証を取得

厳しい規格基準をクリアして「THX SELECT2 PLUS」規格の認証を受けています。THX 認定映画館と同等の再生環境をホームシアターで実現するための、さまざまな機能が搭載されています。

P.102
「デジタル音声フォーマットについて」

6 多彩な接続端子

- iPodの音楽やUSBメモリーに記録されている音楽データを再生できるiPod USB端子
- 映像と音声をデジタル伝送できるHDMI端子

P.49
「iPod をつないで再生する」
P.51
「USB メモリーを再生する」

7 その他の主な特長

- パイオニアビデオコンバーターを搭載
- 多機能リモコンを付属
- 省エネルギー設計(待機時0.6 W)

P.26
「映像機器の接続について（パイオニアビデオコンバーター）」

ホームシアター入門

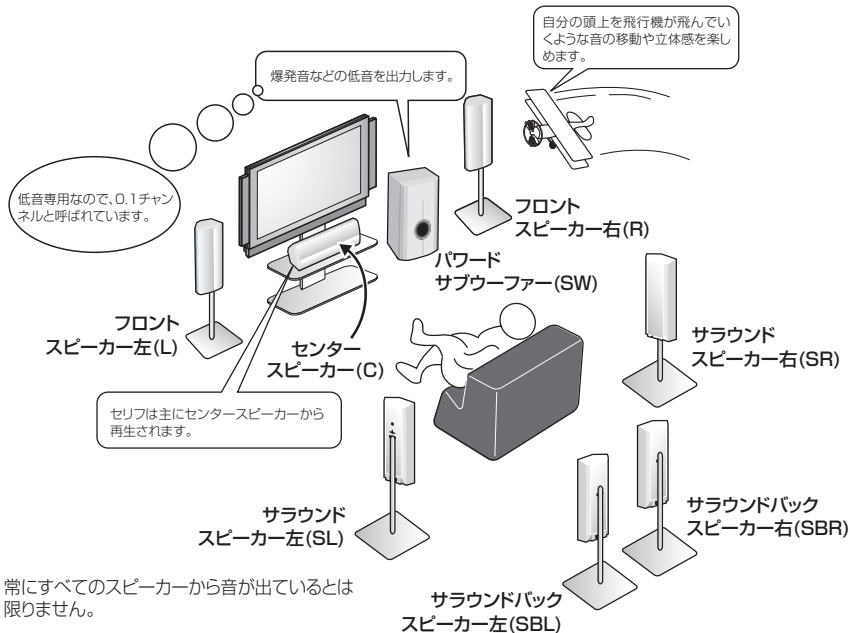
本章「ホームシアター入門」をご覧いただくだけで、簡単にマルチチャンネル再生を楽しむことができます。

ステップ1 接続する	………	「テレビ/DVD プレーヤーとの接続」「スピーカーとの接続」
ステップ2 設定する	………	「リスニング環境を測定して最適な設定をする ～Auto MCACC～ 」
ステップ3 再生する	………	「DVDのサラウンド再生」

マルチチャンネルサラウンド再生とは

3 本以上のスピーカーで多チャンネル再生することを指します。音場の立体感や移動感が増し、迫力ある臨場感が期待できます。

①ドルビーデジタルまたは DTS サラウンドなどのマルチ ch ソフトを再生する場合
マルチ ch ソフト(5.1ch 収録が一般的)には各チャンネルに独立した音声が収録されているため、忠実な 5.1ch 再生でも十分な立体感が得られますが、いろいろなモードとの組み合わせにより、最大 7.1ch での臨場感あふれる再生も可能です。この再生をするにはデジタル接続が必要です。

② CD またはドルビーサラウンドなどの 2ch (ステレオ)ソフトを再生する場合
ソフトが 2ch 収録の場合でも、ドルビープロロジック IIx や Neo:6 技術などを施すことで、最大 7.1ch での再生が可能です。ソフトの内容やお好みにマッチしたモードを見つけることも、ホームシアターの醍醐味です。

再生するソフトの音声記録方式(フォーマット)を知るには？

DVDやBlu-rayなどの多くのソフトには、パッケージ(裏面)に以下のように表示されています。1枚のディスクに2～3種類の音声が収録されていることが多く、聴く音声を選ぶことができます。切り換え方法はプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

例） ③))
1. 英　語 (5.1ch サラウンド) — DOLBY DIGITAL
2. 日本語 (ドルビーサラウンド) — DOLBY SURROUND
3. 英　語 (DTS 5.1ch サラウンド) — dts Digital Surround

収録音声数　記録方式　音声記録方式(フォーマット)

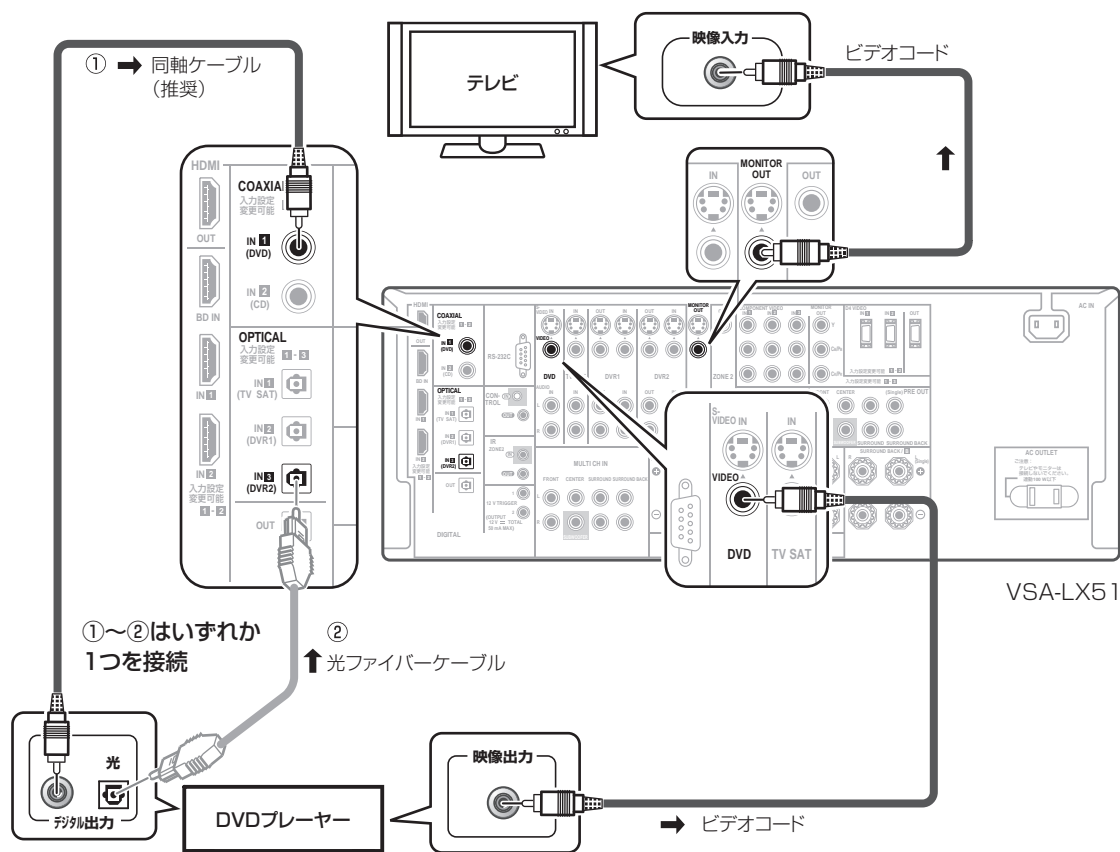
ドルビーデジタルは DVD の標準音声フォーマットであるため、単に「5.1ch サラウンド」と記載されている場合は、「ドルビーデジタル(5.1ch)」であることを示します。

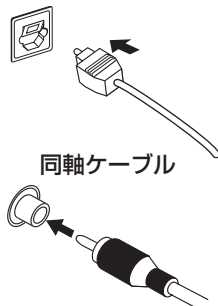
ステップ1 接続する

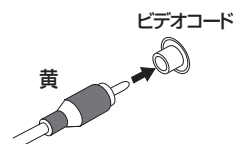
機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

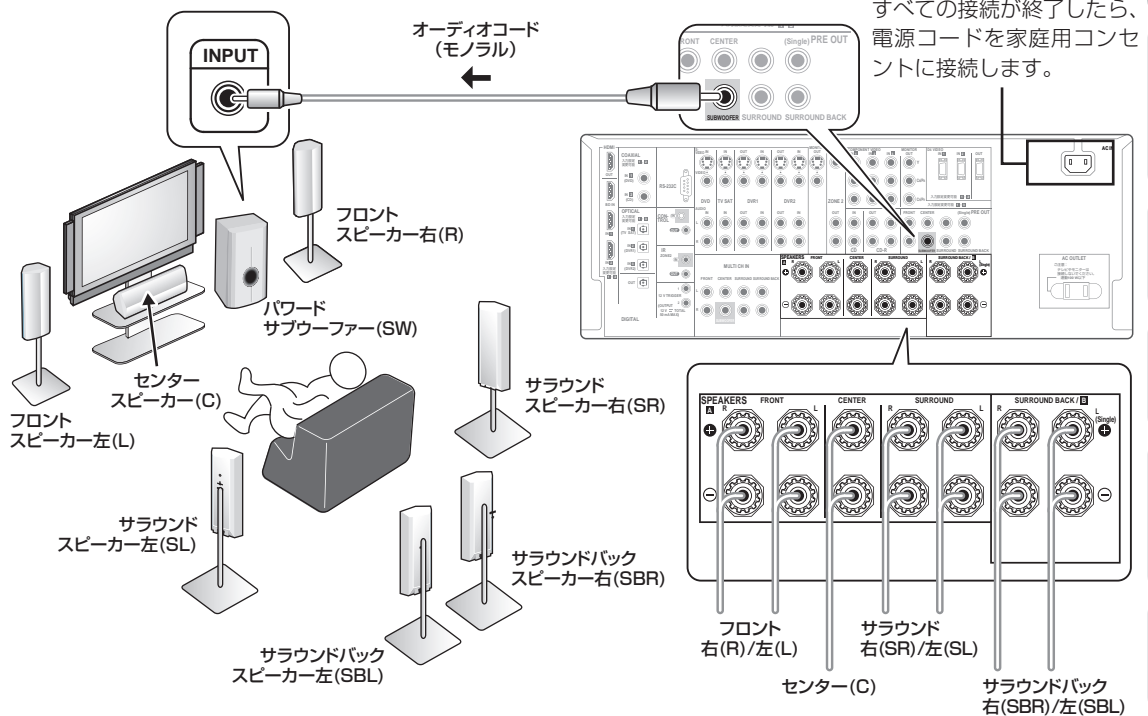
テレビ／ DVDプレーヤーとの接続

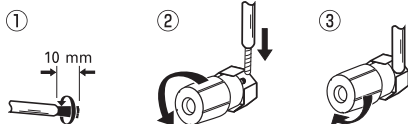
ドルビーデジタルやDTSといったマルチチャンネル音声の再生にはデジタル接続が必要です。
接続の前に、別売りのビデオコード２本、同軸ケーブル（または光ファイバーケーブル）１本をご用意ください。
同軸ケーブルにはビデオコードが代用できます。
光ファイバーケーブルで接続する場合は設定の変更が必要です。詳しくは、入力の設定(Input Setup)（→81ページ)をご覧ください。

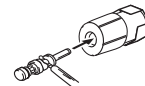
テレビ
映像入力
ビデオコード
① ➡ 同軸ケーブル（推奨）
MONITOR OUT
①〜②はいずれか1つを接続
② 光ファイバーケーブル
VSA-LX51
デジタル出力
光
DVDプレーヤー
映像出力
➡ ビデオコード

■光ファイバーケーブル／同軸ケーブル

- 急な角度に折り曲げないでください。保管するときは、直径が 15 cm以上になるようにしてください。
- 接続の際は端子の向きを合わせてしっかり奥まで差し込んでください。誤った向きでむりやり挿入すると、端子が変形し、ケーブルを抜いてもシャッターが閉まらなくなることがあります。

■ビデオコード

一般的な映像用コードで、コンポジットフォーマットの映像信号を伝送します。

スピーカーとの接続

７本のスピーカーとサブウーファーをつないだ例です。「ステップ２　設定する」を行うことで、サラウンドバックやセンタースピーカーがない場合でもお持ちのスピーカーに応じたサラウンドサウンドが楽しめます。
接続には、市販のスピーカーコードとオーディオコードをご使用ください。

- サラウンドバックスピーカーを１本だけ接続するときはL(Single)端子側に接続してください。
- 5.1chのスピーカーセットを接続するときは、FRONT L/R、CENTER、SURROUND L/RおよびPRE OUTのSUBWOOFERに接続してください。SURROUND L/Rを接続せずにSURROUND BACKに接続すると正しく動作しないことがあります。

■ SPEAKER（スピーカー）端子

①
②
③
① 線をねじる。
② スピーカー端子を緩め、スピーカーコードを差し込む。
③ スピーカー端子を締めつける。

バナナプラグを接続することもできます（詳しくはプラグの説明書をお読みください）。

- **公称インピーダンスが６Ω～16Ωのスピーカーをご使用ください。**
- ６Ω以上８Ω未満のスピーカーをご使用になるときは「スピーカーインピーダンスの切り換え」（→25ページ）を行ってください。
- スピーカーと本機の⊕および⊖端子どうしを正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、⊕および⊖が接触すると保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。
- センタースピーカーをテレビの上に設置するときは、適切な方法で固定してください。固定しないと地震などの外部の振動により、スピーカーが落下してケガをしたり、スピーカーを破損する原因となります。

ステップ2 設定する

リスニング環境を測定して最適な設定をする ~Auto MCACC~

本機のオートセットアップでは、従来のマニュアル調整では難しかったさまざまな設定を、自動で高精度に測定、設定することができます。スピーカーから出力されるテストトーンを付属のセットアップ用マイクで測定し、解析します。測定項目と全体の流れは右記のとおりです*[1]。

*[1] 右記の全体の流れは、Auto MCACCの「CUSTOM」で[ALL]（全項目を自動測定）を選択したときのものです。

右記①～⑨の測定／解析にかかる時間

合計３～７分程度

注意

測定中は大きな音でテストトーンが出力されます。近隣住宅や小さなお子様などへのご配慮をお願いします。

- サラウンドバックシステムの設定
- 測定、設定値の保存先選択

初期測定（測定環境のチェック）

① 暗騒音（部屋の騒音）の測定
② マイク感度の診断
③ 各 ch のスピーカー有り無し判定

スピーカーの有り無し判定結果のユーザー確認（または修正）

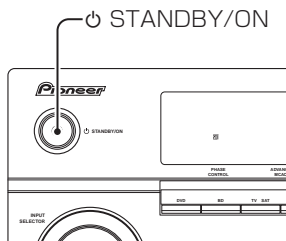
システム全体の解析 / 測定

④ スピーカーシステム
（各 ch の低域再生能力を判定）
⑤ スピーカーの出力レベル
（各 ch の出力バランスを補正）
⑥ スピーカーまでの距離
（最適なディレイ値を解析）
⑦ 定在波制御
（定在波の影響を軽減）
⑧ 残響特性の測定
⑨ 視聴環境の周波数特性
（出力音声の音色を統一）

システム全体の解析結果のチェック

1） オートセットアップで自動測定を開始する

- 入力がiPod USBになっているときはシステムセットアップを行うことができません。また、ZONE 2がONのときもシステムセットアップを行うことができません。
- 測定を途中で中断したときは、それまでの測定内容は確定されません。
- システムセットアップ中に静止画面を3分間放置すると画面にスクリーンセーバー機能が働きますが、いずれかのボタンを押すことで再び同じ画面を表示します。
- 測定は静かな環境で行ってください。
- スピーカーとリスニングポジション（マイク）の間に障害物があると、正確に測定できないことがあります。
- 測定中はリスニングポジションから離れて、各スピーカーの外側からリモコンで操作を行ってください。

1

STANDBY/ON

1 本機とテレビの電源を入れる。

本体の STANDBY/ONボタンを押します。

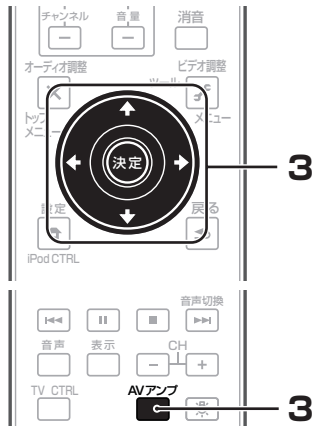
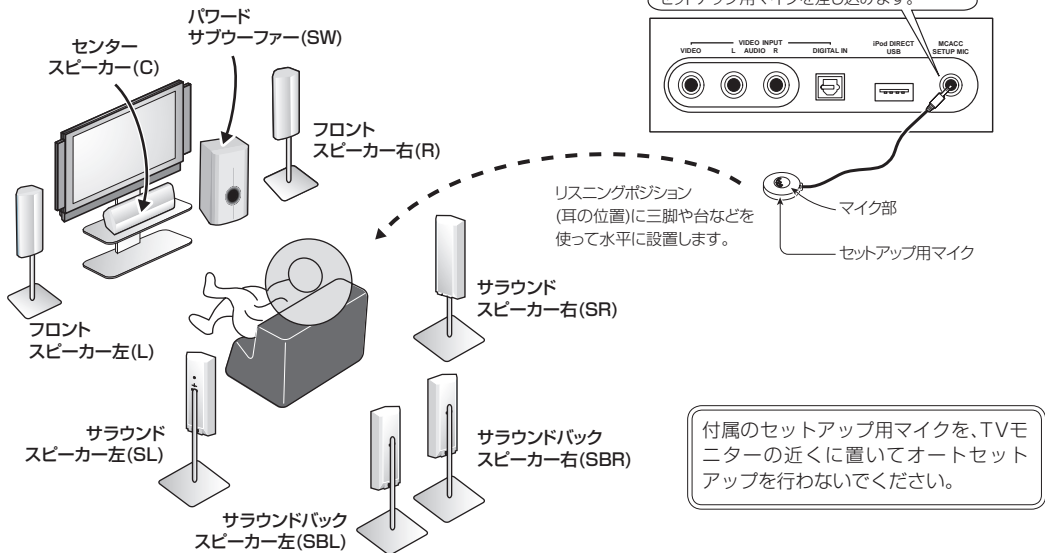
- サブウーファーを接続しているときは、測定のためサブウーファーの電源を入れてボリュームレベルを適度に上げておいてください。
- テレビにメニュー画面が表示されるようテレビ側の入力切換を合わせてください。

2 付属のセットアップ用マイクを接続する。

リスニングポジションにマイクを配置します。
マイクの接続は次ページをご覧ください。
マイクを差し込むとAuto MCACC画面が表示されます。

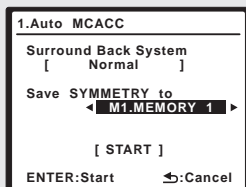
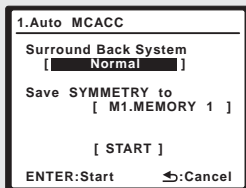
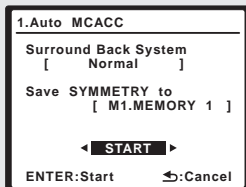
2

センター
スピーカー(C)
パワード
サブウーファー(SW)
フロント
スピーカー右(R)
フロント
スピーカー左(L)
サラウンド
スピーカー右(SR)
サラウンド
スピーカー左(SL)
サラウンドバック
スピーカー右(SBR)
サラウンドバック
スピーカー左(SBL)
リスニングポジション
(耳の位置)に三脚や台などを
使って水平に設置します。
本機のMCACC SETUP MIC端子に付属の
セットアップ用マイクを差し込みます。
VIDEO INPUT
VIDEO L AUDIO R
DIGITAL IN
iPod DIRECT USB
MCACC SETUP MIC
マイク部
セットアップ用マイク

付属のセットアップ用マイクを、TVモニターの近くに置いてオートセットアップを行わないでください。

3 [START]が選ばれているので、リモコンをアンプ操作モードにしてから決定する。

オートセットアップの自動測定に進みます。
手順4（次ページ）へお進みください。

注意

オートセットアップのテストトーンは大音量です。ボリュームを下げることもできますが、正しく設定されない場合があります。小さなお子様が近くにいる場合などはご注意ください。

サラウンドバックシステムの設定(Surround Back System)や測定／設定値の保存先(Save SYMMETRY to)を変更したいときは、⬆ボタンで変更したい項目を選択し、⬅ ➡ボタンで内容を変更してから[START]を選択します。
サラウンドバックシステムについて、詳しくは「スピーカーの使用用途を選択する」（→62ページ)をご覧ください。
SYMMETRY以外の補正カーブ(ALL CH ADJUSTやFRONT ALIGN)で補正したいときは[CUSTOM]を選び、設定します。また[CUSTOM]を選んで決定すると、項目別の測定を行うことができます。詳しくは「Auto MCACCをより詳細に測定／設定する」（→60ページ)をご覧ください。

3

4

自動測定が開始されます。

まずは初期測定(測定環境チェック)です。
Ambient Noise：暗騒音(部屋の騒音)の測定
Microphone：マイクの感度を診断
Speaker YES/NO：各スピーカーの有り無し判定
「Ambient Noise」および「Microphone」のチェックでエラーが表示されたときは、測定環境およびマイクの接続をもう一度確認し、[RETRY]を選んでもう一度測定することをお勧めします。⬅➡で[GO NEXT]を選択し、次の測定へ進むこともできます。

5

スピーカー有り無しの確認画面になります。

スピーカーの判定結果にエラーがなく、確認画面で何も操作がないときは10秒後に自動で手順6へ進み、オートセットアップが再開されます。
スピーカー有り無し判定については、以下の表をご覧ください。
スピーカー有り無し確認画面の見かた

有無 ＼ スピーカー	接続している	接続していない	規定外の接続
Front フロント左右	YES	ERR	ERR
Center センター	YES	NO	---
Surr サラウンド左右	YES	NO	ERR
SB サラウンドバック	YES×1(1つ接続) YES×2(2つ接続)	---	ERR
SW サブウーファー	YES	NO	---

スピーカー有り無し判定結果が正しいとき

[OK]を選んで決定ボタンを押します。

もう一度自動測定をやり直すとき

[RETRY]を選んで決定ボタンを押します。

スピーカー有り無し判定結果が間違っているとき

[RETRY]を選んでもう一度自動測定をやり直してみてください。それでも間違ってしまうときは、⬆⬇⬅➡ボタンで正しい設定に直したあと決定ボタンを押します。

エラーが表示されたら

判定結果で[ERR]が表示された場合は、スピーカーの接続を間違えている可能性があります。[RETRY]しても結果が同じような場合は一度電源を切り、スピーカーの接続を確認してください。
また、途中で測定エラーによる警告が表示されている場合がありますので、そのときは画面の指示に従ってください。指示の詳しい内容については「システムセットアップでのMCACC(音場補正)時に表示されるメッセージの意味」(→121ページ)をご覧ください。

スピーカー有り無しの確認画面で、SWを「NO」から「YES」に直して決定すると、サブウーファーのレベルを確認するためにサブウーファーのみ再測定を行います。

6

⬇ 確認画面へ

補正用測定が開始されます。

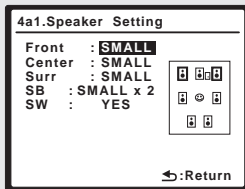
Speaker System：各スピーカーの低域再生能力判定
Channel Level：各chの出力バランスを補正
Speaker Distance：スピーカーまでの距離を解析
Standing Wave：定在波の影響を軽減
Reverb：残響特性の測定
Aco Cal EQ Pro.：出力音声の音色を統一
これらの自動設定には接続しているスピーカーの数によって3～7分程度かかりますので、手順7の画面になるまでしばらくお待ちください。

7

「MCACC Data Check」の画面が表示されたら自動測定は終了です。

「2)測定／設定結果を確認する」にお進みください。
オートセットアップが終わりましたら、必ずセットアップ用マイクを本機から抜いてください。

2） 測定／設定結果を確認する

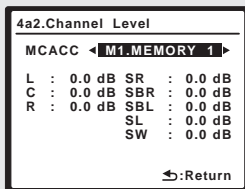
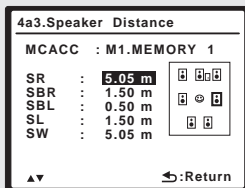
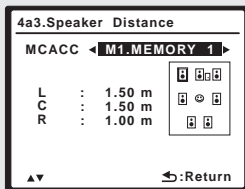
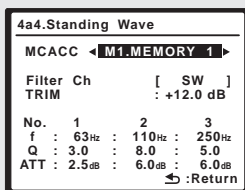
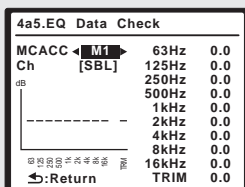
1.スピーカーシステム

2.スピーカーの出力レベル

3.スピーカーまでの距離

4a3.Speaker Distance
MCACC : M1.MEMORY 1
SR : 5.05 m
SBR : 1.50 m
SBL : 0.50 m
SL : 1.50 m
SW : 5.05 m
:Return

4.定在波制御

5.視聴環境の周波数特性

4a5.EQ Data Check
MCACC M1
Ch [SBL]
63Hz 0.0
125Hz 0.0
250Hz 0.0
500Hz 0.0
1kHz 0.0
2kHz 0.0
4kHz 0.0
8kHz 0.0
16kHz 0.0
TRIM 0.0
:Return

12～14ページの手順1～7を行ってから以下にお進みください。

1 ⬇⬆ボタンで項目を選んで決定し、測定された内容を確認する。

確認後は戻るボタンを押して項目一覧に戻ります。
各測定項目について、詳しくは「設定データを確認する」（→72ページ）をご覧ください。

- 同じスピーカーを接続していても、部屋の環境や設置の影響によりスピーカーの大小判定が一致しないことがあります。設定を変更したい場合はシステムセットアップの「スピーカー接続と低音再生能力を設定する」（→75ページ）を行ってください。
- サブウーファーまでの距離が、メジャーなどによる実測に比べてやや遠めに設定されることがありますが、それは電気的な遅延も含めた補正となっているので問題ありません。また、他のスピーカーも音響特性を測定して距離設定をしているため、実測したスピーカーまでの距離とは異なることがあります。
- 各スピーカーと視聴環境との相互作用によって、まれにオートMCACCの測定が正しく行われないことがあります。その場合は手動で設定を調整することをお勧めします。

2 設定ボタンを押してオートセットアップ(Auto MCACC)を終了する。

通常動作に戻ります。

ステップ3 再生する

つないだDVDプレーヤーにディスクをセットして、サラウンド再生をします。

DVDのサラウンド再生

1 本機、テレビ(モニター)、プレーヤー、サブウーファーの電源を入れる。

⏻ STANDBY/ONボタンを押して電源をONにします。
(サブウーファーは、「ステップ 2」のAuto MCACCを行ったときと同じ音量にしておきます。)

2 テレビに本機の出力映像が表示されるようにテレビの入力切換を設定する。

たとえば、本機のMONITOR OUT端子とテレビの「ビデオ1」端子を接続した場合は、テレビの入力を「ビデオ1」に切り換えます。

3 リモコンのDVDボタンを押して、本機の入力を「DVD」にする。

4 AUTO SURROUNDモード(工場出荷時の設定)にする。

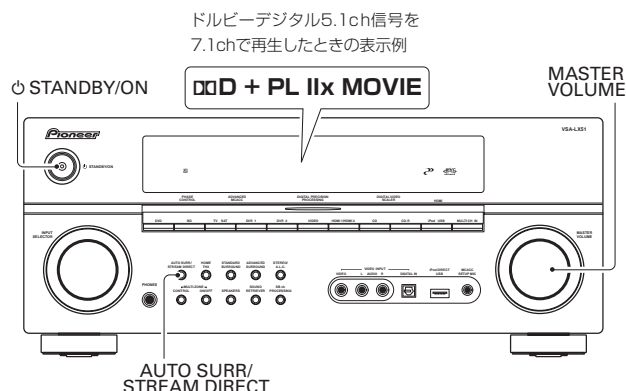
ディスプレイにAUTO SURROUNDと表示されるまで、AUTO SURR/STREAM DIRECTボタンを押します。

5 DVDを再生する。

再生する前にDVDプレーヤー、DVDソフトの確認をしてください。

① DVDプレーヤーのデジタル出力
ドルビーデジタル、DTS、および96 kHz PCMの音声信号が出力されるように設定してください。
※本機はMPEG音声に対応していません。PCM音声が出力されるように設定してください。
② DVDソフトの音声の確認
DVDソフトのメニュー画面やDVDプレーヤーの音声切換操作で音声(5.1chサラウンドまたはドルビーサラウンドなど)を選んでください。

CDなどの場合はステレオ(2ch)再生になります。

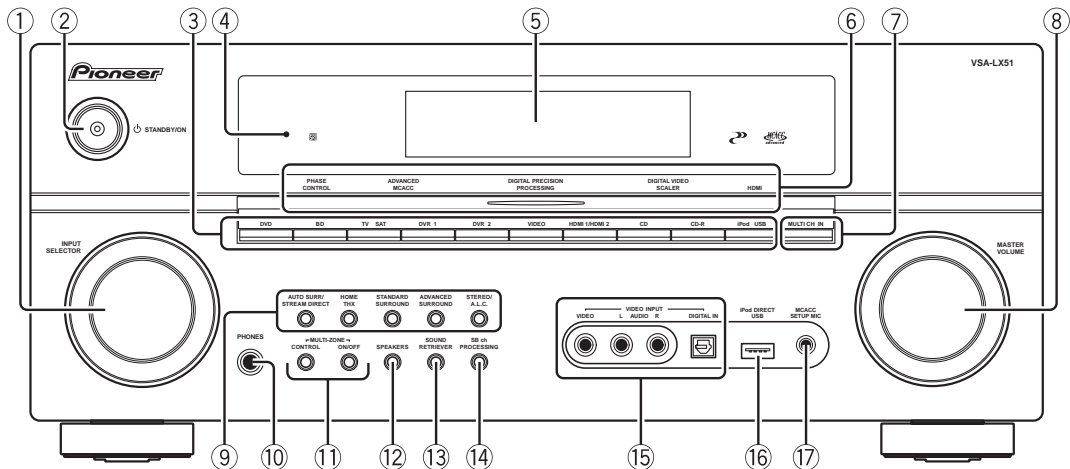
6 適当な音量になるまでMASTER VOLUMEを回して音量を調整する。

サラウンドをより楽しむために

①いろいろな音場効果を加えることができます。
(→37ページ)
②より詳細な設定を行うこともできます。
(→60ページ)

何か問題はありましたか？

「故障かな？と思ったら」をご覧ください。
(→114ページ)

誤使用防止のため、取扱説明書は必ず最後までお読みください。

フロントパネル

① **INPUT SELECTORダイヤル**
本機の入力を切り換えます。

② **⏻STANDBY/ON**
本機の電源を入／切(スタンバイ)にします。

③ **入力ファンクション切換ボタン**
フロントパネルおよびリアパネルに接続した各機器から再生機器を選びます。

④ **リモコン受光部**
「リモコンの操作範囲」を参照してください(→下記)。

⑤ **表示部(フロントパネルディスプレイ)**
(→19ページ)

⑥ **PHASE CONTROLインジケーター**
PHASE CONTROLモードをONに設定しているときに点灯します。(→43 ページ)

ADVANCED MCACCインジケーター
MCACC MEMORY の 1 ～ 6 のいずれかが選択されているときに点灯します。(→ 41 ページ)
オーディオ調整機能の「EQ」が OFF に設定されている MCACC MEMORY のときは点灯しません。(→ 44 ページ)

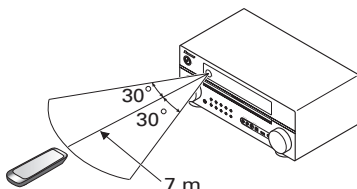
DIGITAL PRECISION PROCESSINGインジケーター
デジタル信号を処理しているときに点灯します。

DIGITAL VIDEO SCALERインジケーター
HDMI OUTにテレビを接続していて、解像度の設定をPURE以外に設定しているときに点灯します(接続されているテレビの性能によっては点灯しないこともあります)。(→48ページ)

HDMIインジケーター
HDMIケーブルで接続されている機器が選択されているときに点灯します。

⑦ **MULTI CH IN**
マルチチャンネルアナログ入力を選びます。(→53ページ)

リモコンの操作範囲

本機をリモコンで操作するときは、リモコンをフロントパネルのリモコン信号受光部に向けてください。

- リモコンと本機との間に障害物があったり、リモコン受光部との角度が悪いと操作ができない場合があります。
- リモコン受光部に直射日光や蛍光灯などの強い光が当たると誤動作することがあります。
- 赤外線を出す機器の近くで本機を使用したり、赤外線を利用した他のリモコン装置を使用したりすると、本機が誤動作することがあります。逆にこのリモコンを操作すると、他の機器を誤動作させることもあります。

⑧ MASTER VOLUMEダイヤル
音量を調節します。

⑨ リスニングモードボタン(→37ページ)
AUTO SURR/STREAM DIRECT
オートサラウンド再生とダイレクト再生を切り換えます。

HOME THX
THXの各モードを切り換えます。

STANDARD SURROUND
サラウンドモードの Dolby Pro Logicの各モードを切り換えます。

ADVANCED SURROUND
アドバンスドサラウンドモードを切り換えます。

STEREO/A.L.C.
ステレオ再生およびフロントサラウンド・アドバンス再生を切り換えます。

⑩ PHONES端子
ヘッドホン端子です。(→36ページ)

⑪ MULTI-ZONEボタン
別の部屋で本機につないだ機器を再生する機能(マルチゾーン機能)に使用します。(→89ページ)

CONTROL
メインゾーンとサブゾーンを切り換えます。
ZONE 2で再生する入力ファンクションを選んだり、MASTER VOLUMEダイヤルで別の部屋の音量を調整するときに使用します。

ON/OFF
マルチゾーン機能を入/切します。

⑫ SPEAKERSボタン
スピーカーシステムを切り換えます。(→56ページ)

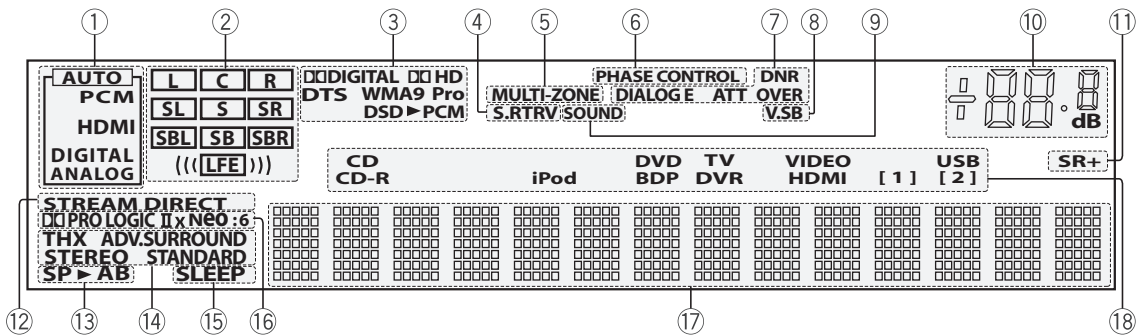
⑬ SOUND RETRIEVERボタン
サウンドレトリバー機能のON/OFFを切り換えます。(→45ページ)

⑭ SB ch PROCESSING
サラウンドバックチャンネル、またはバーチャルサラウンドバック処理のON/AUTO/OFFを切り換えます。(→42ページ)

⑮ VIDEO INPUT端子
ビデオカメラやゲーム機などのため、前面に備えた入力端子です。(→30ページ)

⑯ iPod DIRECT USB入力端子
iPod、またはマスストレージクラスに対応したUSBメモリーを接続して再生することができます。(→49、51ページ)

⑰ MCACC SETUP MIC端子
音場設定の自動測定のときに、付属のセットアップマイクを差し込みます。(→12ページ)

フロントパネルディスプレイ

① **SIGNALインジケーター**
現在選択されている機器の音声入力信号の種類が点灯します。

② **プログラムフォーマットインジケーター**
ドルビーデジタルやDTSなどの信号入力時に、その信号が持っているチャンネルを表示します。

L：フロント左

C：センター

R：フロント右

SL：サラウンド左

S：サラウンド(モノラル)

SR：サラウンド右

SBL：サラウンドバック左

SB：サラウンドバック(モノラル)

SBR：サラウンドバック右

LFE：超低音の効果音(Low Frequency Effect)。超低音が再生されているときに ((( ))) が点灯します。

③ **デジタルフォーマットインジケーター**
それぞれのデジタル信号入力時に点灯します。DSD►PCMはSACDをPCMに変換しているときに点灯します。

④ **S.RTRVインジケーター**
サウンドレトリバー機能がONのときに点灯します。(→45ページ)

⑤ **MULTI-ZONEインジケーター**
マルチゾーン機能が選ばれているときに点灯します。(→91ページ)

⑥ **PHASE CONTROLインジケーター**
PHASE CONTROLモードをONに設定しているときに点灯します。(→43ページ)

⑦ **音声再生用機能インジケーター**
設定されている機能が点灯します。
アナログ入力信号のレベルが高すぎるときにOVERが点灯し、その歪みを補正するためにアナログATT機能(→54ページ)が選ばれるとATTが点灯します。

⑧ **V.SBインジケーター**
バーチャルサラウンドバック処理時に点灯します。(→42ページ)

⑨ **SOUNDインジケーター**
ミッドナイト/ラウドネスモード、または低音／高音の調整機能が選ばれているときに点灯します。(→44、45ページ)

⑩ **音量表示(dB)**
現在の主音量レベルを表示します。
音量レベルは、電源を入／切しても保持されています。(音声ミュート時は点滅します。)

⑪ **SR+インジケーター**
フラットテレビとの連動モード時に点灯します。(→97ページ)

⑫ **STREAM DIRECTインジケーター**
ストリームダイレクトモードでDIRECTまたはPURE DIRECTモードが選ばれているときに点灯します。(→38ページ)

⑬ **スピーカーインジケーター**
現在選択されているスピーカーシステムが点灯します。(→56ページ)

⑭ **リスニングモードインジケーター**
選択されているリスニングモードに応じて点灯します。(→37ページ)

⑮ **SLEEP インジケーター**
スリープタイマーが設定されているときに点灯します。(→55ページ)

⑯ **デコード処理インジケーター**
マトリックス・デコード処理時に点灯します。

PRO LOGICIIx：ドルビープロロジックII処理またはドルビープロロジックIIxデコード時。

Neo：6：Neo:6デコード時。

⑰ **キャラクター表示部**
操作中の情報やリスニングモードを表示します。

⑱ **入力ファンクションインジケーター**
現在選ばれている入力が点灯します。

何らかの操作のあと、キャラクター表示部が数秒間点滅する場合は、操作禁止を意味します。

リモートコントロール

アンプコントロール部とテレビ／他機器のコントロール部の2つに分類されます。
本機のリモコンは各操作ボタンごとに以下のように色分けされています。
白＝アンプコントロール
青＝他機器コントロール

リモコン照明ボタン
リモコン照明ボタンを押すと一部のボタンが点灯します。もう一度押すと消灯します。暗いお部屋で操作するときに便利です。

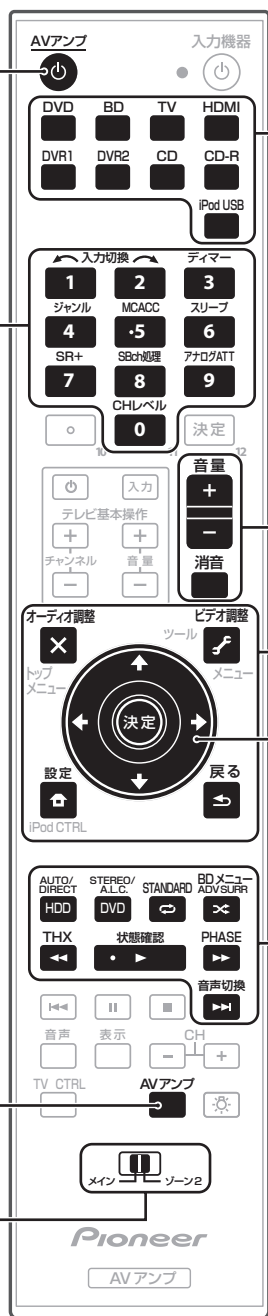
アンプコントロール部

本機を操作するときに使います。

AVアンプ ⏻ ボタン
本機の電源をONまたはOFF（スタンバイ状態）にします。

アンプ操作ボタン(AVアンプボタンを押してから操作します。)
入力切換：本機の入力を切り換えます。
ディマー：フロントパネル表示部の明るさを切り換えます。（→55ページ）
ジャンル：再生中のソースに最適なADVANCED SURROUNDモードを自動で選択します（HDMIコントロール対応のパイオニア製DVDレコーダーをHDMIで接続しているときのみ。ただし、本機発売時点では対応機器がありませんので、この機能は使用できません）。
MCACC：MCACC MEMORYを選択します。（→41ページ）
スリープ：スリープタイマーを設定します。（→55ページ）
SR+：フラットテレビとの連動モードを切り換えます。（→99 ページ）
SBch処理：サラウンドバックチャンネルまたはバーチャルサラウンドバックチャンネルのON/AUTO/OFFを切り換えます。（→42ページ）
アナログ ATT：アナログ信号が入力されている場合、入力信号のレベルが高すぎて音が歪んでいるときに押すと聴きやすくなります。（→ 54 ページ）
CHレベル：チャンネルを選択し、⬅/➡ でレベルを調整します。（→77ページ）

AVアンプボタン
リモコンをアンプ操作モードにします。

マルチゾーン用切り換えスイッチ
メインゾーンとゾーン2の操作を切り換えます。

マルチコントロールボタン
本機の入力を切り換えます。また他機器を操作するときのリモコンの操作モードを切り換えます。

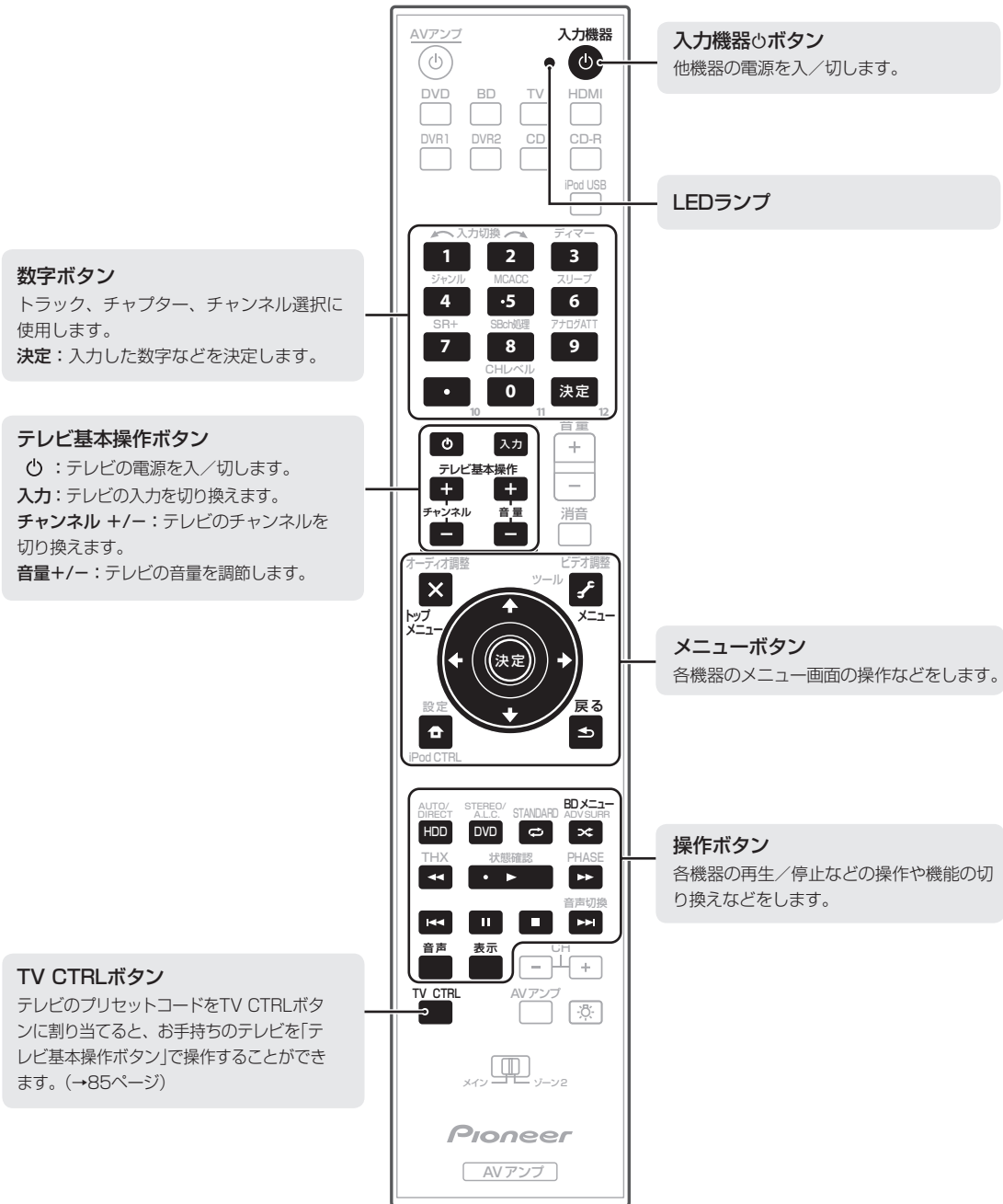
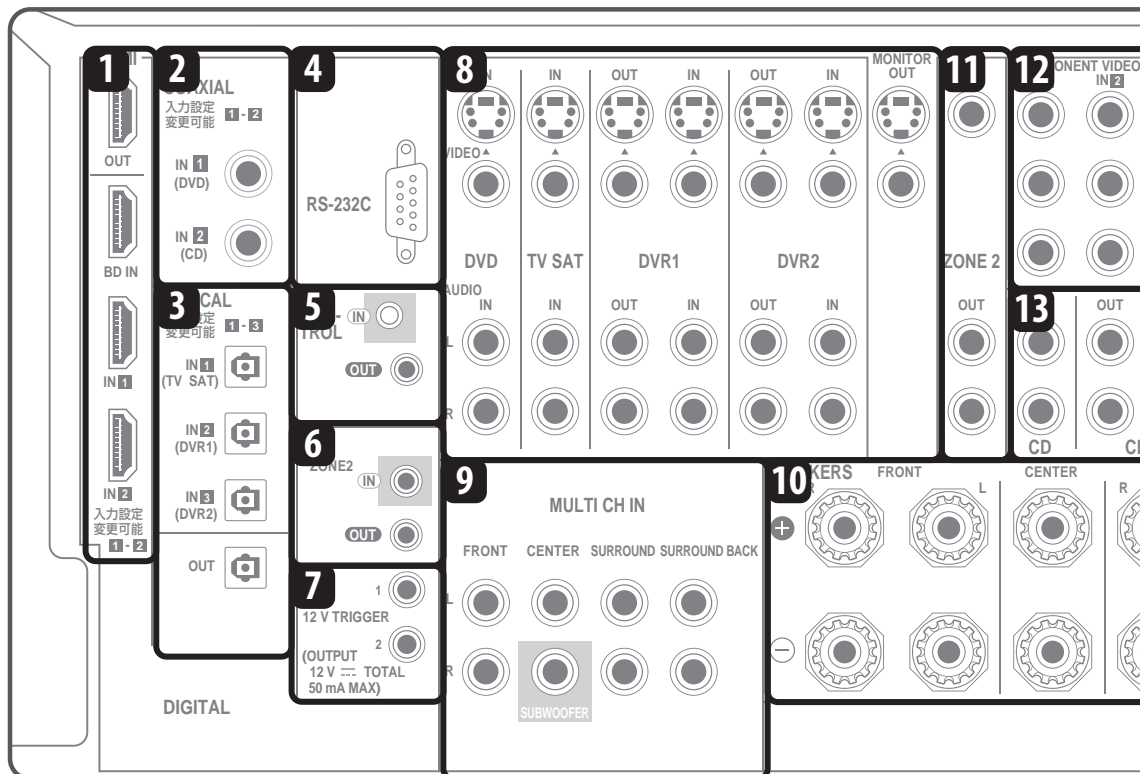
音量ボタン
＋ / −：本機の音量を調節します。
消音：消音（ミュート）します。

アンプ操作ボタン（AV アンプボタンを押してから操作します。）
オーディオ調整：オーディオに関する調整を行います。（→ 44 ページ）
ビデオ調整：映像に関する調整を行います。（→ 47 ページ）
設定：システムセットアップを行います。（→ 59 ページ）

⬆/⬇/⬅/➡/ 決定 / 戻る：各種設定項目の選択 / 決定 / 戻る

アンプ操作ボタン(AVアンプボタンを押してから操作します。)
リスニングモードボタン
（AUTO/DIRECT、STEREO/A.L.C.、STANDARD、ADV SURR、THX):
いろいろな音場効果を加えることができます。（→ 37 ページ）
状態確認：選択／設定されている機能の情報をフロントパネルディスプレイに表示させて確認できます。（→55ページ）
PHASE：PHASE CONTROLモードのON/OFFを切り換えます。（→43ページ）
音声切換：入力信号の種類(アナログ／デジタル／ HDMIなど)を切り換えます。（→36ページ）

テレビ／他機器コントロール部

テレビや他機器を操作するときに使います。
他機器の操作について、詳しくは「リモコンで他機器を操作する」（→87ページ）をご覧ください。

リアパネル

① HDMI入出力端子(→27ページ)

② デジタル音声入力端子(→33ページ)
端子に表示された機器と違う機器を接続するときはデジタル音声入力の設定が必要です。(→81ページ)

③ 光デジタル音声入出力端子(→33ページ)
端子に表示された機器と違う機器を接続するときはデジタル音声入力の設定が必要です。(→81ページ)

④ RS-232C端子(→69ページ)
PCと接続するための端子です。

⑤ コントロール入出力端子(→93ページ)

⑥ マルチゾーン用IR入出力端子(→93ページ)

⑦ 12 V TRIGGER端子(→100ページ)

⑧ アナログ音声入出力/ビデオ入出力端子
(→28 ～ 30ページ)

⑨ マルチチャンネル入力端子(→53ページ)

⑩ スピーカー端子
スピーカーインピーダンス6 Ω～16 Ωのスピーカーを使用できます。(6 Ω～8 Ω未満のスピーカーを使う場合は設定を変更してください。)
(→25ページ)

⑪ マルチゾーン映像／音声出力端子(→89ページ)

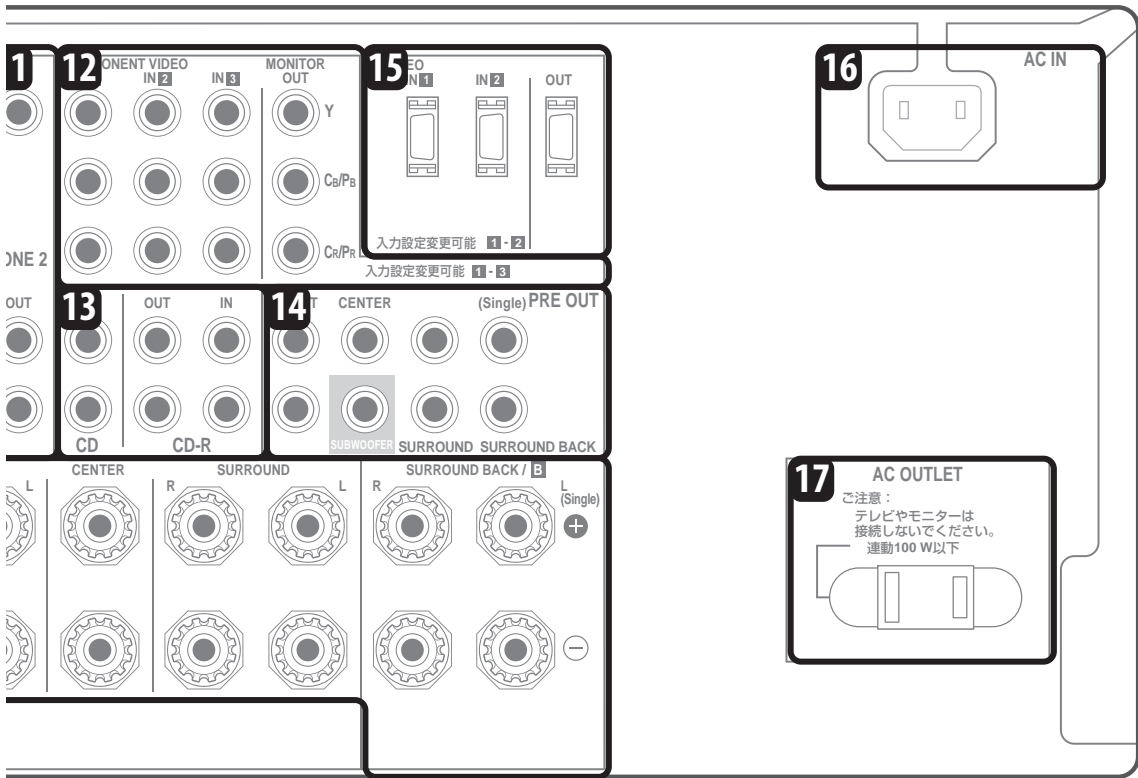
⑫ コンポーネントビデオ入出力端子(→31ページ)
工場出荷時はOFFに設定されています。機器を接続するときはコンポーネント/D4入力の設定が必要です。(→ 81ページ)

⑬ アナログ音声入出力端子(→32ページ)

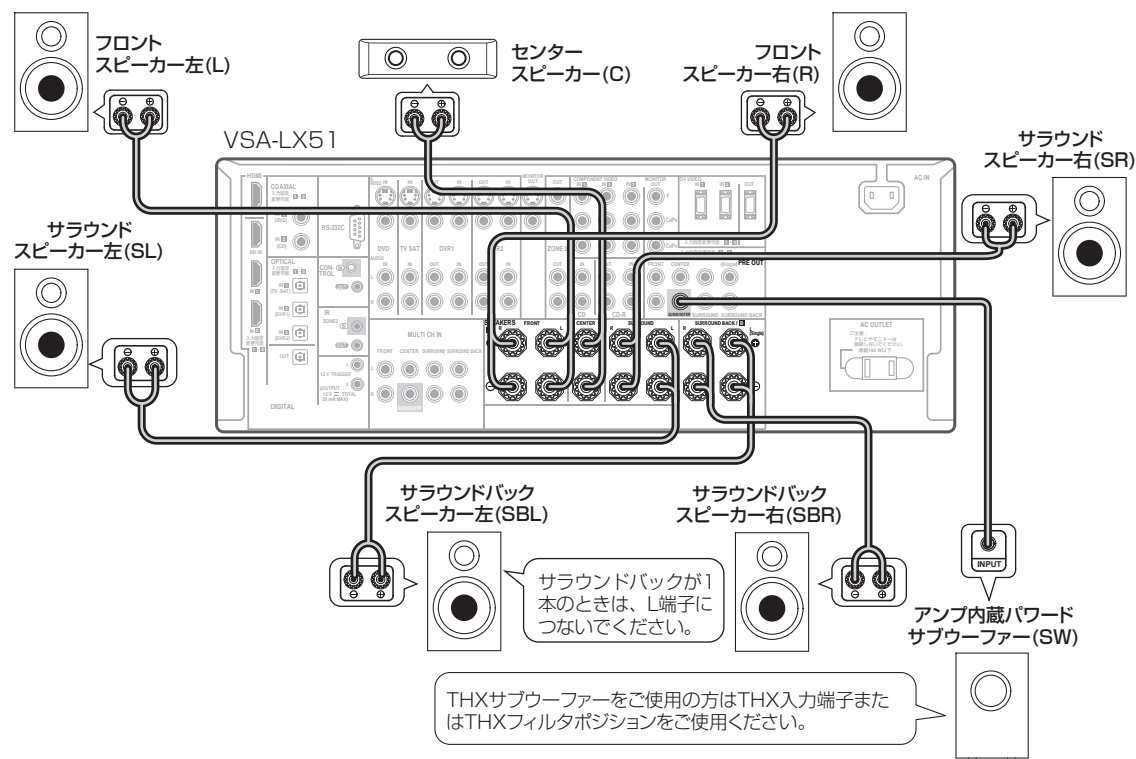
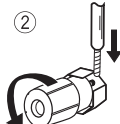
⑭ プリアウト端子(→32ページ)

⑮ D4ビデオ入出力端子(→31ページ)
工場出荷時はOFFに設定されています。機器を接続するときはコンポーネント/D4入力の設定が必要です。(→ 81ページ)

⑯ AC IN端子(→34ページ)
必ず一番最後に接続してください。

⑰ ACアウトレット予備コンセント(→34ページ)

機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

スピーカーの接続

以下のように各スピーカーを接続します。本機でサラウンドを楽しむためには、7本のスピーカーとサブウーファーを接続することをお勧めします。
5.1chのスピーカーセットを接続するときは、FRONT L/R、CENTER、SURROUND L/RおよびPRE OUTのSUBWOOFERに接続してください。SURROUND L/Rを接続せずにSURROUND BACKに接続すると正しく動作しないことがあります。
フロントスピーカーのバイアンプ接続をするときは「フロントスピーカーを高品位接続する」（→88ページ）をご覧ください。

フロントスピーカー左(L)
センタースピーカー(C)
フロントスピーカー右(R)
VSA-LX51
サラウンドスピーカー右(SR)
サラウンドスピーカー左(SL)
サラウンドバックスピーカー左(SBL)
サラウンドバックスピーカー右(SBR)
サラウンドバックが1本のときは、L端子につないでください。
アンプ内蔵パワードサブウーファー(SW)
INPUT
THXサブウーファーをご使用の方はTHX入力端子またはTHXフィルタポジションをご使用ください。

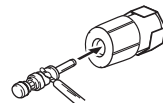
■ SPEAKER（スピーカー）端子

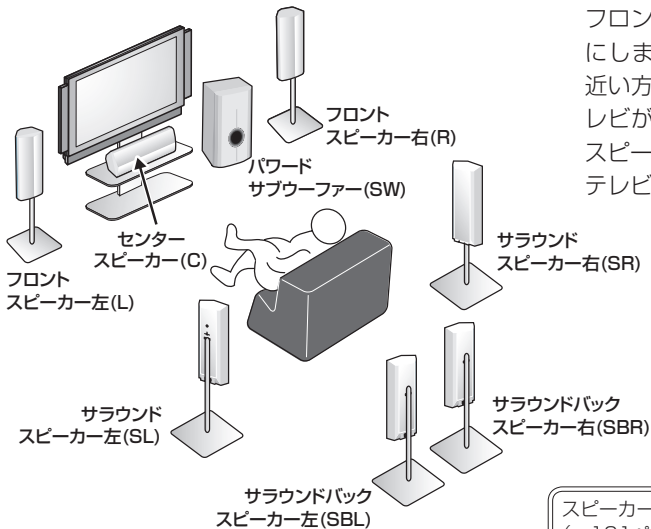
①

②

③

① 線をねじる。
② スピーカー端子を緩め、スピーカーコードを差し込む。
③ スピーカー端子を締めつける。

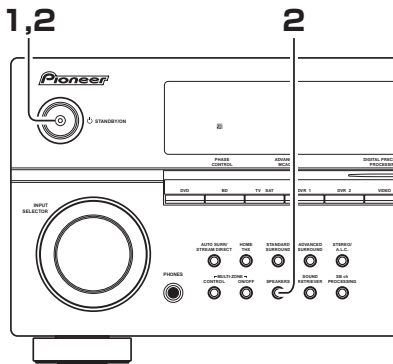
バナナプラグを接続することもできます（詳しくは、プラグの説明書をお読みください。）

- **公称インピーダンスが6 Ω～16 Ωのスピーカーをご使用ください。**
  本機では、スピーカーインピーダンスの設定を変更することができます。工場出荷時は8 Ω～16 Ωですが、お手持ちのスピーカーが6 Ω以上8 Ω未満の場合は、設定を変更してください。詳しくは、「スピーカーインピーダンスの切り換え」（→25ページ）をご覧ください。
- スピーカーと本機の⊕および⊖端子どうしを正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、⊕および⊖が接触すると保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。

モニター TVとスピーカーの位置関係

フロントスピーカーは、テレビから等距離になるようにします。センタースピーカーはモニター TV画面に近い方がセリフなどが自然に聞こえます。ただし、テレビが色ズレ等を起こすのを防止するため、防磁型のスピーカーを使用してください。防磁型でない場合は、テレビから離して設置してください。

注 意
センタースピーカーをテレビの上に設置するときは、適切な方法で固定してください。固定しないと地震などの外部の振動により、スピーカーが落下してケガをしたり、スピーカーを破損する原因となります。

スピーカーの配置について、詳しくは「スピーカーの配置について」(→101ページ)をご覧ください。

スピーカーインピーダンスの切り換え

すべての接続が終了してから行ってください。
スピーカーインピーダンスの設定は、6 Ω以上8 Ω未満と8 Ω～ 16 Ωの２通りあります。お手持ちのスピーカーが６ Ω以上８ Ω未満の場合は以下の手順で設定を変更してください。（工場出荷時は８ Ω～ 16 Ωに設定されています。）

1 本機をスタンバイ状態にする。

2 **SPEAKERSボタンを押しながら ⏻ STANDBY/ONボタンを押す。**

STANDBY/ON

スピーカーインピーダンスの設定が変更されます。
再度、設定を変更したいときは手順1からやり直してください。

```
Speaker 8Ω
```

スピーカーインピーダンスが８Ω～ 16Ωの場合

```
Speaker 6Ω
```

スピーカーインピーダンスが６Ω以上８Ω未満の場合

映像機器の接続について(パイオニアビデオコンバーター)

本機は、入力された映像信号を異なる種類の信号に変換できるビデオコンバーターを搭載していますので、以下のように映像コードの組み合わせを選ぶことができます。各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」(→108ページ)をご覧ください。

映像をテレビに表示する

ソース機器からの映像信号について、出力可能な出力端子は以下のとおりです。

ソース機器　本機の映像入力へ　本機のモニター出力から　テレビ(モニター)

ソース機器との接続端子

テレビモニターとの接続端子

高画質

HDMI IN

COMPONENT VIDEO IN　または　D4 VIDEO IN

S-VIDEO IN

VIDEO IN

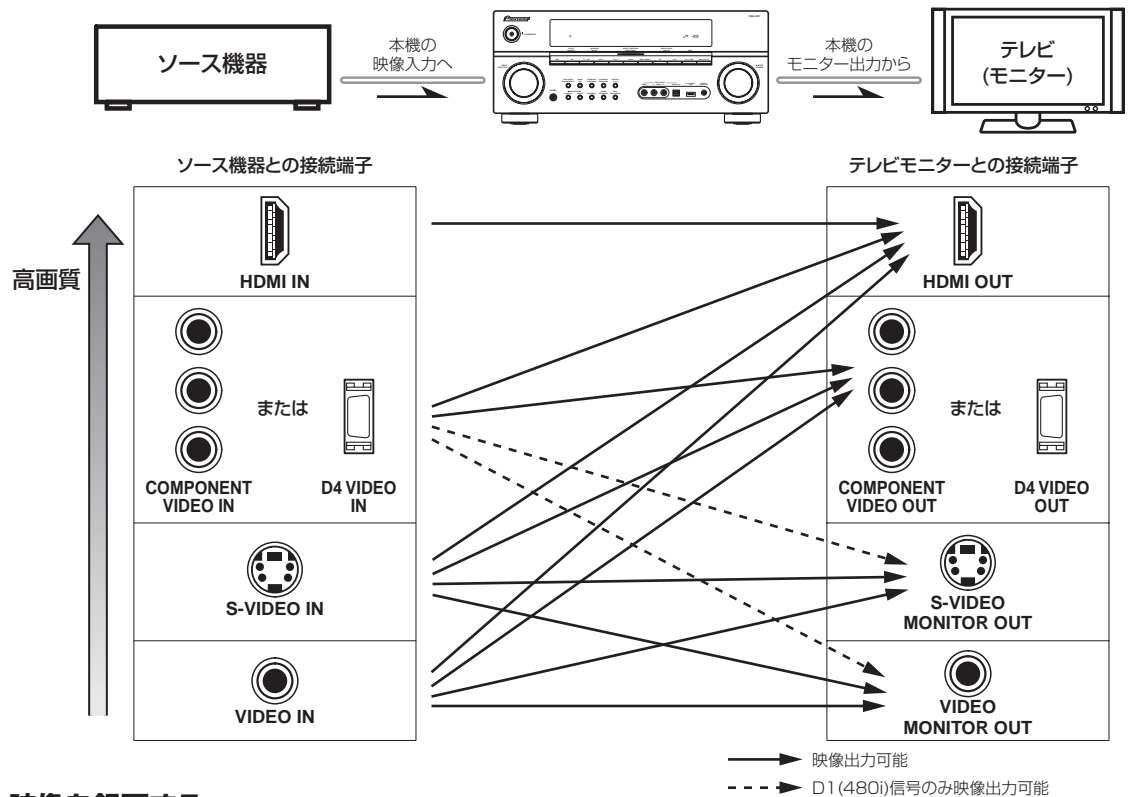
HDMI OUT

COMPONENT VIDEO OUT　または　D4 VIDEO OUT

S-VIDEO MONITOR OUT

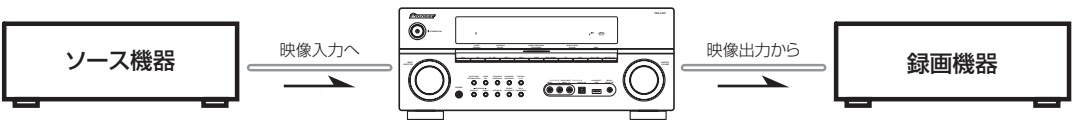
VIDEO MONITOR OUT

映像出力可能

D1(480i)信号のみ映像出力可能

映像を録画する

ソース機器からの映像信号を録画するには必ず同じコードで接続します。

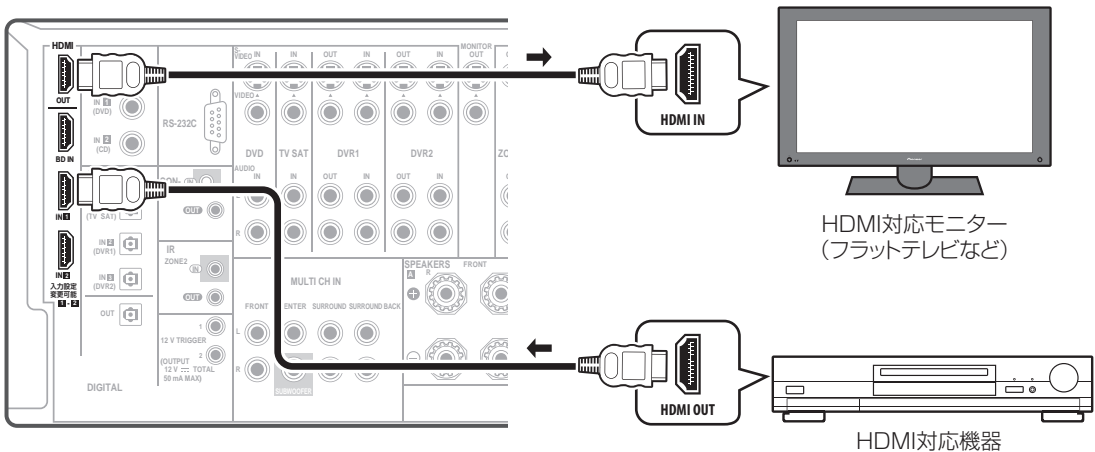
映像コードの組み合わせ

録画機器 / ソース機器	ビデオ(コンポジット)	Sビデオ	コンポーネントまたはD4ビデオ
ビデオ(コンポジット)	○	×	×
Sビデオ	×	○	×
コンポーネントまたはD4ビデオ	×	×	×

- テレビによっては、Sビデオ入力とコンポジット入力の両方を接続していると、信号の有無にかかわらず常にSビデオ入力が優先され、コンポジット端子でのみ接続している機器の映像を見ることができない場合があります。詳しくは、テレビの取扱説明書をご覧ください。
- 入力された信号によっては、ビデオコンバーターが働かずに映像が出力されないことがあります。その場合はビデオコンバーターの設定をOFFにして、入力機器とテレビの両方を同じタイプのコードで接続してください。(→48ページ)

HDMI対応機器の接続

HDMI とは、High-Definition Multimedia Interface の略です。パソコンディスプレイなどで使われている DVI(Digital Video Interface) 端子を拡張した、テレビ向けのデジタルインターフェースの規格です。HDMI 対応機器と HDMI 対応のフラットテレビなどを接続することで、圧縮されていないデジタル映像と音声 (ドルビーデジタル (ドルビーデジタルプラスやドルビー TrueHD も含む)、DTS (DTS-HD Master Audio も含む)、MPEG-2 AAC、SACD またはリニア PCM) を 1 本のケーブルで伝送できます。接続には HDMI ケーブルをお使いください。
HDMI IN に入力された映像信号にはビデオコンバーター機能が働きませんので、必ず HDMI OUT から HDMI 対応のフラットパネルディスプレイなどに接続してください。

HDMI対応モニター
(フラットテレビなど)

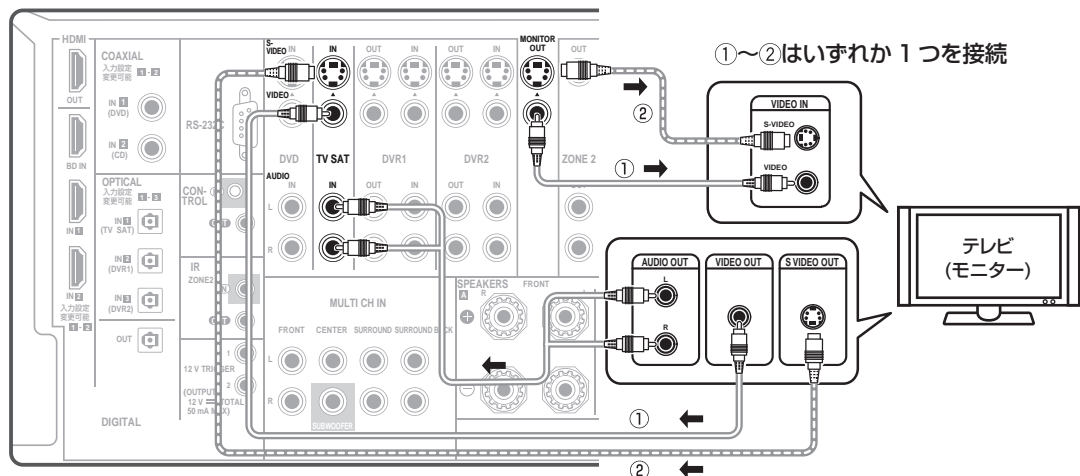
HDMI対応機器

HDMI IN 1 に接続した HDMI 機器を再生するときは、HDMI ボタンまたは入力切換ボタンで本機の入力を HDMI IN 1 に切り換えます（本体の INPUT SELECTOR でも選ぶことができます)。また、HDMI IN に入力された映像/音声信号を他の入力に割り当てることができます。詳しくは、入力の設定(Input Setup)(→81 ページ) をご覧ください。

本機は、HDMI機器との接続を目的として設計されています。DVI機器に接続した場合、DVI機器によっては正常に動作しない場合があります(HDCPに対応していないDVI機器(パソコンのディスプレイなど)には接続できません)。
本機のHDMIインターフェースは以下の規格に基づいて設計されています。
• High-Definition Multimedia Interface Specification

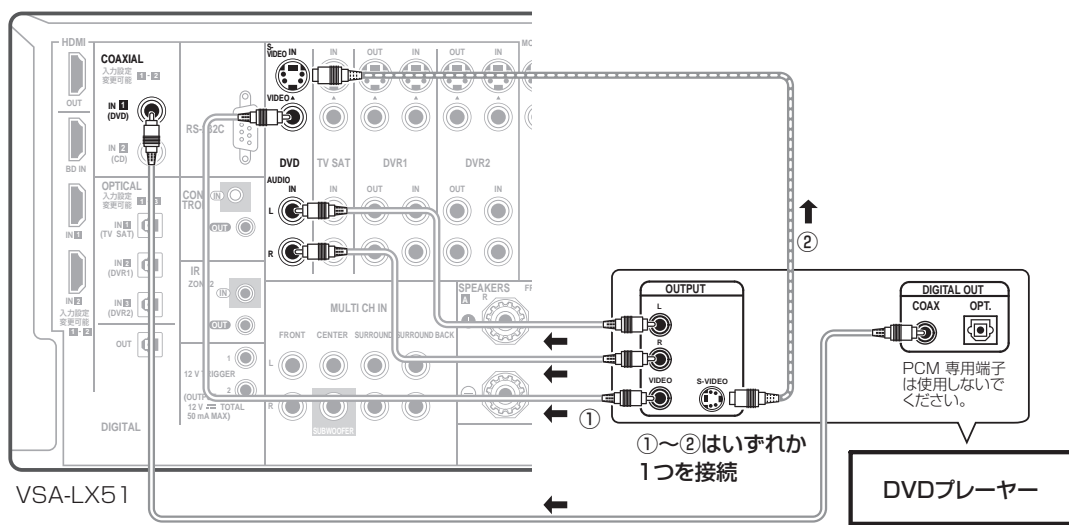
- HDCPに対応していない機器を接続すると「HDCP ERROR」と表示されます。HDCPに対応した機器を接続したときにもこの表示が出ることがありますが、映像がとぎれなく出力されれば不具合ではありません。
- SACD、ドルビーデジタルプラス、ドルビーTrueHD、DTS-HD Master Audio信号にも対応しておりますが、出力機器がそれらのフォーマットに対応している必要があります。

TV（モニター)の接続

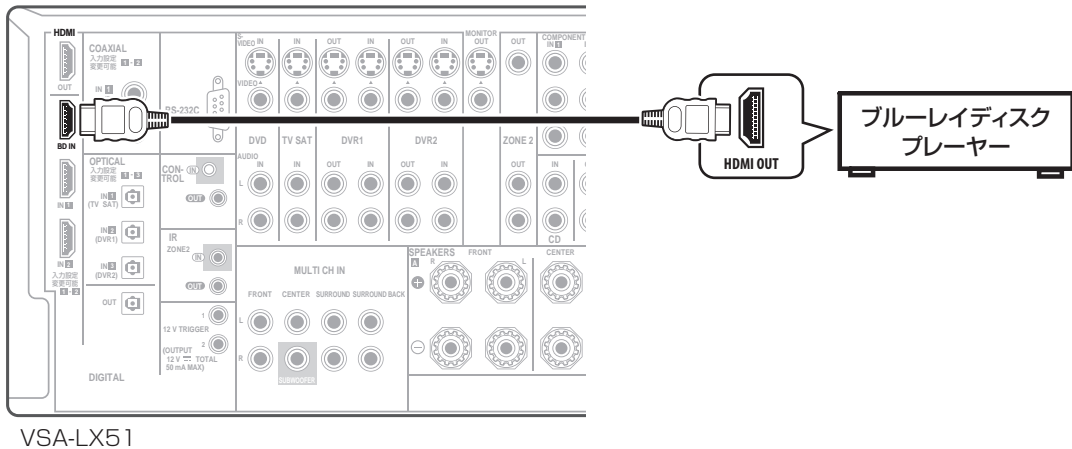
「映像機器の接続について」（➞26ページ)をご覧になり、接続方法を決めてください。
各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」（➞108ページ)をご覧ください。
HDMI端子で接続するときは「HDMI対応機器の接続」（➞27ページ)を、コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/D4ビデオ接続」（➞31ページ)をご覧ください。

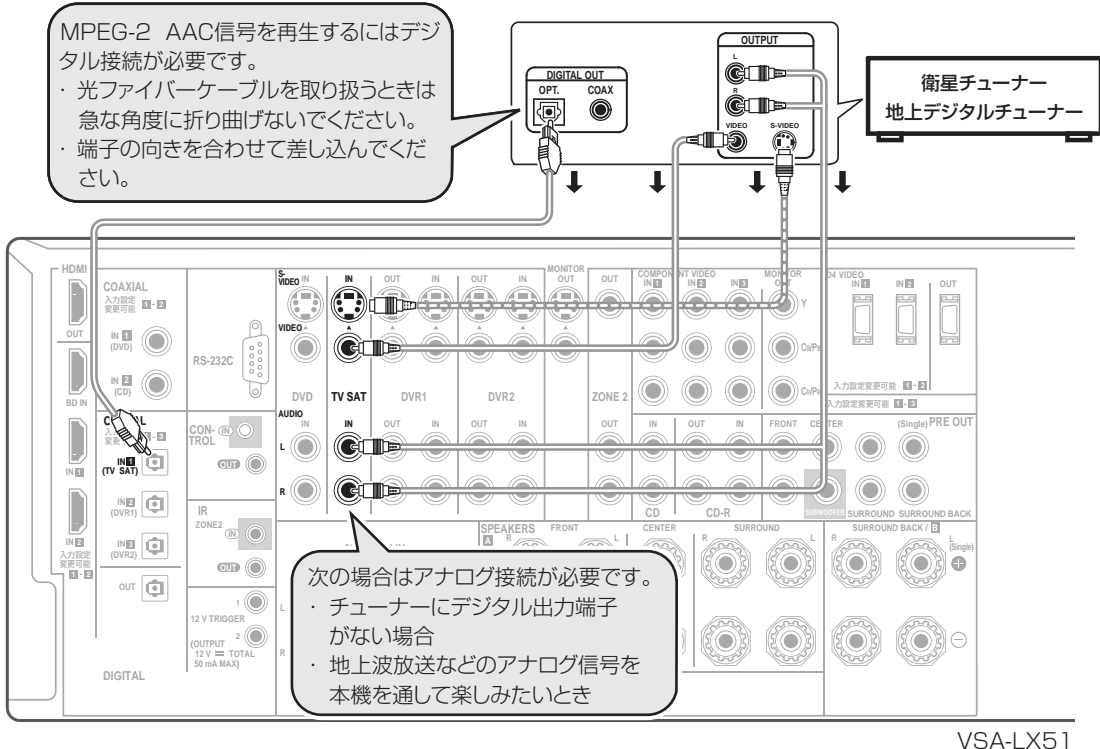
VSA-LX51

TV(モニター)の1つの入力に、Sビデオやコンポーネントビデオなど数種類のコードを複数同時に接続すると、映像が乱れたり汚く映ることがあります。詳しくは、TV(モニター)の取扱説明書をご覧ください。

DVDプレーヤーの接続

「映像機器の接続について」（➞26ページ)をご覧になり、接続方法を決めてください。
各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」（➞108ページ)をご覧ください。
HDMI端子で接続するときは「HDMI対応機器の接続」（➞27ページ)を、コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/D4ビデオ接続」（➞31ページ)をご覧ください。

図とは異なる方法でデジタル接続するときは、入力の設定(Input Setup)が必要です(➞81ページ)。

ブルーレイディスクプレーヤーの接続

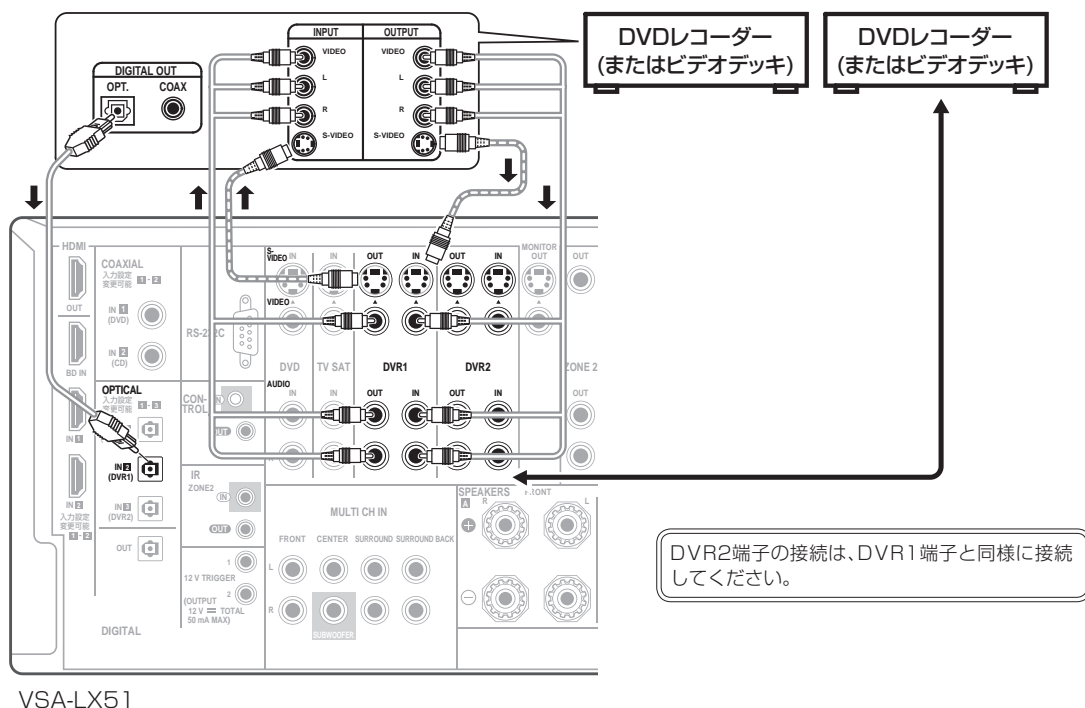
HDMI端子で接続します。

地上デジタル/衛星チューナーの接続

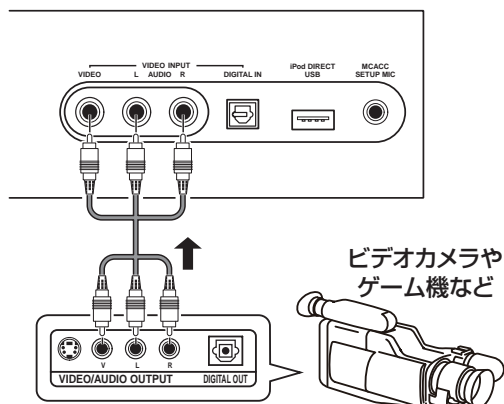
「映像機器の接続について」(→26ページ)をご覧になり、接続方法を決めてください。
各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」(→108ページ)をご覧ください。
HDMI端子で接続するときは「HDMI対応機器の接続」(→27ページ)を、コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/D4ビデオ接続」(→31ページ)をご覧ください。

同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、図と異なる場合は入力の設定(Input Setup)が必要です(→81ページ)。

DVDレコーダーやビデオデッキの接続

「映像機器の接続について」（→26ページ）をご覧になり、接続方法を決めてください。
各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」（→108ページ）をご覧ください。
HDMI端子で接続するときは「HDMI対応機器の接続」（→27ページ）を、コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/D4ビデオ接続」（→31ページ）をご覧ください。
録画することを前提とする場合は、ソース機器と録画機器の映像信号をコンポジットかSビデオのどちらかに統一して接続する必要があります。また音声信号についてもアナログ接続する必要があります。

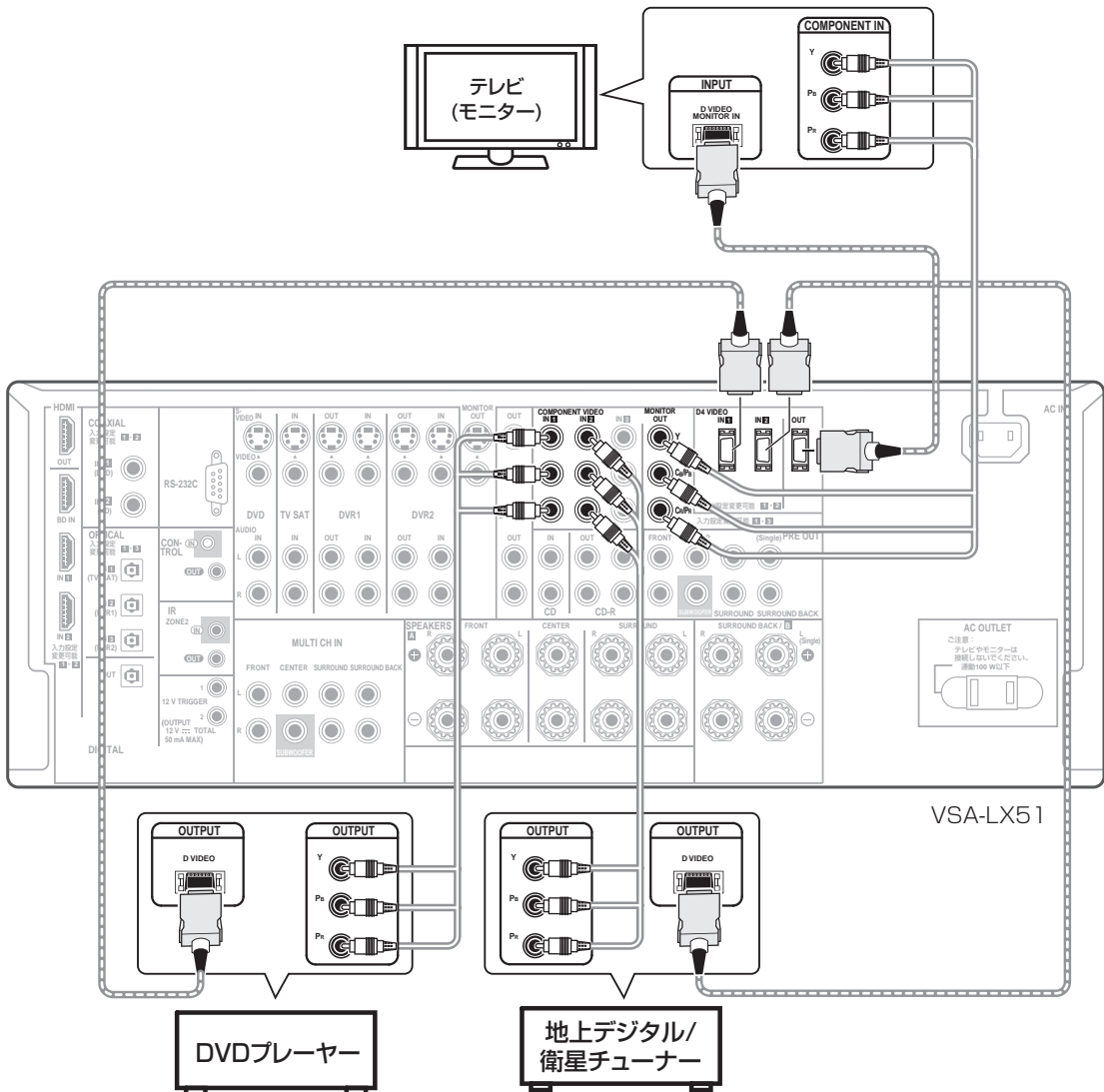
DVR2端子の接続は、DVR1端子と同様に接続してください。

VSA-LX51

前面端子を使った接続

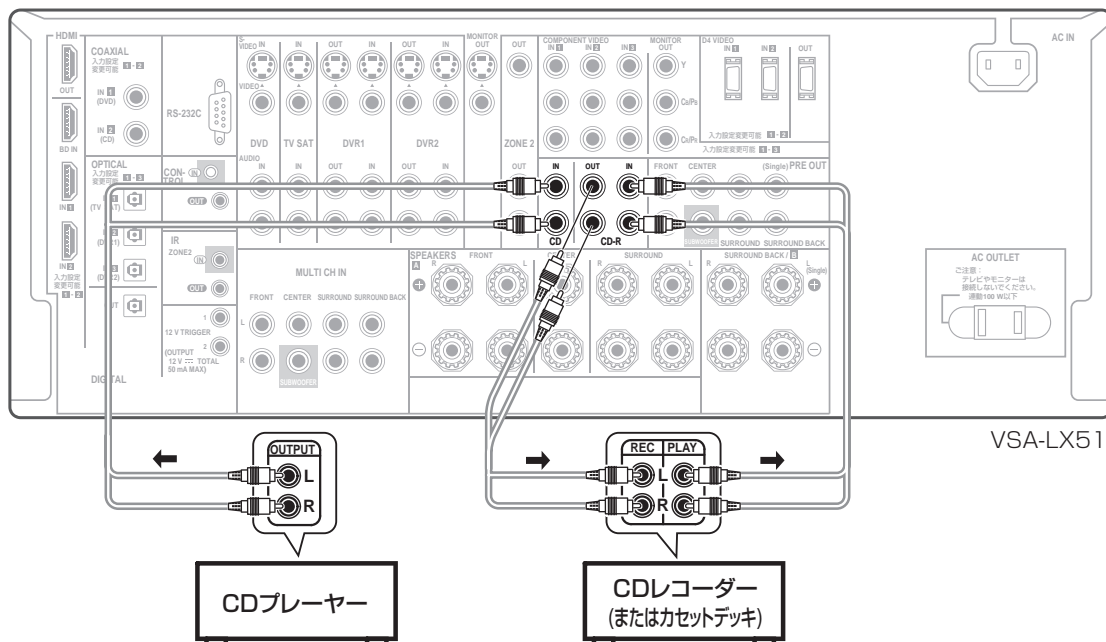
フロントパネルのVIDEO INPUTを使って各機器を接続できます。この機器を再生するときは、入力ファンクション選択でVIDEOを選んでください。

ポータブルDVDプレーヤーなどは、専用の接続コードが付属している場合があります。詳しくは、接続する機器の取扱説明書をご覧ください。

映像信号のコンポーネント/D4ビデオ接続

コンポーネント端子やD端子で接続すると、コンポジットビデオやSビデオ端子で接続したときよりも高品位な映像品質をお楽しみいただくことができます。「映像機器の接続について」(→26ページ)をご覧になり、接続方法を決めてください。各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」(→108ページ)をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは、入力の設定(Input Setup)が必要です(→81ページ)。
録画することを前提とする場合は、ソース機器と録画機器の映像信号をコンポジットかSビデオのどちらかに統一して接続する必要があります。また音声信号についてもアナログ接続する必要があります。

テレビ
(モニター)
COMPONENT IN
INPUT
D VIDEO MONITOR IN
VSA-LX51
OUTPUT
D VIDEO
DVDプレーヤー
地上デジタル/
衛星チューナー

- コンポーネント入力端子とD入力端子を同時に接続することはできません。
  お使いの機器に合わせて、どちらか一方のみ接続してください。
- 映像が乱れる場合はCOMPONENT VIDEO MONITOR OUT端子とD4 VIDEO OUT端子のどちらか一方のみ接続してください。
- コンポーネント端子やD端子で接続するときは、DVDプレーヤー側でコンポーネントビデオの出力設定が必要な場合があります。

アナログ音声機器の接続

デジタル出力のあるCDプレーヤーやCDレコーダーでは、さらに「デジタル音声機器の接続」（→33ページ）もできます。

カセットデッキを設置する場所によっては、再生したときに雑音などが発生する場合があります。これはアンプのトランスによるリーケージフラックス（漏れ磁束）の影響によるものです。このようなときには、設置する場所を変えるか、アンプから離して設置してください。

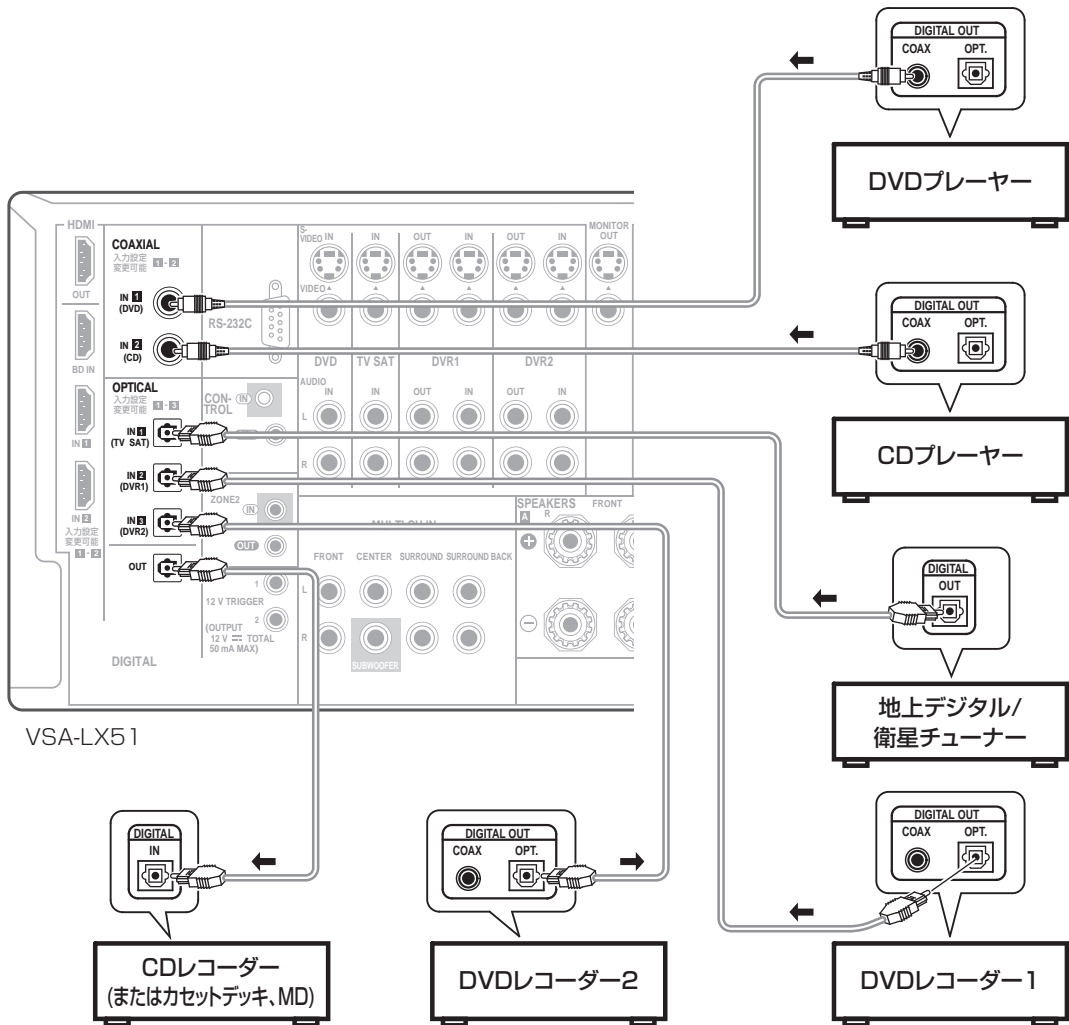
プリアウトを使ったパワーアンプの接続

サラウンドバックシステムの設定（→62ページ）と連動して、PRE OUT端子のSURROUND BACKから出力される音声が以下のように変わります。他のパワーアンプなどを接続する場合はご注意ください。

[Normal]のとき：サラウンドバックチャンネルの音声
[Speaker B]のとき：ダウンミックスされた2chの音声
[Front Bi-Amp]のとき：フロントチャンネルと同じ音声
[ZONE 2]のとき：ZONE 2で選択されている入力ファンクションのアナログ2chの音声（ZONE 2 ONのときのみ）

この接続を行った場合、個々のアンプの能力やボリューム位置などにより音場補正を正確に行うことができない場合があります。

デジタル音声機器の接続

ドルビーデジタルやDTSソフトを再生するには、デジタル接続が必要です。接続は同軸ケーブルまたは光ファイバーケーブルで行います（1つの機器に対してどちらか一方のみで接続します）。
各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」（→108ページ）をご覧ください。
HDMI端子で接続するときは「HDMI対応機器の接続」（→27ページ）をご覧ください。

- どのデジタル入力端子をどの機器に使用するかは自由に変更することができます。工場出荷時の設定（リアパネル表記）と異なる接続を行う場合は入力の設定（Input Setup）（→81ページ）が必要です。
- HDMI入力端子から入力した信号はデジタル出力端子からは出力されません。

ホームシアター入門
各部の名称
接続
再生
応用操作
設定
リモコン
エキスパート
参考／技術資料
困ったとき

電源コードの接続

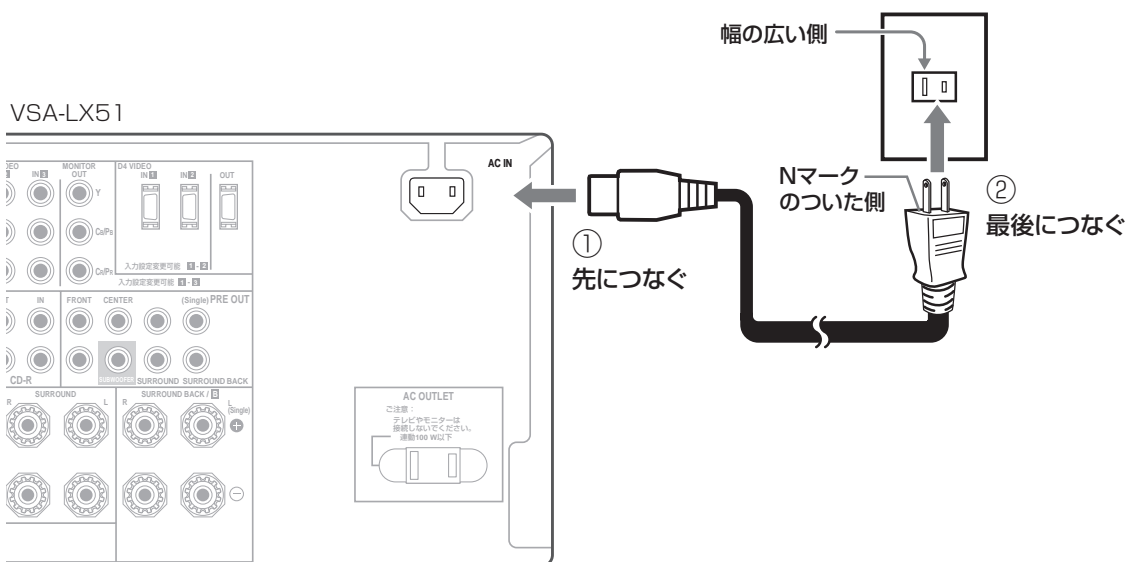
すべての接続が終了したら、電源コードを家庭用電源コンセント(AC 100 V)に接続します。

電源コードのつなぎかた

本機の電源コードは極性管理されています。音質向上のため、極性を合わせせることをお勧めします。下図のように電源プラグのNマークのある側をコンセントの幅の広い方（アース側）に合わせて差し込んでください。

警告

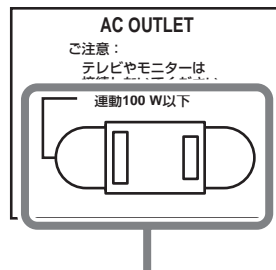
- **本機の電源コードは着脱式になっていますが、付属しているコード(電流容量15A、機器側3Pプラグインソケット方式)以外の電源コードはご使用にならないでください。**
- 本機のAC INLETのアース端子は本機のシャーシに接続されていません。

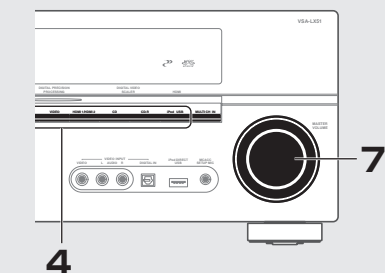
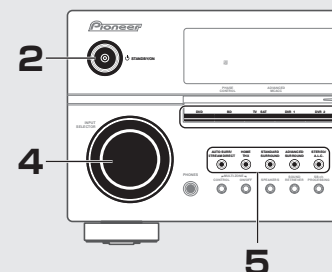
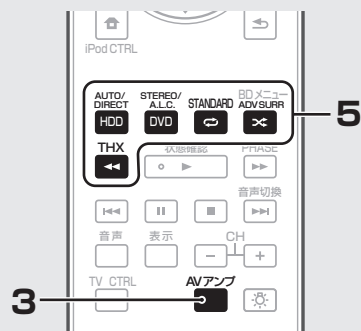
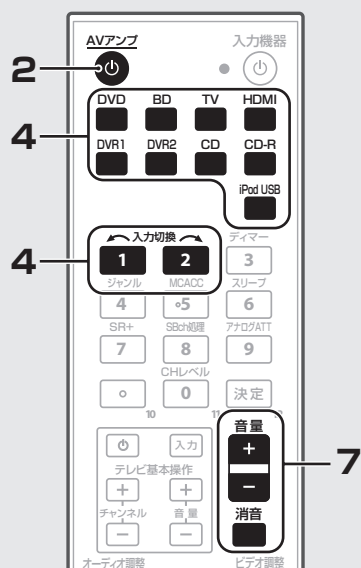
- 電源コードをコンセントに差し込むと本機の電源が入ります。この際、15秒間のHDMIに関する初期化動作を行います。初期化中はHDMIインジケーターが点滅しますので、点滅が終了してから本機の操作を行ってください。「HDMIコントロールモードを設定する(HDMI Control Setup)」(➞95ページ)を「OFF」にすることで、この処理は行われなくなります。
- 旅行などで長期間本機を使用しない場合は、必ず電源コンセントから電源コードを抜いておいてください。長期間、電源コードを抜いた状態でも、本機で設定した各種設定が消去されることはありません。
- 電源コードを抜くときは必ず本体をスタンバイ状態にしてください。

予備コンセント(AC OUTLET)の接続

[連動100 W以下]

本機の電源スイッチのON/STANDBY（OFF)の切り換えに連動して、接続した機器の電源をON/OFFできます。
接続した機器の消費電力が100 Wを超えないようにしてください。

注意

- 消費電力がパネルに表示されているワット数を超えるような電気器具(暖房、アイロン、テレビ、トースター、ドライヤーなど)は絶対に接続しないでください。機器の故障や火災の恐れがあります。
- 表示されている消費電力が本機のパネル表示値より少なくてもテレビ、サブウーファー、パワーアンプは接続しないでください。電源を入れたときや大きな音で再生する場合に大きな電流が流れ、本機の故障の原因となることがあります。

アンプから音を出す　～基本再生～

接続した機器を再生するときの手順です。本機では、「音声入力信号の切り換え」(→36ページ)で入力信号を選んで、「リスニングモードでいろいろな音を楽しむ」(→37ページ)でリスニングモードを選ぶことが主な操作です。

1　再生する機器の電源を入れる。

2　AVアンプ

本機の電源を入れる。

(本体の場合は、⏻STANDBY/ONを押します。)

3　AVアンプ

リモコンをアンプ操作モードにする。

4　入力切換 1 2 / DVD BD TV HDMI DVR1 DVR2 CD CD-R iPod USB

再生する機器を選ぶ。

ボタンを押すたびに入力機器が切り換わります(本体の場合はINPUT SELECTORで選択します)。

マルチコントロールボタン(本体の場合は入力ファンクション切換ボタン)で直接選択することもできます。

また、必要に応じて音声入力信号の種類を選びます。「音声入力信号の切り換え」(→36ページ)

5　AUTO/DIRECT HDD　STEREO/A.L.C. DVD　STANDARD　ADV SURR　THX

お好みのリスニングモードを選ぶ。

「リスニングモードでいろいろな音を楽しむ」(→37ページ)

6　再生機器の再生を開始する。

7　音量 + −　消音

音量を調節する。

−80 dB (最小値)から+12 dB (最大値)の範囲で調節できます。

(本体の場合は、MASTER VOLUMEで調節します)

一時的に音を消したいときは、消音ボタンを押します。もう一度押すか、音量を調節することで解除します。

音量について

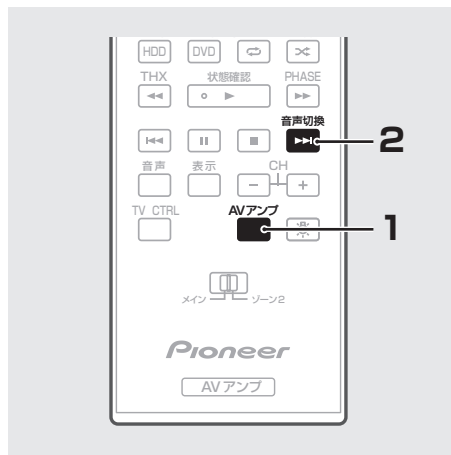
MCACCなどにより正確にチャンネルレベルを補正した場合、0 dBが映画館での再生音量とほぼ同等になります。

(0 dB は大音量です。近隣住宅や小さなお子様などへのご配慮をお願いします)

本機の対応フォーマット

- デジタル(光／同軸)入出力端子経由の対応信号:
  ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AAC、MPEG-4 AAC、WMA 9Pro、PCM (サンプリング周波数:32 kHz、44.1 kHz、48 kHz、88.2 kHz、96 kHz)
- HDMI端子経由の対応信号:
  上記のすべて、ドルビーTrueHD、ドルビーデジタルプラス、DTS-EXPRESS、DTS-HD Master Audio、SACDおよびDVDオーディオ(192 kHz含む)

音声入力信号の切り換え

本機では各入力についてアナログとデジタルの入力信号を切り換えることができます。

- デジタル入力端子、およびHDMIが割り当てられていない機器の音声入力は、ANALOGに固定されています。
- 非対応のデジタル信号は再生できません。その場合はアナログ接続を行い、音声入力でANALOGを選択してください。
- カラオケ機器のマイク音声、およびアナログオーディオのみ収録されているLDの音声はデジタル出力されません。これらを再生するには必ずANALOGを選択してください。

1 AVアンプ **リモコンをアンプ操作モードにする。**

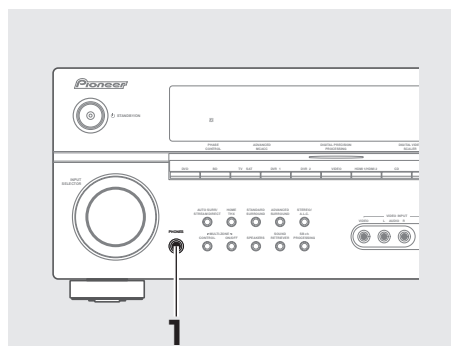
2 音声切換 **再生したい入力信号を選択する。**

音声切換ボタンを押すたびに、以下のように切り換わります。ただし、「HDMI」は入力がHDMI1またはHDMI2のときのみ選択できます。

→ AUTO → ANALOG → DIGITAL → HDMI → PCM →（AUTOに戻る）

- AUTOにしたときは、HDMI→DIGITAL→ANALOGの優先順位で自動的に入力信号を選択します。
- AUTOが選択されているとCDなどのPCM音声を再生したときに曲の頭が切れることがあります。その場合はPCMを選択してください。
- PCM選択時は、PCM音声のみ出力します。PCM音声専用のため、PCM以外の信号では音が出ずにノイズが出ることがあります。
- HDMI選択時、「HDMI音声出力の設定」（→45ページ）で「THROUGH」を設定していると、音声は本機からではなくテレビから出力されます。

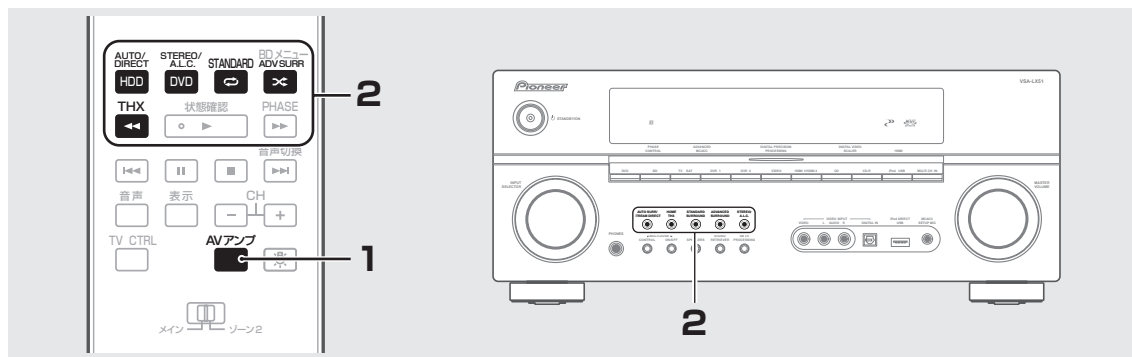
- 音声切換ボタンでANALOGを選択した状態で DTS対応のLDを再生すると、DTSの原信号がそのまま再生されるため、ノイズが発生します。入力信号は必ずDIGITALを選択してください。
- DVDプレーヤーの機種によっては、再生できるデジタル信号に制限があります（DTS信号を出力しないなど）。詳しくは、お使いのDVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

ヘッドホンで聴く

1 **ヘッドホンをPHONES端子に差し込む。**

差し込むとスピーカーから音は出なくなります。

- リスニングモードは「STEREO」、「A.L.C」、または「PHONES SURROUND」のみ選択できます。
- MCACCはOFFになり、MCACCインジケーターも消灯します。
- 各リスニングモードの効果は2chにダウンミックスされます。
- ヘッドホンを差し込むとスピーカーから音は出なくなります。ただし、MULTI CH IN入力のときはサブウーファーからのみ音が出ます。
- MULTI CH IN入力のときは、ダウンミックスされた音声をヘッドホンから出力します。
- ヘッドホンを差し込んでいるときは、システムセットアップを行うことはできません。

リスニングモードでいろいろな音を楽しむ

再生機器からの信号にいろいろな音場効果を加えることができます。

1 AVアンプ リモコンをアンプ操作モードにする。

2 リスニングモードを選ぶ。

タイプによっては、ボタンを押すたびにモードの種類を切り換えて選択できます。
それぞれのリスニングモードについて以下の設定が選べます。

モードのタイプ	ボタン	概要	選択肢	用途
HOME THX	リモコン THX 本体 HOME THX	映画の再生に適します。デコード処理後THX独自技術を付加することで、映画館や収録スタジオの音場が再現されます。 ＊ THX時は、「オーディオ調整機能」の一部使用が制限されます。 *入力信号や設定により、リスニングモードの選択肢が変わります。*	■2ch信号入力時 Pro Logic IIx MOVIE+THX Pro Logic+THX Neo:6 CINEMA+THX Pro Logic IIx MUSIC+THX Neo:6 MUSIC+THX Pro Logic IIx GAME+THX THX SELECT2 GAMES ■マルチチャンネル信号入力時 THX Surround EX Pro Logic IIx MOVIE+THX THX SELECT2 CINEMA Pro Logic IIx MUSIC+THX THX SELECT2 MUSIC THX SELECT2 GAMES	 映画 古い映画 映画 音楽 音楽 ゲーム ゲーム 映画/音楽 映画 映画 音楽 音楽 ゲーム
STANDARD SURROUND	リモコン STANDARD 本体 STANDARD SURROUND	サラウンド再生のためのデコードを行います。 2chソースはマトリックス･サラウンド･デコードをします。 *入力信号や設定により、リスニングモードの選択肢が変わります。*	■2ch信号入力時 Pro Logic IIx MOVIE Pro Logic IIx MUSIC Pro Logic IIx GAME Pro Logic Neo:6 CINEMA Neo:6 MUSIC Neural THX ■マルチチャンネル信号入力時 Pro Logic IIx MOVIE Pro Logic IIx MUSIC Dolby Digital EX DTS-ES DTS Neo:6	 映画 音楽 ゲーム 古い映画 映画 音楽 音楽 映画 音楽 映画/音楽 映画/音楽 映画/音楽

基本再生

モードのタイプ	ボタン	概要	選択肢	用途
ADVANCED SURROUND	リモコン ADV SURR 本体 ADVANCED SURROUND	デコード処理とパイオニア独自の技術を組み合わせたサラウンド再生モードです。 *数種類からの選択が可能です。（デコード処理を変更することはできません。）*	ACTION DRAMA SCI-FI MONOFILM ENT.SHOW EXPANDED TV SURROUND ADVANCED GAME SPORTS CLASSICAL ROCK/POP UNPLUGGED EXT.STEREO PHONES SURROUND	アクション映画 ドラマ SF映画 古い映画 ミュージカル/映画 映画/音楽 TV放送 ゲーム スポーツ クラシック 音楽 アコースティック 音楽 ヘッドホン使用時
STEREO/ A.L.C.	リモコン STEREO/ A.L.C. DVD 本体 STEREO/ A.L.C.	すべての信号を2ch（最大2.1ch）で再生します。 *通常のステレオ再生とフロントスピーカーとサブウーファーのみでサラウンド再生を行うフロントサラウンド・アドバンスの選択が可能です。*	STEREO A.L.C. F.S.SURR FOCUS F.S.SURR WIDE	音楽 映画/音楽 映画/音楽 映画/音楽
AUTO SURROUND/ STREAM DIRECT	リモコン AUTO/ DIRECT HDD 本体 AUTO SURR/ STREAM DIRECT	入力信号に収録されたチャンネル数に応じて、再生チャンネル数を自動的に選択します。 （工場出荷時はAUTO SURROUNDが選ばれています）	AUTO SURROUND DIRECT PURE DIRECT	すべてのソース すべてのソース アナログ信号、PCMソース、SACD

より詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」（→109ページ）をご覧ください。

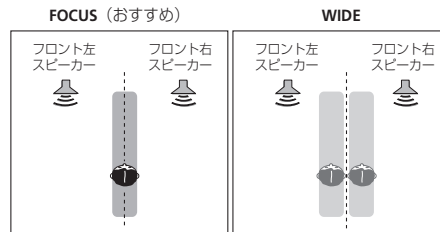
HOME THX および STANDARD SURROUNDモードについて
以下の4つの要素が複雑に関係するため、選択肢は場合によりさまざまに変化します。
「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→109ページ)に組み合わせ表があります。
- サラウンドバックシステムの設定(→62ページ)
- 入力信号の種類
- 接続(設定)したサラウンドバックスピーカーの本数(→75ページ)
- SBch処理の設定(→42ページ)
- ◻◻Pro Logicは、最大5.1chまでの出力となります。
- サラウンドバックスピーカーが1本の接続(設定)の場合、5.1ch信号入力時でも◻◻Pro Logic IIx MOVIEは選択できません。
- ヘッドホン挿入時はHOME THXモードを選択することができません。

ADVANCED SURROUNDモードについて
- 詳しくは、「ADVANCED SURROUNDモードの種類と効果」(→111ページ)をご覧ください。

STEREOモードについて
- 設定や入力ソースにより、サブウーファーからも音が出力される場合があります。

A.L.C.(オートレベルコントロール)について
- A.L.C.(オートレベルコントロール)を選択すると、ポータブルオーディオプレイヤーなどに録音された音楽ソースごとの音量差を、本機で自動的に均一にしてステレオ再生します。

FRONT STAGE SURROUND(フロントサラウンド・アドバンス)について
F.S.SURR FOCUSまたはF.S.SURR WIDEを選ぶことで、左右のフロントスピーカーとサブウーファーのみで自然なサラウンド再生を行います。それぞれの効果は以下のとおりです。
- F.S.SURR FOCUS:臨場感のある自然なサラウンド効果が得られます。フロントスピーカーから等距離の直線上(前後は移動可能)で視聴してください。
- F.S.SURR WIDE:FOCUSモードよりも横に広い範囲でサラウンド効果が得られます。お二人で横に並んで視聴するときに便利です(この場合、Auto MCACC(→12ページ)でオートセットアップを行うことで、より自然なサラウンド効果が得られます)。

FOCUS(おすすめ)　WIDE
フロント左スピーカー　フロント右スピーカー　フロント左スピーカー　フロント右スピーカー

AUTO SURROUND/STREAM DIRECTモードについて
入力信号に収録されたチャンネル数に応じて、再生チャンネル数を自動的に選択します。
- CDなどの2ch信号入力時
  →ステレオ再生
- Dolby Surround信号入力時
  →◻◻Pro Logic IIx MOVIEなど
- デジタル5.1ch信号入力時
  →Dolby Digital、DTSなど
- 6.1ch再生検出信号付きデジタルマルチch信号入力時
  →◻◻Pro Logic IIx MOVIE、Dolby Digital EX、DTS-ES

「AUTO SURROUND」、「DIRECT」、「PURE DIRECT」の3種類について、詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→109ページ)をご覧ください。
- PURE DIRECTモードでは、Speaker Bからは音が出ません。
- PURE DIRECTモードでPCM以外のソースを再生すると、再生直前にノイズが出ることがあります。この場合はDIRECTかAUTO SURROUNDにすることをお勧めします。

デコードとは
デジタル信号処理回路などにより、圧縮記録されたデジタル信号を、もとの信号に変換させる技術です。また、2ch の音源をマルチ ch 化させたり、5.1ch 信号を 6.1ch や 7.1ch に伸長させる技術もデコード（マトリックス･デコード）と呼ぶことがあります。

AUTO SURROUND/STREAM DIRECT 選択時の音の設定や機能対応表

以下の表で○のついている設定や機能は、設定されているとおりの内容が対応されることを表しています。○のついていない設定や機能は対応されないことを表し、(　)で記載されている内容は強制的にその設定になることを表します。

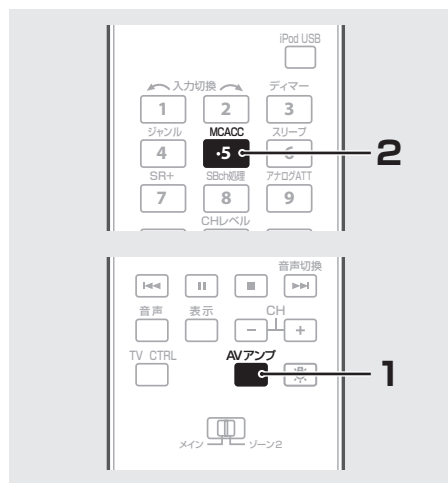
	AUTO SURR	STREAM DIRECT			
		DIRECT	PURE DIRECT		
			アナログ信号入力時 *1	圧縮音声入力時	PCM/DSD入力時
Speaker Setting	○	○		○	○
Channel Level	○	○	○	○	○
Speaker Distance	○	○		○	○
Acoustic Cal EQ	○	○		(OFF)	(OFF)
Standing Wave	○	○		(OFF)	(OFF)
PHASE CONTROL	○	○		(OFF)	(OFF)
X-Curve	○	○		(OFF)	(OFF)
サウンドディレイ、オートディレイ	○	○		○	○
ハイビット	○	○		(OFF)	(OFF)
アナログATT	○	○		–	–
DIGITAL SAFETY	○	○		(OFF)	(OFF)
サラウンドバックch処理	○	(AUTO)		(AUTO)	(AUTO)
バーチャルサラウンドバックモード	○	(OFF)		(OFF)	(OFF)
デジタルノイズリダクション機能	○	(OFF)		(OFF)	(OFF)
ミッドナイト／ラウドネスモード	○	(OFF)		(OFF)	(OFF)
低音の調整／高音の調整	○	(0 dB)		(0 dB)	(0 dB)
ダイアログエンハンスメント機能	○	(OFF)		(OFF)	(OFF)
ダイナミックレンジコントロールの設定	○	(OFF)		(OFF)	–
LFEアッテネーターの設定	○	○		○	○
SACDゲインの設定	○	○		–	○
サウンドレトリバー機能	○	(OFF)		(OFF)	(OFF)
センターイメージの調整	○	○		○	–

*1　アナログ信号が、DSPを経由しないで直接アンプに入力されるモードです。(ANALOG DIRECT)

- DIRECTとPURE DIRECTモード選択時は、SBch処理をONに設定することができません。この場合、AUTOまたはOFFが選択されるため、AUTO SURROUNDとはデコード状態が変わることがあります。詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→109ページ)をご覧ください。
- マルチチャンネル信号入力時、すべてのスピーカーから音を出したいときはAUTO SURROUNDモードにして、SBch処理をONに設定することをお勧めします。

いろいろな状況に合わせた機能を選択/調整する

いろいろな状況ごとに最適な音場補正の設定を選択する

「Auto MCACC」や「Manual MCACC」で、あらかじめ設定した音場補正(MCACC MEMORY)を選択します。

1 AVアンプ **リモコンをアンプ操作モードにする。**

2 MCACC •5 **MCACC MEMORYを選ぶ。**

押すたびにMCACC MEMORYが切り換わります。
MCACC MEMORY 1～6のいずれかを選択しているときは、ADVANCED MCACCインジケーターが点灯します。

- スピーカーシステムの設定は、すべてのMCACC MEMORYで共通の設定です。
- 工場出荷時は「M1:MEMORY1」に設定されています。
- MCACCボタンを押してから⇦/⇨ボタンで選ぶこともできます。
- ヘッドホン使用時には効果がありません。

いろいろな状況に合わせた音場補正で最適なサウンドを楽しむ

MCACCではリスニングポジションにおける音場補正を行うので、映画を観る位置とゲームをする位置、音楽を聴くときのソファーの位置など、それぞれのリスニングポジションに応じて異なる補正を行う必要があります。各ポジションであらかじめ音場補正された、それらのMCACC MEMORYを選択することで、最適なサウンドをお楽しみいただくことができます。

活用例

たとえば、以下の状況に応じた音場補正をそれぞれのMCACC MEMORYへ事前に設定しておき、MCACCボタンを押してMCACC MEMORYを合わせるだけで、それぞれの状況に応じた音場補正が適用されます。

- 映画はモニターから離れた位置で観たい
- ゲームはモニターの近くで楽しみたい
- 普段のリスニングポジションとは違う位置のソファーで音楽を聴きたい

手順例

STEP1 →12ページ
映画を観るときに最適な音場補正を行う
映画を観るポジションにマイクを設置して「Auto MCACC」を行う。

- 設定が終了したら「Memory Rename」で「MOVIE」に名前を変更することをお勧めします。(→73ページ)

STEP2 →12、60ページ
ゲームを楽しむときに最適な音場補正を行う
ゲームをするポジションにマイクを設置して「Auto MCACC」の「Keep SP System」を行う。

- STEP1で設定したMEMORYとは別のMEMORYに保存します。
- 設定が終了したら「Memory Rename」で「GAME」に名前を変更することをお勧めします。(→73ページ)

STEP3 →12、60ページ
ソファーで音楽を聴くときに最適な音場補正を行う
ソファーの位置にマイクを設置して「Auto MCACC」の「Keep SP System」を行う。

- STEP1/2で設定したMEMORYとは別のMEMORYに保存します。
- 設定が終了したら「Memory Rename」で「SOFA」に名前を変更することをお勧めします。(→73ページ)

STEP4
MCACCボタンを押して、映画を観るときは「MOVIE」、ゲームを楽しむときは「GAME」、違う位置にあるソファーで音楽を聴くときは「SOFA」を選びます。
それぞれのリスニングポジションで最適な音場補正が設定されます。

上記の「活用例」と「手順例」を参考にして、さまざまな音場補正の設定をMCACC MEMORYに保存して名前を変更することができます。たとえば、同じリスニングポジションでも「SYMMETRY」、「ALL CH ADJUST」、「FRONT ALIGN」のEQ補正を聞きくらべたいときは、同じリスニングポジションでそれぞれの補正を行い、「Memory Rename」(→73ページ)で「SYMMETRY」、[ALL ADJ]、[F.ALIGN]と名前を変更します。そのあと、それぞれのMCACC MEMORYを選択することで聞きくらべることができます。

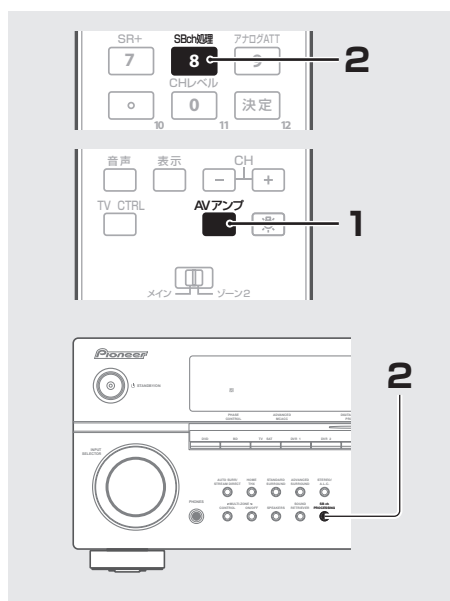
サラウンドバック ch 処理を切り換える

サラウンドバックスピーカーを接続しているときに、サラウンドバックch音声の処理を切り換えます。また、サラウンドバックスピーカーを接続していないときは、仮想のサラウンドバック音声を創り出します。設定項目は以下のとおりです。

サラウンドバックスピーカーを接続しているとき

SBch OFF：サラウンドバックchへのデコード処理は行わず、サラウンドバックchから音声は出力されません。
SBch ON：常にサラウンドバック ch へのデコード処理を付加するため、最大の出力チャンネル数でお楽しみいただけるモードです。
SBch AUTO：入力信号の種類を検出し、サラウンドバック ch 信号を検出したときのみサラウンドバックスピーカーからデコード処理された音声を出力します。ソフトに最も忠実な再生となります。

サラウンドバックスピーカーを接続していないとき

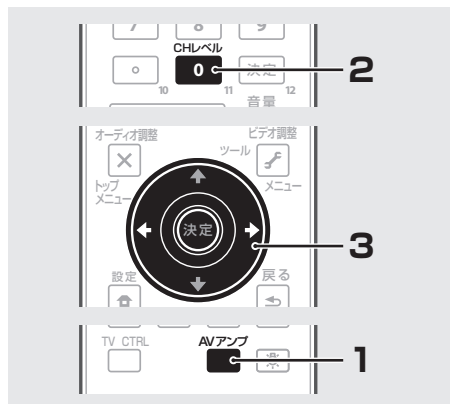
Virtual SB OFF：仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出しません。
Virtual SB ON：リスニングモードによって、仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出します。
Virtual SB AUTO：入力信号やリスニングモードによって、仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出します。
入力信号、リスニングモードの種類や組み合わせによって、サラウンドバックスピーカーからの音の出力が異なります。詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」（→109ページ）の表をご覧ください。

1 AVアンプ　**リモコンをアンプ操作モードにする。**

2 SBch処理 8　**SBch処理モードを選択する。**

ボタンを押すたびに、ONとAUTOおよびOFFが切り換わります。

- 以下のときはSBch処理モードまたはバーチャルサラウンドバックモードを切り換えることができません。
  - MULTI CH IN入力を選んでいるとき
  - 「Speaker Setting」（→75ページ）で、サラウンドスピーカーがNO（無し）に設定されている、または「Surround Back System」（→62ページ）でSpeaker B、Front Bi-Amp、ZONE 2が選ばれているとき
  - 「オーディオ調整機能」（→45ページ）のHDMI音声出力を「THROUGH」に設定しているとき
  - ヘッドホンを挿入しているとき
  - STREAM DIRECTモードのとき
  - STEREOまたはフロントサラウンド･アドバンスモードが選択されているとき
  - AUTO SURROUNDモードで入力信号が2chのとき
- サラウンドchが収録されていないソース（シーン）では、仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出すことはできません。

再生中にスピーカーの出力レベルを調整する

再生している音を聴きながら、チャンネルごとに出力レベルを調整できます。

1 AVアンプ　**リモコンをアンプ操作モードにする。**

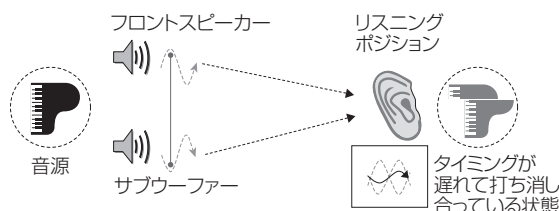
2 CHレベル 0　**スピーカーのチャンネルを選択する。**

ディスプレイに「L ◄ +0.5dB►」などと表示されます。押すたびにチャンネルが切り換わります。

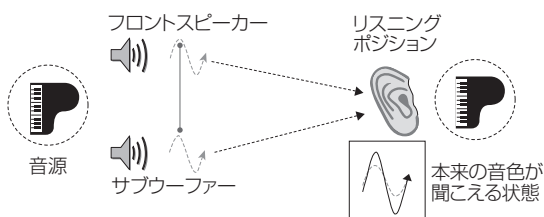
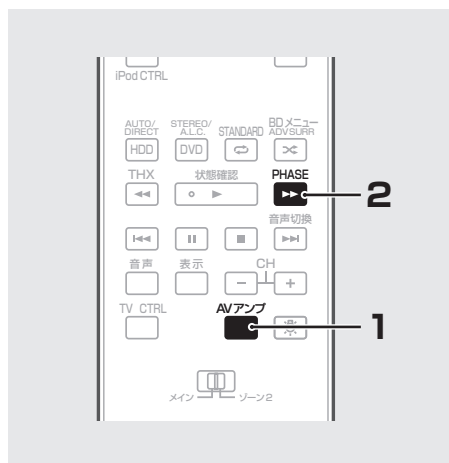
3 　**出力レベルを調整する。**

－10.0dBから＋10.0dBの範囲内で、0.5dB間隔で調整できます。

位相を合わせて音の打ち消し合いを防ぐ（PHASE CONTROL）

マルチチャンネル再生する際、LFE（超低域）信号や各チャンネルに含まれる低音成分はサブウーファーや他の最適なスピーカーに振り分ける処理がされます。しかし、この処理には原理上、位相がズレてしまう周波数(群遅延)が発生し、低域だけが遅れて聞こえたり他のチャンネルとの干渉により低音の打ち消し合いが発生してしまうなどの問題があります。本機では、PHASE CONTROLモードをONにすることで、原音に忠実な力強い低音を再現できます。工場出荷時はONに設定されています。通常はONでのご使用をお勧めします。
（位相とは2つの音波の時間的関係を表しています。2つの音波の山と山が合っている状態を位相が合っている、合っていない状態を位相がズレていると言います。）

- リズムがぼやけてはっきりしない
- 低音の量感が失われている
- 楽器のリアリティがない

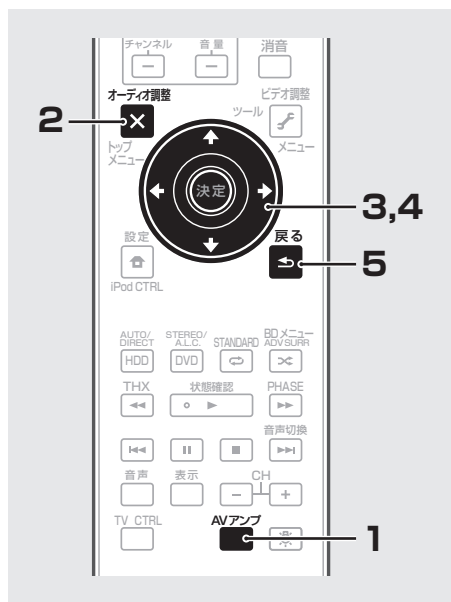
PHASE CONTROL ON

フロントスピーカー
リスニング
ポジション
音源
サブウーファー
本来の音色が
聞こえる状態

- リズムがはっきりする
- 低音の量感が失われない
- 楽器のリアリティを感じる

1 AVアンプ　**リモコンをアンプ操作モードにする。**

2 PHASE　**PHASE CONTROLモードをONにする。**
ボタンを押すたびに、ONとOFFが切り換わります。

- PHASE CONTROL機能はヘッドホン使用時にも効果があります。
- サブウーファー本体にPHASE切換スイッチがついているときは、プラス側（0°側）に設定してください。ただし、本機のPHASE CONTROLをONにしても効果が分かりにくいときは、サブウーファーの固体差が考えられますので、効果の大きい方を選んでください。また効果がわかりにくいときはサブウーファーの向きや場所を少しずつ変えてみることもお勧めします。
- サブウーファー内蔵のLowpassフィルタスイッチをOFFにしてください。OFFにできないサブウーファーはカットオフ周波数を高く設定してください。
- スピーカーの距離を正しく設定しないと、PHASE CONTROLの効果が正しく出ない場合があります。
- 以下のときはPHASE CONTROLモードをONにできません。
  - PURE DIRECTモードがオンのとき
  - MULTI CH IN入力を選んでいるとき
  - 「オーディオ調整機能」（→45ページ）のHDMI音声出力を「THROUGH」に設定しているとき

オーディオ調整機能を使用する

ここでは、以下の表にある音声に関する「設定項目」をお好みで設定します。それぞれの機能の内容をご確認のうえ、お好みで設定する項目を選んで設定を行ってください。

入力信号や本機の設定などによって、調整することができない項目があります。その場合は設定項目として表示されません。

1 AVアンプ　**リモコンをアンプ操作モードにする。**

2 オーディオ調整　**オーディオ調整機能にする。**

3

設定項目を選ぶ。

以下の表の設定項目から、お好みで調整したい項目を選びます。

4

手順3で選んだ項目の調整を行う。

以下の表の設定内容のとおりにお好みで調整します。

5 戻る　**オーディオ調整を終了する。**

●：工場出荷時の設定

設定項目	設定・効果の内容	表示と設定
⇕◀M1. MEMORY 1▶ MCACCメモリー ※ 1, 2, 4	MCACC MEMORYの選択 （MCACCメモリーデータの名前を変更(→73ページ)しているときは変更した名前で表示されます）	●MCACC : M1.MEMORY 1 M1.MEMORY 1～M6.MEMORY 6 ○MCACC : OFF
⇕EQ ◀ON ▶ 周波数特性の補正 ※ 2, 4, 8, 13	選択されているMCACC MEMORYの周波数特性の補正のON/OFF設定。 それぞれのMEMORYごとに設定できます。	●EQ : ON ○EQ : OFF
⇕S-WAVE ◀ON ▶ 定在波制御 ※ 4, 8, 13	選択されているMCACC MEMORYの定在波制御の効果のON/OFF設定。 それぞれのMEMORYごとに設定できます。	●S-WAVE : ON ○S-WAVE : OFF
⇕DELAY ◀0.0fr▶ サウンドディレイの調整 ※ 8	音声全体の遅延時間の調整 （DVDソフトなどで、映像の動きの方がセリフなどの音声より遅れている場合、音声全体を遅らせることで、映像の動きと音声とを合わせることができます）	●DELAY : 0.0fr 0.0frame～6.0frameまで（0.1間隔） ・1frame＝1/30秒　（NTSC）
⇕◀MID/LDN OFF▶ ミッドナイト/ラウドネスモード ※ 4, 5, 6, 8, 9	夜間や小音量再生でも、音量に応じて効果を調整し、聴き取りやすくする機能 MIDNIGHT : マルチチャンネル再生向き LOUDNESS : 2チャンネル再生向き	●MID/LDN : OFF 両機能ともにOFF ○MIDNIGHT : ON ○LOUDNESS : ON
⇕BASS ◀ 0dB▶ 低音の調整 ※ 3, 4, 5, 6, 8	低音のレベル調整	●BASS : 0dB −6dB～+6dB（2 dB間隔）

設定項目	設定・効果の内容	表示と設定
⇕TREBLE ◀ 0dB▶ **高音の調整** ※ 3, 4, 5, 6, 8	高音のレベル調整	●TREBLE : 0dB −6dB〜+6dB（2 dB間隔）
⇕S. RTRV ◀OFF▶ **サウンドレトリバー機能** ※ 4, 5, 6, 8, 9	MP3 などの圧縮音声は圧縮処理される際、削除されてしまう部分が発生します。サウンドレトリバー機能をONにすると、DSP処理によってその削除されてしまった部分を補い、音の密度感、抑揚感を向上させます。	●S.RTRV : OFF ○S.RTRV : ON
⇕DNR ◀OFF▶ **デジタルノイズリダクション機能** ※ 4, 5, 6, 8, 9	雑音が多く含まれるソフトのノイズを低減する機能（→46ページ「デジタルノイズリダクション」参照）	●DNR : OFF ○DNR : ON
⇕DIALOG E◀OFF▶ **ダイアログエンハンスメント機能** ※ 4, 5, 6, 8, 9	センター成分の定位感の調整機能（映画やドラマのセリフ、または音楽のボーカルを際立たせ、より聴き取りやすい音にします）	●DIALOG E : OFF ○DIALOG E : ON
⇕HIBIT ◀OFF▶ **ハイビット** ※ 3, 4, 8	デジタル音声信号へのダイナミックレンジを拡大する機能（PCM 16 bit、または圧縮音声20 bitを24 bitに再量子化することで、より滑らかで繊細な音楽表現を可能にします）	●HIBIT : OFF ○HIBIT : ON
⇕DUAL◀ CH1 ▶ **デュアルモノラル音声の設定**	1+1デュアルモノラル信号入力時、どちらの音声を再生させるかの設定（→46ページ「1+1デュアルモノラル信号とは」参照）	●DUAL : CH1 ○DUAL : CH2 ○DUAL : CH1 CH2（左右同時再生）
⇕DRC ◀AUTO▶ **ダイナミックレンジコントロールの設定** ※ 4, 6, 8, 10	音量の最も小さい部分と最も大きい部分の圧縮比率の調整 （ダイナミックレンジを圧縮すると、音量を下げて映画などを楽しむ場合でも、微小な音が聴き取りやすくなりますが、大きい音量で楽しむときは、OFFにすることをお勧めします。）	●DRC : AUTO（ドルビーTrueHD信号に対してのみ圧縮） ○DRC : MAX（最大圧縮） ○DRC : MID ○DRC : OFF（圧縮無し :高音質再生）
⇕LFE ◀0dB▶ **LFEアッテネーターの設定**	ドルビーデジタルやDTS 音声には、LFE（超低域音声成分）が含まれていることがあります。LFE レベルが大きくて、スピーカーからの音声に歪みが生じるときは、LFE レベルをアッテネート（減衰）します。	●LFE : 0dB −5dB、−10dB、−15dB −20dB、OFFから選択
⇕SACD GAIN◀ 0▶ **SACDゲインの設定** ※ 3, 4, 8	SACDを歪みなく再生するための調整 （工場出荷時の「0」は、高レベルで記録されているディスクを再生しても音が歪まない設定になっています。「+6」に設定すると、SACDのデジタル処理に+6dBのゲインを持たせ、SACDディスクの情報をより忠実に引き出すことができ、高音質再生が可能になります。）	●SACD GAIN : 0 0 : 音声が歪む場合 +6 : 高音質再生を望む場合
⇕HDMI◀ AMP ▶ **HDMI音声出力の設定** ※ 12	HDMI INに入力された音声を、どのように再生するかの設定 「THROUGH」に設定したときは、本機からは音が出なくなります。	●HDMI : AMP 本機と接続したスピーカーで再生 ○HDMI音声出力 : THROUGH HDMI OUTと接続したテレビ（フラットテレビなど）で再生
⇕A. DELAY ◀OFF▶ **オートディレイ(オートリップシンク)の設定** ※ 11	HDMIどうしで接続された機器に対する機能で、音声と映像の遅延時間を自動で調整し、映像の動きと音声を自動で合わせます。	●A.DELAY : OFF ○A.DELAY : ON

設定項目	設定・効果の内容	表示と設定
⇕C. WIDTH ◀3▶ センター幅の調整 (DDPLIIx MUSIC時のみ) ※ 4, 5, 6, 7	センターチャンネルの音声を左右のフロントスピーカーにどの程度振り分けるかの調整 （音色の不一致を緩和して、音楽再生に適した音場を創り出すことができます。）	●C.WIDTH : 3 0〜7 0 : センタースピーカーからのみ再生 7 : すべて左右のフロントスピーカーに振り分け
⇕DIMENSION◀ 0▶ ディメンションの調整 (DDPLIIx MUSIC時のみ) ※ 4, 5, 6	音場の強さのバランス調整 （お好みの音場を創り出すことができます。）	●DIMENSION : 0 −3〜+3 −3 : 後方の音場が強くなる +3 : 前方の音場が強くなる
⇕PANORAMA◀OFF▶ パノラマ調整 (DDPLIIx MUSIC時のみ) ※ 4, 5, 6	前方の音場を左右に大きく回り込ませ、サラウンドchにつなげるような効果を加える機能（正確な定位よりも雰囲気を楽しむための機能です。）	●PANORAMA : OFF ○PANORAMA : ON
⇕C. IMAGE ◀ 3▶ センターイメージの調整 （Neo:6 CINEMAまたは Neo:6 MUSIC時のみ） ※ 4, 5, 6, 7	センターチャンネルの音声を左右のフロントスピーカーにどの程度振り分けるかの調整 （音色の不一致が緩和された音楽再生に適した音場を創り出すことができます。）	●C.IMAGE : Neo:6 CINEMA 10 : Neo:6 MUSIC 3 0〜10 0 : ほぼすべて左右のフロントスピーカーに振り分け 10 : 主にセンタースピーカーから再生
⇕EFFECT ◀70▶ ADVANCED SURROUND モードの効果の調整 ※ 4, 5, 6	現在選択しているADVANCED SURROUNDの各モードの残響音効果などの調整	●EFFECT : 50 10〜90 （EXTENDED STEREOのみ90が初期値）

※ 1 MCACC OFF を選択すると、スピーカーシステム設定以外のすべての補正項目が工場出荷時と同じ状態になります。
※ 2 MCACC OFF または EQ OFF を選択すると、MCACC インジケーターが消灯します。
※ 3 MULTI CH IN 入力では選択できません。
※ 4 HDMI 音声出力の設定が「THROUGH」のときは選択できません。
※ 5 リスニングモードが HOME THX モードのときは選択できません。
※ 6 リスニングモードが STREAM DIRECT モードのときは選択できません。
※ 7 スピーカー設定（→ 75 ページ）で、センタースピーカーが NO（無し）に設定されているときは選択できません。
※ 8 リスニングモードが PURE DIRECT モードのときは調整できません。
※ 9 各入力ごとに設定できます。
※ 10 ダイナミックレンジコントロール対応のドルビーデジタル、ドルビーデジタルプラス、ドルビー TrueHD、DTS、DTS-HD Master Audio 信号にのみ効果があります。
※ 11 HDMI で接続されたリップシンク対応のディスプレイにのみ有効です。ON に設定しても音声全体の遅延時間が改善されないときは、OFF に設定して「サウンドディレイの調整」（→ 44 ページ）を手動で調整してください。
※ 12 アンプ連動モードを使用しているときは切り換えることができません（→ 96 ページ）。本機の電源がスタンバイの状態で HDMI の音声と映像をテレビから出力したいときは、アンプ連動モードを ON にする必要があります（→ 95、96 ページ）。
※ 13 DTS-HD および DTS-EXPRESS 音声を入力していて、HOME THX モードのときは選択できません。
このとき ADVANCED MCACC のインジケーターは自動で消灯します。

1+1デュアルモノラル信号とは

モノラルの音声チャンネルを2つ持つデジタル信号の名称です。
- BSデジタル放送(MPEG-2 AAC)のモノラルの二カ国語放送や音声多重放送など
- 二カ国語放送などをDVDレコーダーのドルビーデジタル・デュアルモノラルモードで録画したもの
- ステレオの二カ国語放送などは、デュアルモノラルとは異なるフォーマットになります。
- 録画モードの名称は機器によって異なります。詳しくは、DVDレコーダーの取扱説明書をご覧ください。

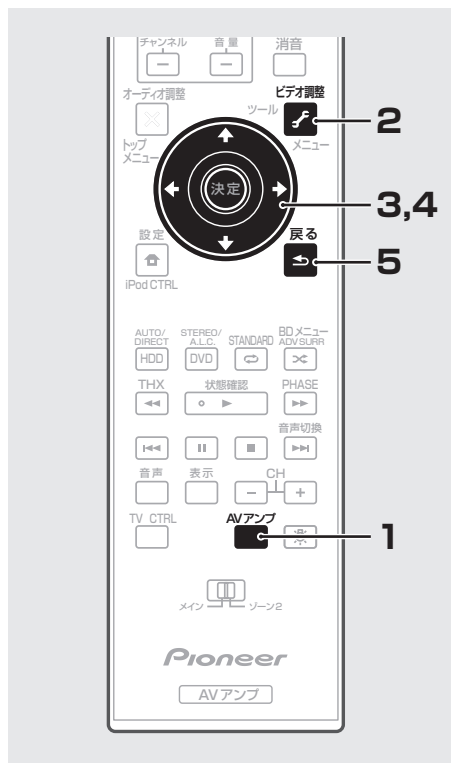
デジタルノイズリダクション

- 以下の場合は、ON にしてもノイズが十分に低減されないことがあります。
  - 突然のノイズ
  - 極端に大きいノイズ
  - 高い周波数成分を非常に多く含む信号
  - もともとノイズの少ない録音状態の良い信号
- 各音源に対し、デジタルノイズリダクションは以下のような改善効果があります。

ステレオ再生時
- アナログ入力...10 dB 〜18 dB
- デジタル入力...10 dB 〜15 dB
- ADVANCED、STANDARD、96 kHz 再生時....6 dB 〜10 dB

- STREAM DIRECTモードがONになっているときやHOME THXモードでは使用できません。

ビデオ調整機能を使用する

ここでは以下の表にある映像に関する「設定項目」をお好みで設定します。それぞれの機能の内容をご確認のうえ、お好みで設定する項目を選んで設定を行ってください。

- 入力信号や本機の設定などによって調整をすることができない項目があります。その場合は設定項目として選択できません。
- すべての項目について、入力ごとに設定できます。

1 AVアンプ　**リモコンをアンプ操作モードにする。**

2 ビデオ調整　**ビデオ調整機能にする。**

3 **設定項目を選ぶ。**

以下の表の設定項目から、お好みで調整したい項目を選びます。

4 **手順3で選んだ項目の調整を行う。**

以下の表の設定内容のとおりにお好みで調整します。

5 戻る　**ビデオ調整を終了する。**

設定項目	設定・効果の内容	表示と設定
⇕V.CONV ◀ON ▶ ビデオコンバーターの設定	HDMI以外の映像入力信号をMONITOR OUTに対してビデオコンバートする機能 （ソース機器とテレビモニターを違う種類のコードで接続していても、映像を出力することができる便利な機能です）	●V.CONV : ON ○V.CONV : OFF
⇕BRIGHT ◀ 0▶ 画質の明るさ調整 ※ 1	画面全体の明るさ調整	●BRIGHT : 0 −10（暗い）〜+10（明るい）
⇕CONTRAST◀ 0▶ 画質のコントラスト調整 ※ 1	画面の最も明るい部分と最も暗い部分との明るさの比率調整	●CONTRAST : 0 −10（比率最小）〜+10（比率最大）
⇕HUE ◀ 0▶ 画質の色あい調整 ※ 1	緑色と赤色のバランス調整	●HUE : 0 −10（緑強調）〜+10（赤強調）
⇕CHROMA ◀ 0▶ 彩度の調整 ※ 1	色の濃さを調整	●CHROMA : 0 −10（薄い）〜+10（濃い）
⇕RES ◀AUTO ▶ 解像度の設定 ※ 1, 2, 3, 4	入力信号を出力する際の解像度の設定	●RES : AUTO ○RES : PURE ○RES : 480P ○RES : 720P ○RES : 1080i ○RES : 1080P
⇕ASP ◀THROUGH▶ アスペクト比の設定 ※ 1, 4, 5	モニター出力映像のアスペクト比（縦横比）の設定 （THROUGHは入力した映像信号をそのまま出力します。NORMALは上下または左右に黒帯を付加し、ZOOMは画像を拡大して出力します。）	●ASP : THROUGH ○ASP : NORMAL ○ASP : ZOOM

※１　ビデオコンバーターの設定が ON のときのみ調整できます。

※２　テレビ（モニター）が対応していない解像度に設定した場合は映像が出なくなります。そのときは設定を変更し直してください。また、DVI 対応機器から映像を入力した場合や、テレビ (モニター) の能力によっては、設定した解像度で出力されない場合があります。1080p へも変換しますが、1080p への変換は入力信号が 480i/576i/480p/576p のときのみです。

※３　「AUTO」を選択すると HDMI で接続されたテレビ（モニター）の能力に合わせて自動的に解像度が選ばれます。また、「PURE」を選択すると、入力された解像度そのままで出力されます。（このとき、入力された映像端子と同じ種類の映像出力端子からのみ映像を出力します。）

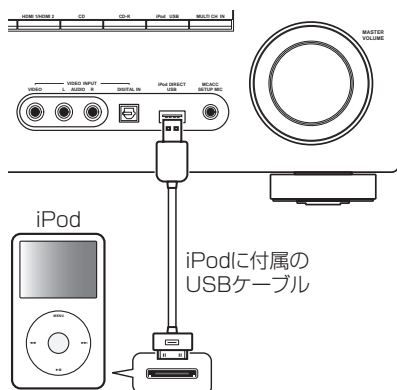
※４　アナログビデオ入力を HDMI 出力する際に有効な設定です。

※５　HDMI 出力にのみに有効です。

iPodをつないで再生する

本機とiPodを接続して、iPodの音楽を本機で楽しむことができます。

- 本機は、第5世代以降のiPodやiPod nano, iPod classic, iPod touchの音声に対応しています（iPod shuffleには対応しておりません）。ただし、モデルによっては一部機能が制限されます。
- iPodのソフトウェアが古いと正常に動作しないことがあります。必ず最新のiPodソフトウェアでお使いください。
- iPodは、著作権のないマテリアル、または法的に複製・再生を許諾されたマテリアルを個人が私的に複製・再生するために使用許諾されるものです。著作権の侵害は法律上禁止されています。
- パイオニア製品からiPodのイコライザを操作することはできません。本機にiPodを接続する前に、iPodのイコライザを「オフ」に設定することをお勧めします。
- 本機とiPodを組み合わせてご使用の際、iPodのデータに不具合が生じても、当社は一切の責任を負うことができませんのであらかじめご了承ください。
- 本機での表示は英数字のみとなります。英数字以外の文字がiPodに記録されている場合、その文字は「#」で表示されます。
- iPodに記録されている映像は表示されません。

iPod の音楽を再生する

1 本機をスタンバイ状態にする。

2 iPodに付属のUSBケーブルを使用して、iPodを本機のフロントパネルにあるiPod DIRECT USB端子に接続する。

iPodの接続については、iPodに付属の取扱説明書もご覧ください。

3 本機とテレビの電源を入れる。

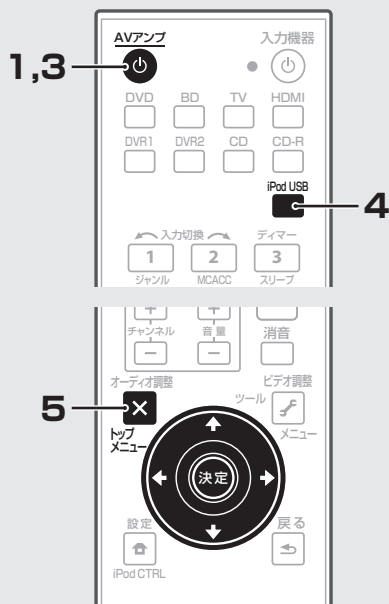
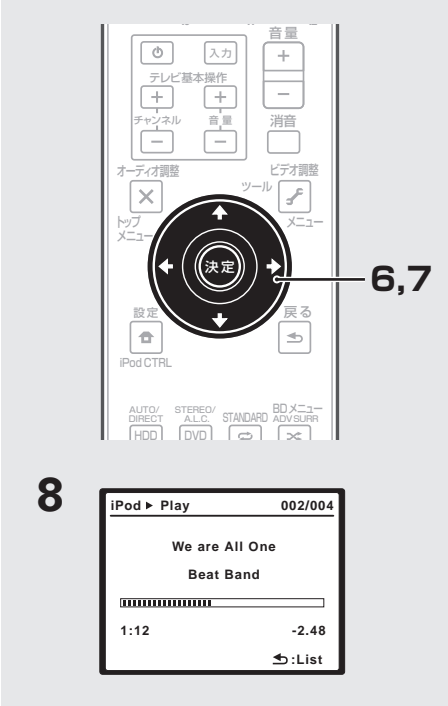
4 iPod USB

iPod USBボタンを押す。

フロントパネルの表示部に「Loading」と表示され、iPodが正しく接続されているかどうか確認します。

- iPod USBボタンを押したあとに「No Device」と表示された場合は、電源を切ってから本機とiPodの接続をやり直してみてください。

5
トップ
メニュー

トップメニューを表示する。

6 再生したいカテゴリーを選んで決定する。

カテゴリーは以下の中から選びます。
選んだカテゴリーのリストが表示されます。
Playlists
Artists
Albums
Songs
Podcasts
Genres
Composers
Audiobooks
Shuffle Songs

7

再生したいリスト(ジャンル、アルバムなど)を選んで決定する。

⬅ ➡ ボタンでリストのページを切り換え、⬆⬇ ボタンでリストを選択します。

8 手順 7を繰り返して、聞きたい曲を再生する。

再生機能を使っていろいろな再生が可能です。詳しくは「再生機能について」(以下)をご覧ください。

再生機能について

マルチコントロールボタンのiPod USBを押すとリモコンがiPod USB操作モードになり、リモコンで以下の操作ができます。

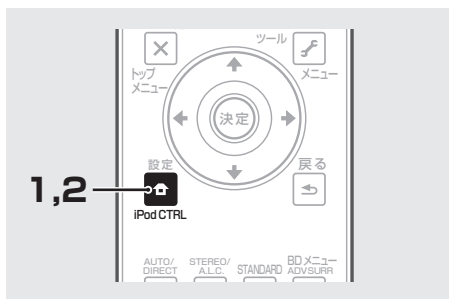
ボタン	機能	ボタン	機能
▶	再生を開始します。	表示	フロントパネル表示の内容を切り換えます。
❚❚	一時停止 / 一時停止解除します。		
◀◀ / ▶▶	押し続けている間、早戻しまたは早送りをします。	⬅/➡	フォルダー / ファイルリスト画面を表示中にページ送り / 戻しをします。再生中の場合は、前のトラック/次のトラックに進みます。
I◀◀	再生中のトラックの先頭に戻ります。続けて押すと、前のトラックに戻ります。		
▶▶I	次のトラックの先頭に進みます。	⬆ / ⬇	Audiobook を再生中に再生の速さを変更します。Faster ↔ Normal ↔ Slower
(リピート)	リピート再生を設定します。押すたびに **Repeat One**、**Repeat All**、**RepeatOff**に切り換わります。	トップメニュー	トップメニューを表示します。
(シャッフル)	シャッフル再生を設定します。押すたびに **Shuffle Songs**、**Shuffle Albums**、**Shuffle Off**に切り換わります。	戻る	前の画面に戻ります。

iPod Error(iPodエラー)について

フロントパネル表示部にメッセージが表示された場合は、以下の操作を行ってみてください。

メッセージ	対応	メッセージ	対応
Error I1	正常に通信できません。コネクターを一度外し、iPodのメインメニューが表示されてから、もう一度確実にコネクターを接続してください。それでもiPodが正常に動作しない場合は、iPodをリセットしてください。	Error I4	iPodからの応答がありません。iPodのソフトウェアを最新バージョンにアップデートしてください。それでもiPodが正常に動作しない場合は、iPodをリセットしてください。
Error I2	iPodソフトウェアのバージョンが古いときに表示されます。iPodのソフトウェアを最新バージョンにアップデートしてください。	No Music Track	iPodに曲が入っていません。iPodに曲を転送してください。
Error I3	本機が対応していないiPodが接続されています。対応したモデルかどうか確認してください。(→49ページ) iPodソフトウェアのバージョンが古いときに表示されます。iPodのソフトウェアを最新バージョンにアップデートしてください。	No Track	iPodで選択したカテゴリー内にトラックが入っていません。他のカテゴリーを選択してください。

iPodの操作を切り換える

iPodの操作を本機とiPod本体とで切り換えることができます。

1 iPod CTRL

iPod CTRLを押して、操作をiPod側に切り換える。

iPod本体で操作できるようになり、本体画面が表示されます。本機での操作はできなくなり、OSD画面は表示されません。

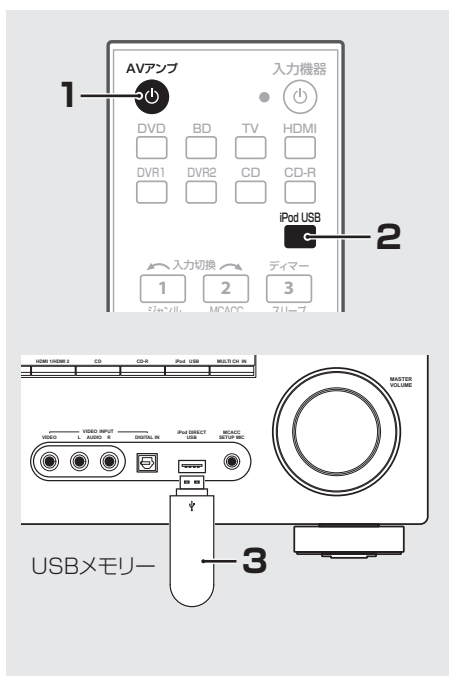
2 iPod CTRL

もう一度iPod CTRLを押して、操作を本機側に切り換える。

本機能はiPod第5世代およびiPod nano第1世代には対応しておりません。

USBメモリーを再生する

お手持ちのUSBメモリーを本機に接続することで、USBメモリーに記録されている音楽ファイルを本機で再生することができます。本機ではステレオまたはモノラル音声を再生することができます。

- 本機で再生できるUSBメモリーのファイルは、WMA、MP3、MPEG-4AACのいずれかで、著作権保護のかかっていない音楽ファイルのみです。
- 本機とパソコンをUSBケーブルで接続して音楽ファイルを再生することはできません。本機が対応しているUSBメモリーは、外付けハードディスクや携帯フラッシュメモリー、デジタルオーディオ再生機(FAT16、FAT32のフォーマットに対応)などのUSBマスストレージクラスに属する機器です。
- 本機ではすべてのUSBメモリーの再生、および電源の供給を保証できない場合があります。また、本機と接続したことで、USBメモリーのファイルが万一損失した場合、当社は一切の責任を負うことができませんので、あらかじめご了承ください。
- 容量の大きいUSBメモリーを接続したときは、読み込みに多少時間がかかることがあります。
- 本機はUSBハブには対応していません。
- 本機で再生できないファイルが選択された場合は、自動的に次の再生可能なファイルが再生されます。
- 曲のタイトルがファイルに記録されていない場合は、ファイル名がOSD画面に表示されます。アルバム名やアーティスト名が記録されていない場合は、それらは表示されません。
- 英数字以外の文字は「#」で表示されます。
- USBの音声をZONE 2から出力することはできません。

1 AVアンプ

本機とテレビの電源を入れる。

2 iPod USB

iPod USBボタンを押す。

OSD画面に「No Device」と表示されます。

3 **USBメモリーを本機のフロントパネルにあるiPod DIRECT USB端子に接続する。**

OSD画面に「Loading」と表示され、USBメモリーを読み込みます。読み込みが終了すると再生画面が表示され、自動で再生が開始されます。

再生機能を使っていろいろな再生が可能です。詳しくは「再生機能について」(→52ページ)をご覧ください。

再生機能について

マルチコントロールボタンのiPod USBを押すとリモコンがiPod USB操作モードになり、リモコンで以下の操作ができます。

ボタン	機能
▶	再生を開始します。
❚❚	一時停止 / 一時停止解除します。
⏮	再生中のトラックの先頭に戻ります。続けて押すと、前のトラックに戻ります。
⏭	次のトラックの先頭に進みます。
🔁	リピート再生を設定します。押すたびに **Repeat All**、**Repeat One**、**Repeat Folder**に切り換わります。
🔀	シャッフル再生を設定します。押すたびに **Shuffle On**、**Shuffle Off**に切り換わります。
表示	フロントパネル表示の内容を切り換えます。
⬅/➡	再生中のトラックの頭出しをします。
トップメニュー	一番最初の曲に戻ります。

USB ERROR（USBエラー）について

USB ERRORと表示されたときは以下の内容をご確認のうえ、下記の操作を行ってみてください。

USB ERROR	内容
USB ERROR 1	USBメモリーの消費電力が大きすぎます。
USB ERROR 2	対応していないUSB機器が接続されています。
USB ERROR 3	「故障かな？と思ったら」（→114ページ）をご確認ください。
DECODE ERROR *1	音声データまたはファイルの付加情報に何らかの異常があります。

*1　このエラーが発生したときは再生を中断し、自動的に次の再生可能なファイルを再生します。パソコン等でタイトル情報を変更すると、このエラーを発生させる原因となることがあります。

- 本機の電源を切ってから、再度電源を入れてみてください。
- 本機の電源を切ってからUSBメモリーを抜き、再度USBメモリーを接続して電源を入れてみてください。
- DVD などの他の入力に切り換えてから、再度USB入力にしてみてください。
- ACアダプターが付属しているUSBメモリーをお使いの場合は、ACアダプターを接続して使用してみてください。

上記の操作を行ってもUSB ERRORが表示されるときは、USBメモリーが本機に対応していません。

再生できる圧縮ファイルについて

本機では標準的なサンプリング周波数/ビットレートで圧縮されたフォーマットの多くに対応していますが、一部対応していないフォーマットもあります。本機で対応している圧縮フォーマットは以下のとおりです。

- **MP3**（MPEG-1/2/2.5 オーディオレイヤー 3）：
  サンプリングレートは8 kHz～48 kHz 、ビットレートは8 kbps～320 kbps （128 kbps以上を推奨）、ファイル拡張子は.mp3に対応しています。

- **WMA**（Windows Media Audio）：
  サンプリングレートは32 kHz/44.1 kHz 、ビットレートは32 kbps～192 kbps （128 kbps以上を推奨）、ファイル拡張子は.wmaに対応しています（WMA9 Pro やロスレスエンコーディング（loss- less encoding）には対応しておりません）。

- **AAC**（MPEG-4 Advanced Audio Coding）：
  サンプリングレートは11.025 kHz ～48 kHz 、ビットレートは16 kbps～320 kbps （128 kbps以上を推奨）、ファイル拡張子は.m4aに対応しています（アップルロスレスエンコーディング（Apple loss - less encoding）には対応しておりません）。

- 著作権保護のかかったファイルは再生することができません。
- 可変ビットレート（VBR）で圧縮されたファイルも再生できますが、経過時間が正しく表示されないことがあります。

MPEG-4 AAC について

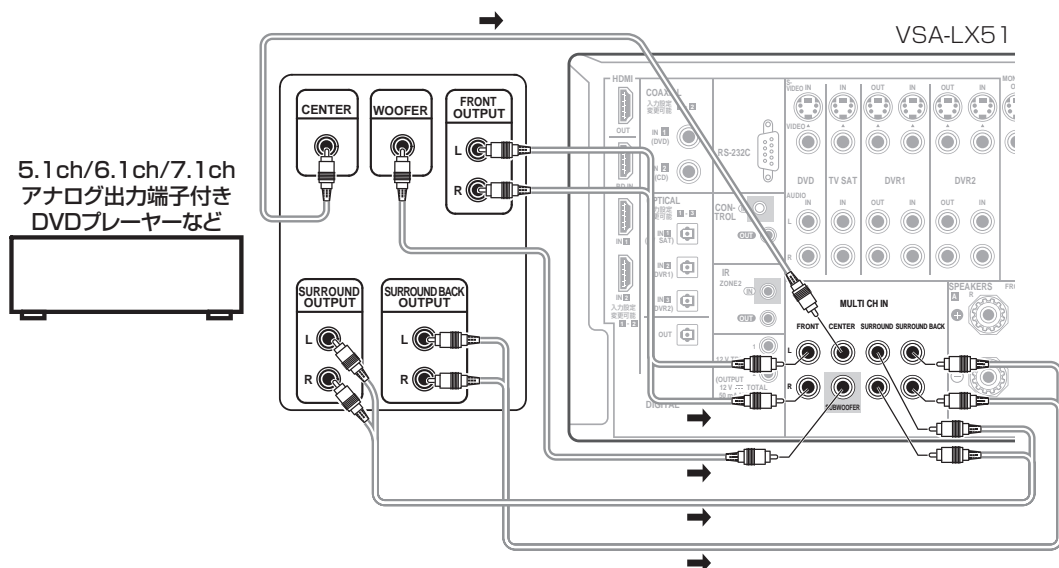
AACとは、「Advanced Audio Coding」の略で、MPEG-2 、MPEG-4で使用される音声圧縮技術に関する基本フォーマットです。AACデータは、作成に使用したアプリケーションによってファイル形式と拡張子が異なります。本機では、iTunes® によってエンコードされた、拡張子が「.m4a 」のAACファイルを再生することができます。ただし、著作権保護のかかったファイルやエンコードするiTunesのバージョンによっては再生できないことがあります。
iTunesは、米国およびその他の国々で登録されたApple Inc.の商標です。

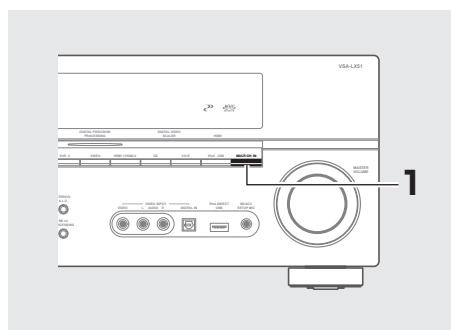
WMA について

外装箱に印刷された、Windows Media® のロゴは、本機がWMAデータの再生に対応していることを示しています。
WMAとは、「Windows Media Audio」の略で、米国Microsoft Corporationによって開発された音声圧縮技術です。本機ではWindows Media Playerによってエンコードされた、拡張子が「.wma」のWMAファイルを再生することができます。ただし、著作権保護のかかったファイルやエンコードするWindows Media Playerのバージョンによっては再生できないことがあります。
Microsoft、Windows Media 、Windowsロゴは、米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標または商標です。

マルチチャンネルアナログ信号を再生する

ソース機器の5.1ch/6.1ch/7.1chアナログ出力端子と本機のMULTI CH IN端子を接続して、マルチチャンネルアナログ信号を再生をすることができます。HDMIを使用しないでDVDオーディオやSACDを再生する場合や、本機の対応フォーマット(→35ページ)以外のマルチチャンネル信号を再生したいときに効果的です。

マルチチャンネルアナログ接続

- ソース機器によっては、5.1ch/6.1ch/7.1chアナログ出力の各種設定があるものもあります。出力のON/OFF設定はONにしてください。また、出力チャンネルの設定がある場合は、本機に接続しているスピーカーの数に合わせてください。詳しくは、ソース機器の取扱説明書をご覧ください。
- MULTI CH IN端子に入力された信号は本機でダウンミックス処理を行うことができません。
- サラウンドバックが1本のときはL端子につないでください。
- 5.1chのスピーカーセットを接続するときは、FRONT L/R、CENTER、SURROUND L/RおよびPRE OUTのSUBWOOFERに接続してください。SURROUND L/Rを接続せずにSURROUND BACKに接続すると正しく動作しないことがあります。

マルチチャンネルアナログ再生する

1 MULTI CH IN

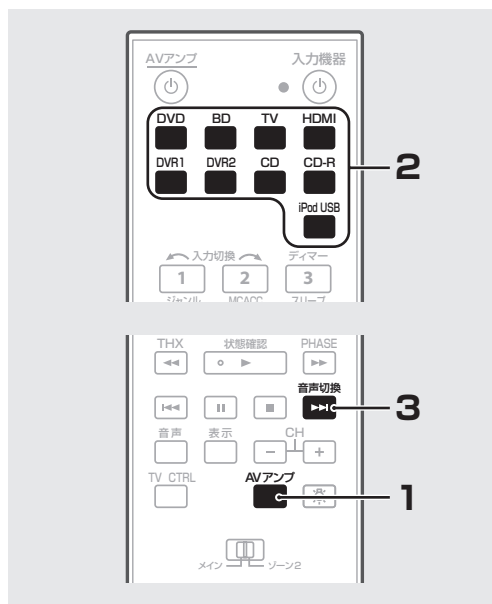
MULTI CH IN入力にする。

ボタンを押すたびに MULTI CH IN 入力ともとの入力とが切り換わります。

- MULTI CH IN入力でのMCACCの各補正は、チャンネルレベルのみ有効となります。
- MULTI CH IN入力では以下の機能が動作できなくなります。
  「リスニングモード」(→37ページ)/「オーディオ調整機能」(→44ページ)の一部/「PHASE CONTROL機能」(→43ページ)/「アナログATT」(→54ページ)/「低音／高音の調整」(→44ページ)

DVDプレーヤーによってはサブウーファーチャンネルのアナログ出力レベルが小さいものがあります。この場合は「Other Setup」の「Multi Ch In Setup」で、サブウーファーの入力レベルを10 dB上げることができます。詳しくは「マルチチャンネル入力を設定する」(→84ページ)をご覧ください。

接続した機器間で録音／録画をする

本機を通して録音／録画を行う場合、入出力それぞれの機器は同じタイプのコードで接続されている必要があります。録音/録画端子には、音声のアナログ/デジタル、映像のコンポジット/Sビデオ信号の間の相互変換を行っていないため、接続コードのタイプを一致させてください。

1 AVアンプ　リモコンをアンプ操作モードにする。

2 録音/録画するソースを選ぶ。

3 音声切換 ►►I　入力信号を選択する。

デジタル録音するときは、DIGITAL を選択します。詳しくは「音声入力信号の切り換え」（→ 36 ページ）をご覧ください。

4 録音/録画機器の録音/録画を開始する。

5 録音/録画するソースを再生する。

- 本機の音量、チャンネルレベル、オーディオ調整機能、ビデオ調整機能、サラウンドの設定などは、録音信号には効果がありません。
- 市販ソフトの録音／録画は、個人で楽しむ場合を除いて、著作権法上認められていません。また、コピーガード信号により録音／録画のできないものもあります。
- デジタル録音について、ソフトによってはコピー回数制限のあるものがあります。詳しくは、録音機器の取扱説明書をご覧ください。
- MCACC測定中は、録音／録画を行わないでください。
- MULTI CH IN端子に入力された音声は、フロントL、Rの2chのみ録音することができます。

アナログ入力信号の歪みを低減する

アナログ音声信号が過度に入力され（フロント表示部のOVERインジケーターが点灯して）音が歪んでしまうとき、入力信号レベルを下げて歪みを低減することができます。

1 AVアンプ　リモコンをアンプ操作モードにする。

2 アナログATT 9　アナログATTボタンを押す。

押すたびにインプットアッテネーター機能の ON と OFF が切り換わり、ON のときに ATT インジケーターが点灯します。

フロントパネル表示部の明るさを調整する

フロントパネル表示部の明るさを4段階に調整することができます。

1 AVアンプ

リモコンをアンプ操作モードにする。

2 ディマー 3

お好みの明るさに調整する。

押すたびに表示部の明るさが４段階で切り換わります。

- 明るさを一番暗い設定にしたときは、ボリューム表示とSTANDBYインジケーターを残して、すべてを消灯します。
- 設定した明るさにかかわらず、何かの操作をしたときや、入力信号のフォーマットが変わったときなどは明るく点灯し、数秒後に元の明るさに戻ります。
- エラー表示や禁止メッセージは、この設定にかかわらず明るく表示されます。

スリープタイマーを設定する

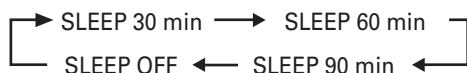
1 AVアンプ

リモコンをアンプ操作モードにする。

2 スリープ 6

スリープボタンを押してタイマーを設定する。

押すたびにスリープタイマーの時間が以下のように切り換わります。
スリープタイマーが設定されると SLEEP インジケーターが点灯します。

SLEEP 30 min → SLEEP 60 min → SLEEP 90 min → SLEEP OFF → SLEEP 30 min

- スリープタイマーを設定したあとにスリープボタンを1 回押すと、残り時間が表示されます。
- マルチゾーン機能（→89ページ）がONのときにスリープタイマーを設定すると、すべてのゾーンの電源が同時に切れます。

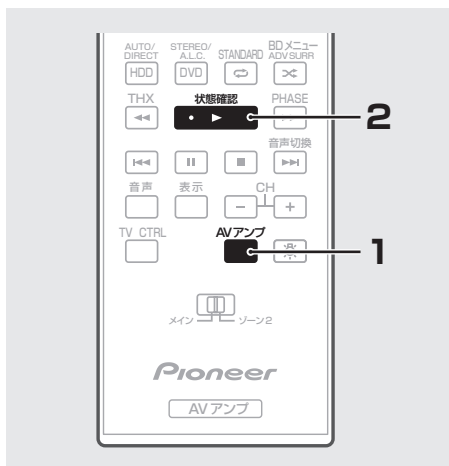
再生中の音声や設定内容を確認する（ステータス表示）

リモコンの状態確認ボタンを押すことで、以下の情報を確認することができます。確認は本体のディスプレイに表示されます。以下の情報は各入力ごとに確認することができます。

入力信号
↓
SBch 処理モード
↓
MCACC MEMORY
↓
ZONE 2 入力
↓
HDMI コントロール

1 AVアンプ

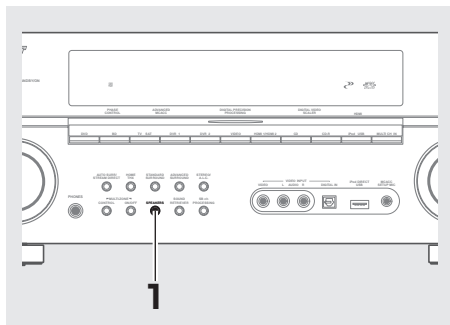
リモコンをアンプ操作モードにする。

2 状態確認

設定内容を確認する。

ディスプレイに上記の情報が表示されます。ディスプレイは３秒ごとに切り換わって表示されます。

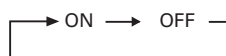
ステータス表示中に 状態確認 ボタンを押すと、通常表示に戻ります。

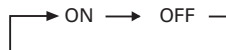
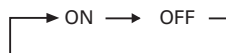
スピーカーシステムを切り換える

スピーカーシステムA/Bを切り換えると、再生されるスピーカーが切り換わります。必要に応じて使用するスピーカーシステムを選択してください。

ヘッドホンをPHONES端子に差し込んでいる間は自動的にOFFに切り換わります。(ただし、Speaker Bに設定されているときは、スピーカー端子Bからは音が出ます。)

スピーカーシステムを切り換える。

サラウンドバックシステムの設定(→ 62 ページ)によって選択できるモードが換わります。ボタンを押すたびに、以下のように切り換わります。

「Normal」に設定している場合

「Speaker B」に設定している場合

「Front Bi-Amp」に設定している場合

「ZONE 2」に設定している場合

各スピーカーシステム選択時の出力音声について

「Normal」に設定している場合

A (SP▶A) : すべてのスピーカーから出力されます。

「Speaker B」に設定している場合

A (SP▶A) : スピーカー端子Aに接続されたスピーカーから出力されます。(サラウンド再生が可能です。)

B (SP▶B) : スピーカー端子Bに接続されたスピーカーからのみ出力されます。(2chステレオ再生のみ可能です。)MULTI CH INでは音が出力されません。

A+B (SP▶AB) : 上記A (SP▶A)とB (SP▶B)の音声が同時に出力されます。

「Front Bi-Amp」に設定している場合

A+B (SP▶AB) : すべてのスピーカーから出力されます。スピーカー端子 Bから出力される音声はスピーカー端子 Aのフロント出力と同じ音声です。

「ZONE 2」に設定している場合

A (SP▶A) : スピーカー端子 Aに接続されたスピーカーから、メインゾーンで選択されている音が出力されます。ZONE 2 が ON のときはスピーカー端子 Bに接続されたスピーカーから ZONE 2 で選択されている音が出力されます。

上記の全設定共通

OFF (SP▶) : スピーカーから出力されません。このときサラウンドバックシステムの設定(→ 62 ページ)を「ZONE 2」に設定していて、ZONE 2 が ON のときは、SP▶B から音が出ます。(プリアウト端子からは常に音声が出力されているため、サブウーファーからは音が出る場合があります。)

本機で設定できること

本機のシステムセットアップで設定できる全項目です。

システムセットアップ項目		詳細項目		内容	参照ページ
1	Auto MCACC (サラウンドの自動設定)	ALL/Keep SP System		音場補正の全項目を自動測定	12、60
		Speaker Setting		スピーカーシステムの自動設定	58
		Channel Level		スピーカー出力レベルの自動設定	58
		Speaker Distance		スピーカーまでの距離の自動設定	58
		EQ Pro. & S-Wave		残響特性を考慮した周波数特性の自動補正および定在波の自動制御	58
2	Surround Back System (サラウンドバックシステムの設定)	——		SPEAKER B 端子の用途設定	62
3	Manual MCACC (詳細なサラウンドの設定)	a	Fine Channel Level	聴感による各チャンネルの出力レベルの微調整	63
		b	Fine SP Distance	聴感による各スピーカーまでの距離の微調整	64
		c	Standing Wave	定在波制御の設定	65
		d	EQ Adjust	聴感による周波数特性補正カーブの調整	66
		e	EQ Professional	1 Reverb Measurement(残響特性の測定) 2 Reverb View(残響特性の表示) 3 Advanced EQ Setup (残響特性を考慮した音場補正)	67
4	Data Management (MCACC MEMORY のデータ管理)	a	MCACC Data Check	MCACC メモリーの確認	72
		b	Memory Rename	MCACC メモリーの名前を変更	73
		c	MCACC Memory Copy	MCACC メモリーのコピー	73
		d	MCACC Memory Clear	MCACC メモリーを消去	74
		e	Output PC	残響特性およびMCACCパラメーター(測定値)のPCへのデータ転送	71
5	Manual SP Setup (聴感によるサラウンドの設定)	a	Speaker Setting	スピーカー接続の有り / 無し、低域再生能力などの設定	75
		b	Channel Level	各チャンネルの出力レベルの設定	77
		c	Speaker Distance	各スピーカーまでの距離の設定(最適なディレイ値に設定)	78
		d	X-Curve	部屋の大きさに合わせた高音域の減衰カーブの設定	79
		e	THX Audio Setting	サラウンドバックスピーカー間の距離の設定	80
6	Input Setup (入力に関する設定)	——		各入力の音声入力や映像入力の切り換え、入力名の変更、12 V TRIGGER の ON/OFF などの設定	81
7	Other Setup (その他の設定)	a	Multi Ch In Setup	マルチチャンネル入力の設定	84
		b	ZONE Audio Setup	マルチゾーン機能での音声設定	90
		c	SR+ Setup	パイオニアフラットテレビとの連動設定	98
		d	HDMI Control Setup	HDMI コントロール機能に対応したパイオニア製品と連動操作するための設定	95
		e	OSD Adjustment	メニュー画面の表示位置(上下左右)調整	83

リスニング環境の設定について　～サラウンド再生のための設定～

本機の Advanced MCACC とは

以下6つの設定（補正）を音場補正と呼んでいます。サラウンド再生のための設定とは、この音場補正を行うことをいいます。本機のAuto MCACCセットアップ機能を使うと、これら6つの設定（音場補正）を自動で行うことができます。

スピーカーシステムの設定 (Speaker Setting)

ソースに含まれる音声成分のすべてを再生するための基本設定です。この設定が正しく行われないと、サウンドトラックの特定チャンネルに収録された音声が再生されなかったり、低域成分が欠落してしまう、などの不具合が発生する場合があります。スピーカー接続の有り / 無しや低域再生能力などを設定し、上記の問題を回避します。
スピーカーシステムの設定はすべての MCACC MEMORY に共通の設定となります。

スピーカー出力レベルの設定 (Channel Level)

リスニングポジションでの各チャンネルの音量レベルを一定に合わせる設定です。「スピーカーまでの距離の設定」と同様に、音の定位感や移動感を正確に再現することが目的です。この設定が正しく行われないと、いわゆる「バランスの悪い音」になってしまいます。これまでは聴感での設定が一般的でしたが、この方法では正確な設定は不可能です。プロのスタジオ・エンジニアは、ミキシング作業前に必ず専用の音圧測定器で測定を行い、バランスの微調整を施します。本機では MCACC によって、このプロレベルの精密な調整を誰でも簡単にできるようになりました。

スピーカーまでの距離の設定 (Speaker Distance)

実際には、距離を設定することで各チャンネル間の遅延（ディレイ）を算出・補正しています。マルチチャンネル再生では特に重要で、音の定位感や移動感を正確に再現するために必要です。AUTO MCACC では、メジャーなどによる実測に比べてサブウーファーまでの距離がやや遠めに設定されることがありますが、それは電気的な遅延も含めた補正となっているためなので問題ありません。
本機ではスピーカー距離が 1 cm 単位で補正されるため、より正確な遅延補正が可能です。

定在波制御 (Standing Wave)

オーディオの世界で問題となる定在波は、音波が壁などで反射し、もとの音波と干渉することで発生します。定在波は特定の低域周波数に極端なピークなどが発生したとき音質に悪影響を与えますが、定在波制御フィルターを自動または手動で設定することで、リスニングポイントで定在波の影響を受けないサウンドをお楽しみいただくことができます。本機の「Multi-Point」機能では、複数のリスニングポイントでの定在波を測定することもできます。

残響特性の測定 (Reverb Measurement)

リスニングルームの残響特性を測定します。本機の MCACC 機能で残響特性を考慮した補正を行ったときは、補正後の部屋の残響特性を測定することもできます。

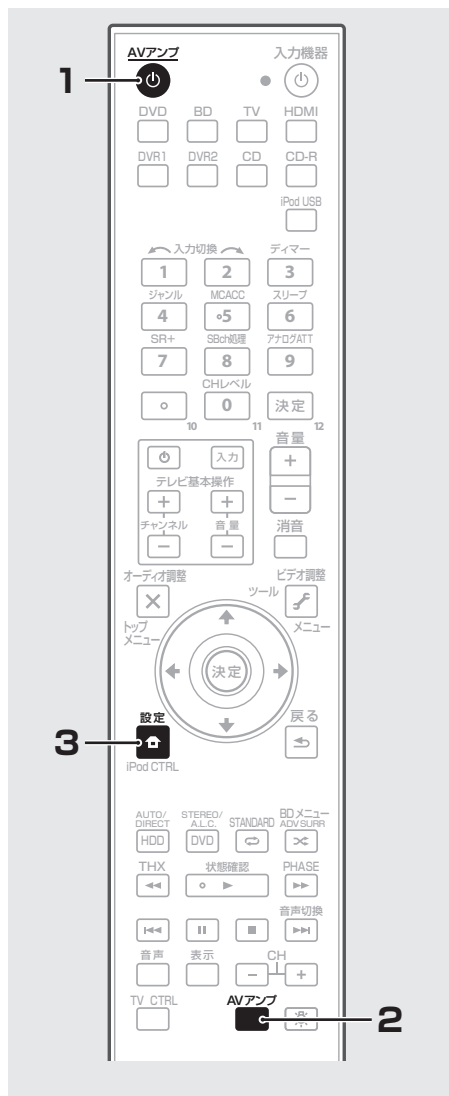
視聴環境の周波数特性の補正　（Aco Cal EQ Pro.）

「視聴環境の周波数特性の補正」とは、リスニングポイントでの視聴環境トータルの周波数特性（以下、F特）の補正を意味します。全チャンネルに同じ種類のスピーカーを使用しても、リスニングポイントでは音色が違って聞こえます。これは、設置場所・設置方法・壁面・内装など、さまざまな影響により実際のF特が違ってしまうためです。
本機の「視聴環境の周波数特性の補正」では、リスニングルーム固有のF特まで含めた補正をすることで、各チャンネルの音のつながりが飛躍的に向上し、これまでにない実像感やリアルな移動感を再現します。スタジオや映画館などにおいてはこの補正は絶対に欠かせないものです。これがホームシアターとの大きな差でしたが、当社の研究により、一般家庭環境におけるF特の補正には最も有効であるエンベロープ補正方式を採用し、この差を埋めることを可能にしました。また、本機では視聴環境の残響特性を考慮したF特補正 (Aco Cal EQ Pro.) を標準的に行っており、EQ 補正のカーブも「SYMMETRY」、「ALL CH ADJUST」、「FRONT ALIGN」と 3 タイプあります。通常のオート MCACC による測定（→ 12 ページ）では「SYMMETRY」の補正のみが行われます。オート MCACC でカスタム設定をすると、一度の測定で複数タイプの EQ 補正を行い、それぞれ別の MCACC MEMORY に保存させることができます（→ 60 ページ）。それぞれの

補正カーブの特長は以下のとおりです。お好みに応じてお使いください。

- SYMMETRY − L/R でペアになっているスピーカー 1 組ごとの周波数特性をフラットに補正します（センターなどペアでないスピーカーは個別に補正します）。位相特性を重視した補正をしたい場合におすすめです。
- ALL CH ADJUST −全チャンネルの周波数特性を、それぞれ個別にフラットに補正します。周波数特性を重視した補正をしたい場合におすすめです。
- FRONT ALIGN −フロント以外のスピーカーをフロントの特性に合わせこむ補正をします（フロントスピーカーは補正しません）。フロントスピーカーの特性を重視した補正をしたい場合におすすめです。

システムセットアップ設定の手順

電源を入れてメニュー画面を開くまでの手順です。ここから各設定の操作に進めます。

1 AVアンプ

本機とテレビの電源を入れる。

テレビに本機の出力映像が表示されるように、テレビ側の入力切換を合わせておきます。

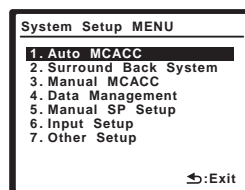
2 AVアンプ

リモコンをアンプ操作モードにする。

3 設定

システムセットアップにする。

テレビ画面にシステムセットアップが表示されます。

System Setup MENU
1. Auto MCACC
2. Surround Back System
3. Manual MCACC
4. Data Management
5. Manual SP Setup
6. Input Setup
7. Other Setup
:Exit

システムセットアップの操作には下記のボタンを使います。

リモコンボタン	用途
設定	システムセットアップを開く／閉じる
決定	カーソル移動と設定値の変更 選択項目を決定する
戻る	1つ前の画面に戻る

- ヘッドホン使用中は、システムセットアップは表示できません。
- 約3分間放置するとシステムセットアップ画面には自動的にスクリーンセーバー機能が働きます。
- 入力がiPod USBになっているときは、システムセットアップを行うことができません。また、ZONE2がONのときもシステムセットアップを行うことができません。
- 一度登録した設定内容は本機に記憶されるため、システムを使用するたびに設定し直す必要はありません。ただし、スピーカーシステムの構成や配置を変更したり、新しくスピーカーを追加したときには、設定し直す必要があります。
- システムセットアップ中は電源を切らないでください。電源を切るときはシステムセットアップを終了してください。

Auto MCACCをより詳細に測定／設定する

オートセットアップ(Auto MCACC)の基本的な使用方法は「ホームシアター入門」ステップ2 設定する(→12ページ)をご覧ください。

Auto MCACC の [CUSTOM] を選ぶと、下記の項目をより詳細に設定することができます。

「Custom Menu」：

どの項目をオートで設定するかを選択します。[ALL] はすべての項目、[Keep SP System」はスピーカーシステムの設定以外の項目を、それ以外はそれぞれの項目のみのオート設定となります。また、[Speaker Setting] は、[ALL] で測定するたびに測定結果が更新されます。[ALL] での測定後にリスニングポイントを変えて測定したいときは、[Keep SP System] で測定してください。

「SYMMETRY」、「ALL CH ADJ」、「FRONT ALIGN」：

(「Custom Menu」が [ALL]、[Keep SP System] に選択されているときのみ設定可)

EQ 補正カーブ（視聴環境の周波数特性の補正）ごとに測定 / 設定値の保存先を選びます（MEMORY 内のデータは上書きされます。各補正カーブの説明は 68 ページをご覧ください)。各 EQ の保存先をそれぞれ設定すれば、一度の測定で複数タイプの EQ 補正が行えます。SYMMETRY は常に測定しますが、他の 2 つは測定させないことも可能です。

「THX Speaker」：

(「Custom Menu」が [ALL]、[Speaker Setting] に選択されているときのみ設定可)

THX 認証のスピーカーシステムを使用しているときは [YES] を選択します。このとき [Speaker Setting] はすべてのスピーカーが SMALL（小）になります。

「MCACC」：

(「Custom Menu」が [Channel Level]、[Speaker Distance]、[EQ Pro.& S-Wave] に選択されているときのみ設定可)

測定 / 設定値の保存先を選びます（MEMORY 内のデータは上書きされます)。

「EQ Type」：

(「Custom Menu」が [EQ Pro. & S-Wave] に選択されているときのみ設定可)

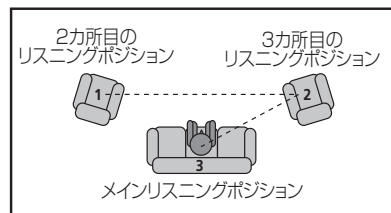
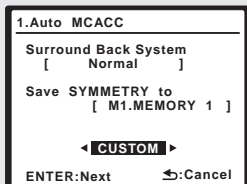
EQ 補正カーブ（視聴環境の周波数特性の補正）を 1 つ選択します（各 EQ 補正カーブの説明は 68 ページをご覧ください)。

「Stand.Wave Multi-Point」：

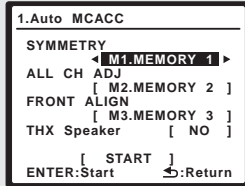
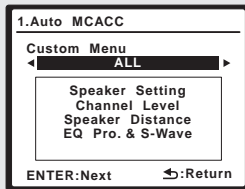
(「Custom Menu」が [EQ Pro. & S-Wave] に選択されているときのみ設定可)

[YES] にすることでメインのリスニングポジションとそれ以外のリスニングポジション 2 カ所（計 3 カ所）の定在波制御（Standing Wave）を行うことができます。設定の手順は OSD 画面に従って、右のイラストのようにメインポジションでの測定が最後になるようにセットアップ用マイクを設置していきます。リスニングポジションを 1 カ所でお楽しみいただくときは [NO] にすることをお勧めします。

2

```
1.Auto  MCACC
 Surround Back System
   [      Normal      ]
 Save  SYMMETRY  to
          [  M1.MEMORY  1  ]
          ◀ CUSTOM ▶
 ENTER:Next          :Cancel
```

1 12ページの手順1～2までを行います。

2 [CUSTOM]を選んで決定する。

3

3 より詳しく設定したい項目を選んで設定する。

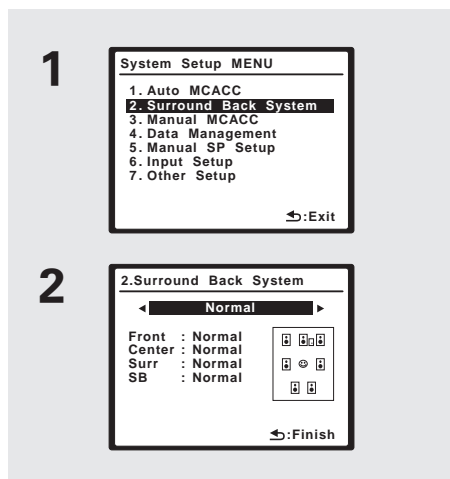
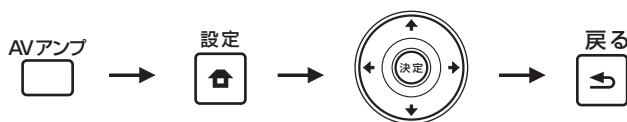
Custom Menu	[ALL]、[Keep SP System]、[Speaker Setting]、[Channel Level]、[Speaker Distance]、[EQ Pro. & S-Wave]
保存先	[MEMORY 1 ～ 6]
THX Speaker	[NO]、[YES]
EQ Type	[SYMMETRY]、[ALL CH ADJ]、[FRONT ALIGN]
Stand.Wave Multi-Point	[NO]、[YES]

4 [START]を選んで決定する。

Custom Menuで選択した項目の自動測定に進みます。「MCACC Data Check」の画面が表示されたら自動測定は終了です。 測定結果を確認してください（「測定/設定結果を確認する」→15ページ）。
測定が終わりましたら、必ずセットアップ用マイクを本機から抜いてください。

- Auto MCACCの[DEMO]を選ぶと、Auto MCACCのデモモードになります。デモモードはセットアップ用マイクを使用せずに開始することが可能で、スピーカーを接続していればテストトーンも出力されます。デモモードでの測定内容は本機の設定に反映されず、エラーも発生しません。デモモードを終了させるには、戻るボタンを押してください。戻るボタンを押すまでデモモードは繰り返されます。
- 「Acoustic Cal EQ」（周波数特性の補正）と「Standing Wave」（定在波制御）の効果は、それぞれのMCACC MEMORYでON/OFFを切り換えることができます。詳しくは「オーディオ調整機能を使用する」（→44ページ）をご覧ください。

スピーカーの使用用途を選択する ～ Surround Back System ～

ここではスピーカー端子B(サラウンドバックチャンネル)の使用用途を設定します。以下の項目から選択します。
[Normal]：一般的なサラウンドバックスピーカー用(6.1chまたは7.1chシステム)
[Speaker B]：メインの5.1chシステムの音を、メインとは別に2chダウンミックスしたステレオ再生用
[Front Bi-Amp]：フロントスピーカーのバイアンプ駆動用(5.1chシステム)
[ZONE 2]：本機のある部屋(メインゾーン)とは別の部屋(ZONE 2)のステレオ再生用

1 [2. Surround Back System]を選んで決定する。

「Normal」と「Speaker B」、「Front Bi-Amp」、[ZONE 2]の選択画面が表示されます。詳しい説明は上記をご覧ください。

2 [Normal]か[Speaker B]、[Front Bi-Amp]、[ZONE 2]のいずれかを選んで決定する。

3 戻るボタンを押す。

サラウンドバックシステムの設定を終了します。

[Speaker B]、[Front Bi-Amp]、[ZONE 2]を選ぶと、サラウンドバックスピーカーについての各種設定を行うことはできません。

プリアウト出力について

上記設定に連動して、プリアウト端子のサラウンドバックchから出力される音声が以下のようになります。
[Normal]のとき：サラウンドバックチャンネルの音声
[Speaker B]のとき：ダウンミックスされた2chの音声
[Front Bi-Amp]のとき：フロントチャンネルと同じ音声
[ZONE 2]のとき：ZONE 2で選択されている入力ファンクションのアナログ音声(フロント2ch信号相当)

リスニング環境をお好みに調整する ～ Manual MCACC ～

Manual MCACCでは、設定をより詳しく手動で調整することができます。それぞれの調整を行う前に、リモコンのAVアンプボタンを押してからMCACCボタンを押し、調整したいMCACC MEMORYを選んで、それぞれの調整を行ってください。MCACC MEMORYがOFFの状態でManual MCACCを選択すると、MCACCの選択画面になります。この場合、調整したいMCACC MEMORYを選択し、調整項目へとお進みください。設定にはセットアップ用マイクを使用することがあります。マイクの接続のしかたは、12～13ページをご覧ください。マイクを接続する際は、設定ボタンを押してシステムセットアップが表示されている状態で差し込んでください。システムセットアップが表示されていない状態でマイクを差し込むと、Auto MCACCのスタート画面になります。

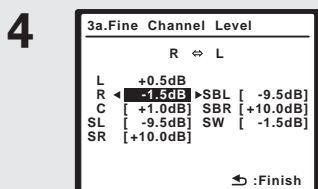
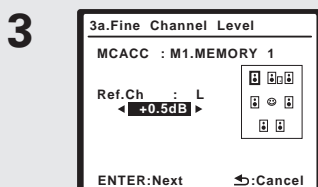
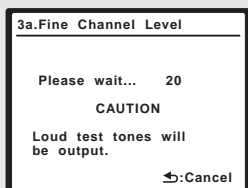
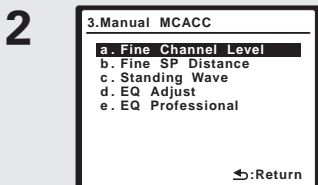
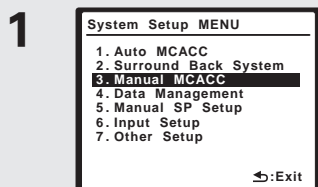
スピーカー出力レベルの微調整 （Fine Channel Level）

フロントスピーカーを基準としてその他のチャンネルレベルを調整します。選択したチャンネルとそのチャンネルに対して基準となるチャンネルからテストトーンが再生されますので、両方のテストトーンが同じ大きさに聞こえるように調整します。

1

2

3

4

システムセットアップで使用するボタン

1 [3. Manual MCACC]を選んで決定する。

2 [Fine Channel Level]を選んで決定する。

スピーカー出力レベルの微調整を行う画面になります。

注意

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0.0 dBになり、テストトーンが再生されます。

3 フロント左チャンネルのレベルを調整して決定する。

フロント左チャンネルからテストトーンが出力されます。音圧計をお持ちの場合は、音圧レベルをCウェイト／スローモードで75 dB SPLに調整してください。

4 調整したいスピーカーを選んでチャンネルレベルを調整する。

選択したチャンネルとそのチャンネルに対して基準となるチャンネルから交互にテストトーンが出力されます。両方のテストトーンが同じ大きさになるように調整します。

－10.0 dBから＋10.0 dBの範囲内で、0.5 dB間隔で調整することができます。

5 戻るボタンを押す。

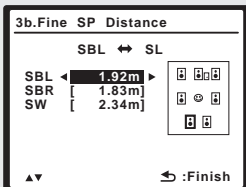
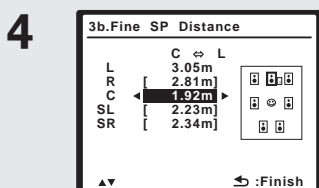
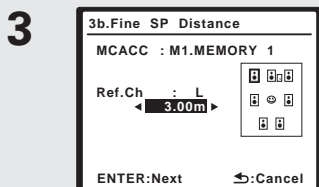
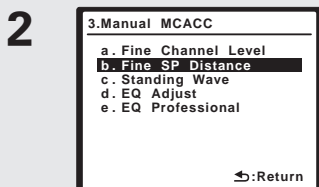
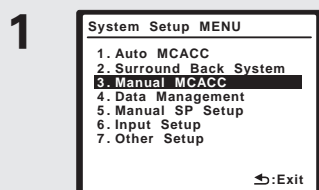
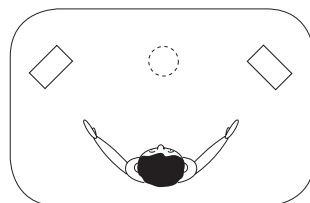
スピーカー出力レベルの微調整を終了します。

サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため、実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

スピーカーまでの距離の微調整 （Fine SP Distance）

フロント左スピーカーを基準として、その他のスピーカーの距離を調整します。選択したチャンネルと、そのチャンネルに対して基準となるチャンネルからテストパルスが再生されます。その2つのスピーカーに対してリスニングポジションから右図のように向き、2つのテストパルスの聞こえるポイントが中央に定位するように数値を調整します。このときさらに細かく中央に定位させたいときは、スピーカーの位置を数cm単位で動かしたり、向きを少し動かすことでポイントを中央に定位させることができます。なお、サブウーファーのテストパルスは他chと音色が異なります。サブウーファーの音がはっきり聞こえるように調整してください。また、サブウーファーの調整はお持ちのスピーカーの低域再生能力によって、設定値を上下したりスピーカーの位置を変えても聞こえ方の変化がわかりにくい場合があります。

システムセットアップで使用するボタン

AVアンプ → 設定 → 決定 → 戻る

1 **[3. Manual MCACC]を選んで決定する。**

2 **[Fine SP Distance]を選んで決定する。**

スピーカーまでの距離の微調整を行う画面になります。

3 **フロント左チャンネルのスピーカーまでの実測距離を入力して決定する。**

4 **調整したいスピーカーを選んでスピーカーまでの距離を調整する。**

選択したチャンネルとそれに対して基準となるスピーカーから、テストパルスが以下のように出力されます。
R - L
C - L
SL - L
SR - R
SBL - SL
SBR - SR
SW - L
0.01 mから9.00 mの範囲内で、0.01 m間隔で設定できます。

テストパルスは大きな音で再生されます。
MASTER VOLUME は自動的に 0 dB になりテストパルスが再生されます。

5 **戻るボタンを押す。**

スピーカーまでの距離の微調整を終了します。

テストパルスの聞こえるポイントがどうしても中央に定位しないときは、スピーカーと本機の⊕、⊖端子が正しく接続されているかを確認してください。⊕と⊖が逆に接続されていると中央に定位しません。

スピーカーまでの距離調整とは

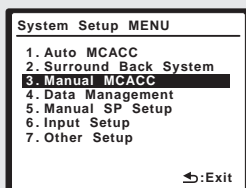
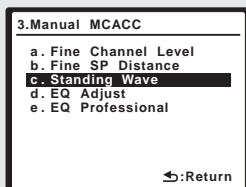
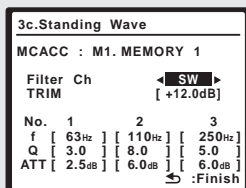
距離の調整は、映像の「ピント合わせ」によく似ています。ピントが合っていない映像はどこで見てもぼやけて見えますが、ピントが合った映像は遠くからでも見ることができます。音の焦点も同じで、ある一点（マイクを置いたリスニングポジション）に音源からの到達時間をしっかり合わせることで、リスニングポジション一点だけでなくマルチチャンネル環境における音場全体を正しく形成します。

定在波制御 （Standing Wave）

オーディオの世界で問題となる定在波は、音波が壁などで反射し、もとの音波と干渉することで発生します。定在波は特定の低域周波数に極端なピークなどが発生したとき音質に悪影響を与えます。定在波の影響はスピーカーの位置やリスニングポジションによっても変化します。ここでは実際に音楽ソースなどの再生音を聴きながら、定在波の影響を制御します。

1

2

3.Manual MCACC
a. Fine Channel Level
b. Fine SP Distance
c. Standing Wave
d. EQ Adjust
e. EQ Professional
:Return

3

- 音声入力でHDMIを選んでいるときは、実際に音を聞きながらの補正を行うことはできません。
- オーディオ調整機能の「S-WAVE」の項目を「S-WAVE OFF」にしているMCACC MEMORYでここでの設定を行うと、自動で「S-WAVE ON」に切り換わります（→44ページ）。

システムセットアップで使用するボタン

1 [3. Manual MCACC]を選んで決定する。

2 [Standing Wave]を選んで決定する。

定在波制御のフィルター設定画面になります。

3 「Filter Ch」を選ぶ。

どのチャンネルの定在波を制御するか選択します。
各チャンネルごとに用意された、3つのフィルターで定在波の影響を制御します。
[MAIN]：センタースピーカーとサブウーファー以外のすべてのチャンネル
[Center]：センターチャンネルのみ
[SW]：サブウーファーのみ

4 フィルター No.1からNo.3について、各項目を調整する。

f：各フィルターの中心周波数を、63Hz～250Hzの範囲で調整します。
Q：各フィルターの帯域幅を2.0～9.8の範囲内、0.2間隔で調整します。数値が大きくなるほど帯域幅はより狭くなります。
ATT：各フィルターの減衰量を、0.0dB～12.0dBの範囲内、0.5 dB間隔で設定します。
（「TRIM」はサブウーファーのレベルを－12.0dB～12.0dBの範囲内、0.5 dB間隔で調整します。手順3で[SW]を選んだときのみ調整することができます。）

5 戻るボタンを押す。

定在波制御の設定を終了します。

チャンネルごとの周波数特性の補正（EQ Adjust）

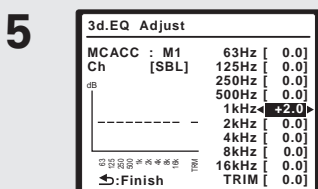
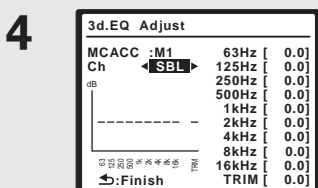
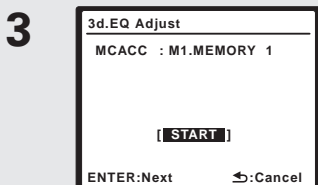
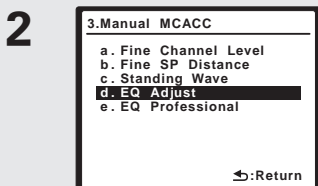
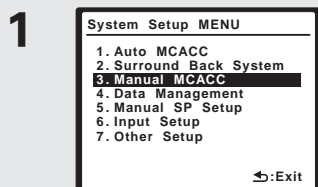
補正カーブを手動で調整します。下記の調整を行う前に、MCACCボタンでどのMCACC MEMORYのEQ値を調整するか選んでおきます。

1

2

3

4

5

オーディオ調整機能の「EQ」（周波数特性の補正）の項目を「EQ OFF」にしているMCACC MEMORYでここでの設定を行うと、自動で「EQ ON」に切り換わります。（→44ページ）

システムセットアップで使用するボタン

1 [3. Manual MCACC]を選んで決定する。

2 [EQ Adjust]を選んで決定する。

どのMCACC MEMORYのEQ値を調整するかの確認画面になります。

3 [START]を選んで決定する。

補正カーブの調整画面になります。

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUME は自動的に 0.0 dB になりテストトーンが再生されます。

4 調整したいチャンネルを選ぶ。

5 調整したい周波数帯域を選んで調整する。

−12.0 dBから+12.0 dBの範囲内で、0.5 dB間隔で調整することができます。

- 調整中に「OVER!」がディスプレイに表示されたときは、その帯域または他の帯域のレベルが高すぎるので、「OVER!」表示が消えるまで、さまざまな帯域のレベルを下げてください。
- 「スピーカーシステムの設定」でSMALL（小）に設定されたチャンネルは「63Hz」を選ぶことはできません。
- 「TRIM」では、それぞれの帯域を調整することで、変わってしまった全体的なレベルのバランスを再調整します。

6 手順4～5を繰り返して、各チャンネルの周波数帯域を調整する。

7 戻るボタンを押す。

チャンネルごとの周波数特性の補正を終了します。

部屋の残響特性の測定と残響を考慮した補正(EQ Professional)

残響特性とは視聴環境における音の響き方のことです。ここでは残響特性の測定と確認、それに適した周波数特性の補正などをそれぞれ個別に行うことができます。チャンネルごとに響き方が異なったり、周波数ごとに響き方が異なるような視聴環境では[Advanced EQ Setup]が特に効果を発揮します。
残響特性は部屋の形状や内装、スピーカーの設置状況などによって変化するため、この機能は理想的な視聴環境を創るための目安としてもご利用いただけます。また、周波数特性の補正後における視聴環境の残響特性をパソコン画面上で詳しく確認することも可能です(→71ページ)。

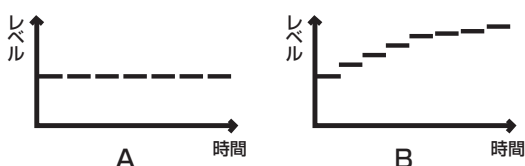
[Reverb Measurement](残響特性の測定)
視聴環境の残響特性をおよそ1～3分程度で測定します。
現状の部屋の残響特性を測定するときは、[Reverb Measurement]を選んだあと、「EQ OFF」を選択してから測定してください。
残響特性を考慮した補正を行っているときは、補正後の部屋の残響特性を測定することもできます。
その場合は補正したMCACC MEMORYを選び、[Reverb Mesurement]を選んだあと、「EQ ON」を選択してから測定してください。

[Reverb View](残響特性の確認)
測定された残響特性の詳細をOSD画面(テレビ画面)で確認することができます。

[Advanced EQ Setup](上級者向けEQ設定)
OSD画面(テレビ画面)に表示される残響特性を参考にしながら、周波数特性の補正を行うための「時間軸上の位置」をお好みで選択し補正を行います。

- [Advanced EQ Setup]は、以前に測定したAuto MCACC(→12ページ)の補正カーブに上書きしてしまいますのでご注意ください。過去のデータを残したいときは、別のMCACC MEMORYを選んでから[Advanced EQ Setup]を行ってください。
- [Advanced EQ Setup]は周波数特性の補正についての自動設定です。Auto MCACCと違い、スピーカーシステム、スピーカーまでの距離、スピーカー出力レベルなどの設定は行いませんので、[Advanced EQ Setup]を行う前に「Auto MCACC」(→12ページ)を行うことをお勧めします。
- 「Auto MCACC」の[CUSTOM]で、「Custom Menu」を[ALL]、[Keep SP System]、[EQ Pro. & S-Wave]のいずれかで設定したときは、すでに部屋の残響特性の測定から最適な補正時間位置の設定、周波数特性の補正を自動的に行い、理想的な視聴環境に補正されています。
- 「Auto MCACC」(→12ページ)後や「Reverb Measurement(残響特性の測定)」のあとに「Reverb View(残響特性の確認)」を行うと、定在波制御の設定値によって残響特性のグラフに違いが出ることがあります。「Auto MCACC」では定在波を制御した状態で残響測定しているため、定在波の影響を排除した残響特性グラフが表示されます。それに対して「Reverb Measurement(残響特性の測定)」では定在波を制御せずに残響測定するため、定在波を含めた残響特性グラフをご覧いただけます。部屋の残響特性そのもの(定在波もそのままの状態)を確認したいときは、「Reverb Measurement(残響特性の測定)」を行うことをお勧めします。

残響特性グラフの見方

このグラフは、スピーカーから一定のテストノイズを出力し続けた時のマイク入力レベルの時間変移を示したものです。まったく残響がない場合は下図Aのようになりますが、残響がある場合、徐々に音響パワーが累積されて下図Bのようになります。

- 低い周波数帯域は群遅延特性の影響で0[ms]付近の立ち上がりが鈍くなる場合があります。
- 各スピーカーの「距離と能力の差」による「ディレイとレベル差」は、グラフを見やすくするため、補正されたものを表示します。周波数特性に関しては補正しないで表示します。

Advanced EQ Setup での補正時間位置の決め方

[Reverb Measurement]で測定された残響特性の詳細を参考に、補正時間位置をご自身で選択します。
まずは[Reverb View]または[Advanced EQ Setup]のOSD画面か、パソコン上で残響特性グラフを確認(→71ページ)し、以下の1～3のパターンを参考に補正時間位置を決めます。
従来のMCACCによるEQ補正では、図1のようにマイク入力のデータ取得時間が80～160[ms]の固定になっていました。それに対して、よりプロフェッショナルなEQ 補正ができる本機のAco Cal EQ Pro.では、残響音の悪影響を受けないようにするため、0～80[ms]の中の1ポイント(20[ms]幅)を選択できます。
各周波数、各チャンネルで、残響特性カーブの形状の差が大きい場合は、蓄積された残響音の悪影響を防ぐために、早めの時間位置を選択することで、直接音(初期反射音を含む)の不ぞろいのみを補正することができます。残響カーブのどこかの周波数帯に突発的な変化のない、早めの時間帯(たとえば30～50[ms])を選択します。

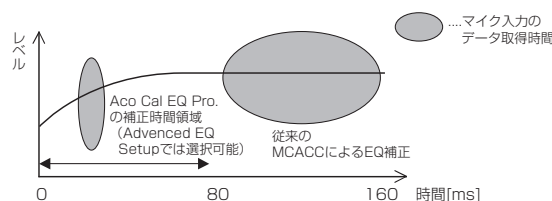



図1 Aco Cal EQ Pro.と従来のMCACC EQの比較

この機能は上級者向けの機能になります。補正時間位置の設定およびAdvanced EQ Setupをすべて自動で行いたい場合は「Auto MCACC」の[ALL]、[Keep SP System]または[EQ Pro. & S-Wave]で測定してください。

ケース1)周波数ごとに残響特性が異なる場合

図2は、低域が大きく響き、高域はあまり響かないという特性の例です。この場合、従来のEQ補正は80～160[ms]のデータを取得していたため、低域の残響音の蓄積により、「低域が大きく、高域が小さい」と判断し、EQのカーブは高域を上げ気味に補正していました。しかし、スピーカーから直接耳に届く約40[ms]以内の特性は、高域も十分な音量が出ていますので、遅い時間位置で補正してしまうと高域がきつく感じることがありました。このような場合にはスピーカーからの直接音を補正する意味で、Advanced EQ Setupで30～50[ms]くらいを指定すると、スピーカーからの直接音(初期反射音を含む)がフラットになり、聴きやすい音場になります。

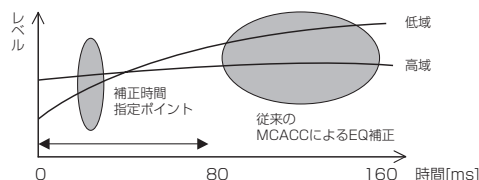



図2 周波数ごとに残響特性が異なる場合の例

ケース2)チャンネルごとに残響特性が異なる場合

図3は、チャンネルごとに残響特性が異なっている場合の例です。このような場合、従来のEQ補正は80～160[ms]のデータを取得していたため、スピーカーから音が放射されてから80[ms]以降に徐々に各チャンネルの音色がそろってくるように補正していました。一方、音像の定位感や移動感、音色のつながりは、残響音ではなく、各スピーカーからの直接音(初期反射音を含む)に左右されます。このような場合は、Advanced EQ Setupで30～50[ms]くらいを指定して補正をすると、直接音の特性がそろった理想的な音場でお楽しみいただけるようになります。

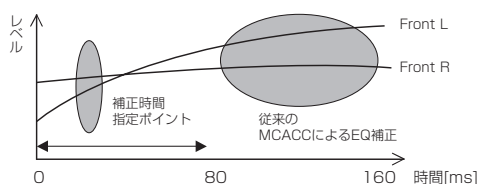



図3 チャンネルごとに残響特性が異なる場合の例

ケース3)全体的に残響特性が似ている場合

図4のように、各周波数、各チャンネルの残響特性が似ているような場合には、残響特性が悪影響を及ぼすことはありません。このような場合は30～50[ms]ではなく、Advanced EQ Setupで60～80[ms]くらいを指定して補正することをお勧めします。直接音と残響音をすべて含んだトータルでの補正が行われ、理想的な音場空間を再現することができます。

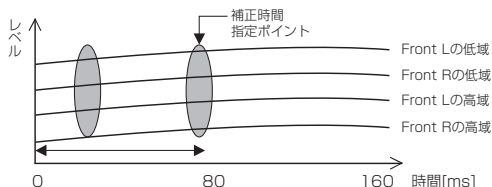



図4 周波数ごと、およびチャンネルごとに残響特性が似ている場合の例

本機能の有効活用

本機の「残響特性測定およびグラフ表示機能」は、視聴環境整備のツールとしてお使いいただけます。スピーカーのL/R(左右)で特性が大きく異なる場合は、片側の設置に問題があったり、左右の壁の反射が大きく影響している、などが考えられます。設置の見直しや、吸音材の使用効果などを何度も確認しながら、より理想的な視聴環境を創ることができます。

残響特性の結果をパソコンのモニター画面で確認したい場合には、測定前にあらかじめ本機とパソコンを接続する必要があります。使用できるパソコンの環境については71ページをご覧ください。
RS-232Cケーブルで接続してください。ケーブルはメス - メスのクロスタイプを使用します。詳しくはダウンロードしたPC アプリケーションの取扱説明書をご覧ください。

接続するときは、本機とパソコンの主電源を必ず OFF にしてください。

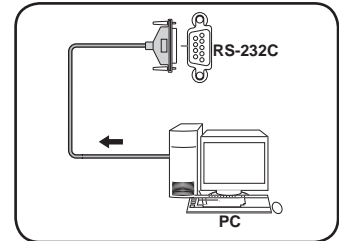
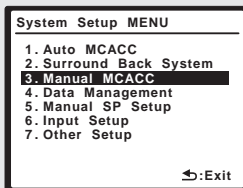
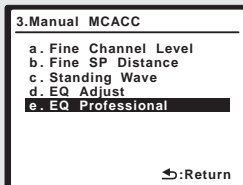
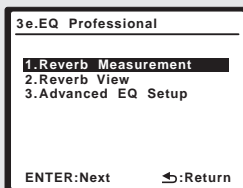
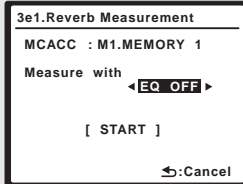
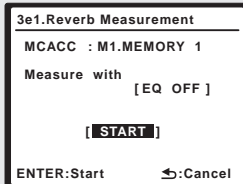
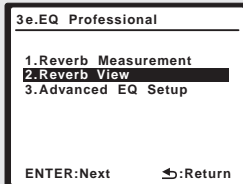
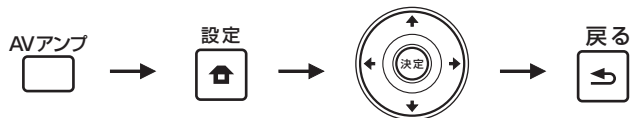
システムセットアップで使用するボタン

1

```
System Setup MENU
 1. Auto MCACC
 2. Surround Back System
 3. Manual MCACC
 4. Data Management
 5. Manual SP Setup
 6. Input Setup
 7. Other Setup
                          :Exit
```

1 [3. Manual MCACC]を選んで決定する。

2

```
3.Manual MCACC
  a. Fine Channel Level
  b. Fine SP Distance
  c. Standing Wave
  d. EQ Adjust
  e. EQ Professional
                        :Return
```

2 [EQ Professional]を選んで決定する。

3

```
3e.EQ Professional
 1.Reverb Measurement
 2.Reverb View
 3.Advanced EQ Setup

 ENTER:Next             :Return
```

3 [Reverb Measurement]を選んで決定する。

4

```
3e1.Reverb Measurement
 MCACC  : M1.MEMORY 1
 Measure with
               ◀EQ OFF▶
        [ START ]
                        :Cancel
```

4 [EQ OFF]を選ぶ。

残響特性を考慮した補正を行った状態の部屋の残響特性を測定/確認したいときは、あらかじめ補正を行ったMCACC MEMORYを選んだうえで[EQ ON]を選びます。

5 マイクを接続して残響特性の測定の準備をする。

- 付属のセットアップ用マイクを接続して、リスニングポジションに設置してください。（TVモニターの近くには設置しないでください。）
- 測定中は静かにしてください。
- スピーカーとリスニングポジションの間にある障害物を取り除いてください。

6

```
3e1.Reverb Measurement
 MCACC  : M1.MEMORY 1
 Measure with
               [EQ OFF ]
        [ START ]
ENTER:Start             :Cancel
```

6 [START]を選んで決定する。

残響特性の測定になります。測定にはおよそ1～3分程度かかります。

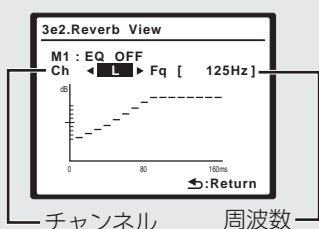
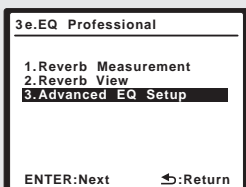
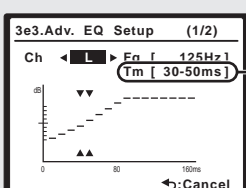
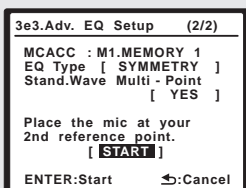
測定終了後、測定結果をOSD画面で確認するときは手順7へ、パソコンのモニター画面で確認するときは「各種測定結果のPC表示機能」（→71ページ）へお進みください。測定結果を確認せずに周波数特性の補正を行うときは、手順11へお進みください。

7

```
3e.EQ Professional
 1.Reverb Measurement
 2.Reverb View
 3.Advanced EQ Setup

 ENTER:Next             :Return
```

7 [Reverb View]を選んで決定する。

残響特性の測定結果確認画面になります。

OSDのdB表示（縦軸の目盛り）は2 dBごとに区切られています。

8 測定結果を確認したいチャンネル、周波数を選ぶ。

9 手順8を繰り返して、各チャンネルにおける各周波数の残響特性の測定結果を確認する。

10 残響特性の測定結果画面を終了します。

- 残響特性の詳細をご覧になった結果、チャンネルごとまたは周波数ごとに響き方が異なるときは手順11へお進みください。
- 部屋の残響特性を改善したいときはここで吸音材の調整などを見直し、視聴環境の整備を行ってください。そのあと、再度その効果を確認することをお勧めします。
- 残響特性が特にバラつきなく測定されているときは理想的な残響特性が得られていますので、手順15へお進みください。このとき、通常のAuto MCACC補正を行っていないと周波数特性は補正されないままですので、[EQ Professional]を終了したあと、61ページの手順3の[EQ Pro. & S-WAVE]を実行してください。

11 [Advanced EQ Setup]を選んで決定する。

補正時間位置を指定する画面になります。

12 補正時間位置を指定する。

チャンネルと周波数を切り換えながら残響特性カーブを参考にして、補正時間位置を指定します。補正時間位置の決め方は「Advanced EQ Setupでの補正時間位置の決め方」（→68ページ）をご覧ください。補正時間位置は各チャンネル、各周波数で共通です。チャンネルと周波数の切り換えは、参考にする残響特性カーブの切り換えです。

13 ⬇ボタンを押して画面を切り換え、必要に応じて「EQ Type」と「Stand.Wave Multi-Point」を設定する。

それぞれの詳しい説明は60ページをご覧ください。

14 [START]を選んで決定する。

手順12で選んだ時間帯の音で、周波数特性の補正を自動で行います。測定にはおよそ2～4分程度かかります。

15 戻るボタンを押す。

部屋の残響特性の測定と残響を考慮した補正(EQ Professional)を終了します。
[MCACC Data Check]で測定結果を確認できます。

各種測定結果の PC 表示機能

残響特性の測定結果をパソコンに転送してご確認いただくには、以下の条件を満たしている必要があります。

パソコン本体

- OSがMicrosoft® 「Windows® XP」(Service Pack 2)または「Windows® 2000」であること。
- CPUがPentium 3/300 MHz以上またはAMD K6/300 MHz以上(または100 %互換性のあるCPU)であること
- メモリーが128 MB以上であること
- 画面解像度が800×600ドット以上であること
- インターネットに接続可能であること
- RS-232Cポートを搭載していること(COMポートの接続についてはパソコンのメーカーへお問い合わせください)

RS-232Cケーブル

- メス - メス：クロスタイプ(インターリンク、リバースタイプなど)を使用すること。詳しくはダウンロードしたPC アプリケーションの取扱説明書をご覧ください。

専用アプリケーション・ソフトおよび専用取扱説明書

- 下記URLでお客様登録をしたあと、ソフトウェアダウンロードへ進み、ダウンロードしてください。
  http://pioneer.jp/support/

ノートPCなどRS-232C端子がないパソコンの場合は、市販のUSB－RS-232C変換ケーブル(USB-シリアルケーブル)を使い、USB経由で接続することも可能です。

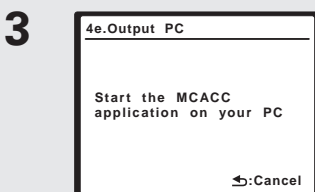
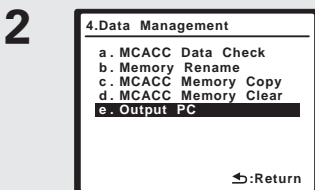
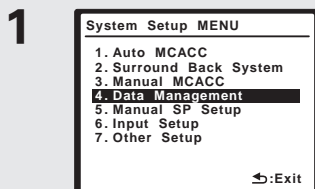
1

System Setup MENU
1. Auto MCACC
2. Surround Back System
3. Manual MCACC
4. Data Management
5. Manual SP Setup
6. Input Setup
7. Other Setup
:Exit

2

4.Data Management
a. MCACC Data Check
b. Memory Rename
c. MCACC Memory Copy
d. MCACC Memory Clear
e. Output PC
:Return

3

データ通信の前に本機の設定で、一度Auto MCACC［ALL］(→12、60ページ)を行った状態でRS-232Cケーブルを接続し、「Reverb Measurement」(→69ページ)を行ってください。

1 [4. Data Management]を選んで決定する。

2 [Output PC]を選んで決定する。

パソコンへのデータ転送待ち画面になります。

3 パソコンの電源を入れて専用のPCアプリケーションを起動してください。

PC アプリケーションの取扱説明書の指示に従い、データ転送を行います。
パソコン表示用の残響特性データは、再度残響特性の測定を行うと上書きされます。また本機の電源を切ることでも残響特性データはメモリーから消去されますので、測定後はすみやかにパソコンへデータ送信し、保存しておくことをお勧めします。

4 戻るボタンを押す。

パソコンへのデータ転送を終了します。

残響特性の表示は、最後に測定した残響特性が「EQ OFF」であれば周波数特性の補正前、「EQ ON」であれば周波数特性の補正後の表示をご覧いただけます。詳しくは、専用アプリケーションの取扱説明書をご覧ください。

MCACC MEMORYのデータ管理をする ～Data Management～

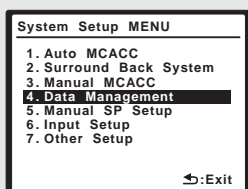
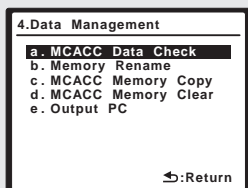
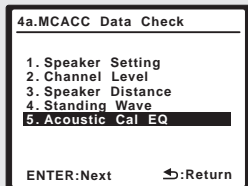
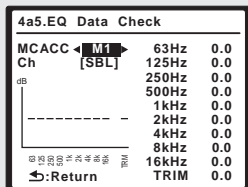
「Auto MCACC」や「Manual MCACC」で設定された各種設定内容や設定値を確認、コピー、消去することができます。またMCACC MEMORYに名前をつけることもできます。

設定データを確認する （MCACC Data Check）

「Auto MCACC」や「Manual MCACC」で設定された､以下の各設定項目の内容や設定値を確認することができます。

Speaker Setting ：スピーカーシステムの設定
Channel Level ：スピーカー出力レベルの設定
Speaker Distance ：スピーカーまでの距離
Standing Wave ：定在波制御フィルター設定
Acoustic Cal EQ ：視聴環境の周波数特性の補正値

4

```
4a5.EQ Data Check
MCACC ◀ M1 ▶    63Hz  0.0
Ch     [SBL]   125Hz  0.0
               250Hz  0.0
               500Hz  0.0
                1kHz  0.0
                2kHz  0.0
                4kHz  0.0
                8kHz  0.0
               16kHz  0.0
:Return         TRIM  0.0
```

システムセットアップで使用するボタン

1 [4. Data Management]を選んで決定する。

2 [MCACC Data Check]を選んで決定する。

確認したい設定の項目の選択画面になります。

3 確認したい設定項目を選んで決定する。

4 必要に応じて確認したいMCACC MEMORYやChなどを選ぶ。

ソースを再生しながらMCACC MEMORYを変えることで、各MEMORYの設定値を確認しながらそのサウンドの変化を確認することができます。
他の設定項目を確認するときは、戻るボタンを押して手順3へ戻ります。

5 戻るボタンを押す。

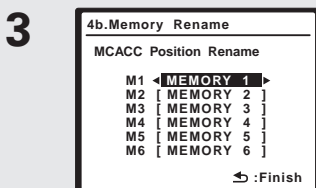
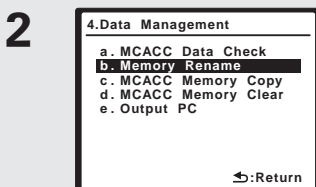
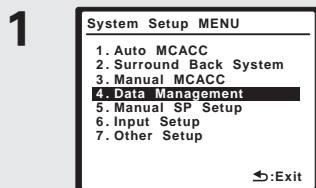
[MCACC Data Check]を終了します。

設定データの名前を変更する (Memory Rename)

MCACC MEMORY1～6の名前を変更することができます。たとえば、映画を楽しむ視聴位置で音場補正を行ったときは「MOVIE」、ゲームを楽しむ視聴位置であれば「GAME」のように変更することができます。
変更したい設定データの名前は以下の中から選びます。
[SYMMETRY] [ALL ADJ] [F.ALIGN] [MOVIE] [MUSIC] [GAME] [PARTY] [SOFA] [SEAT]

1

2

3

システムセットアップで使用するボタン

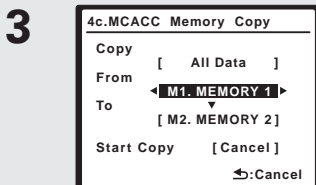
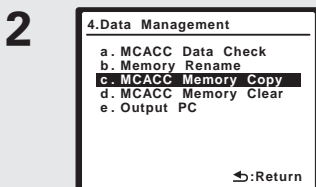
1 [4. Data Management]を選んで決定する。

2 [Memory Rename]を選んで決定する。
名前を変更したいMCACC MEMORYの選択画面になります。

3 **名前を変更したいMCACC MEMORYを選んで名前を変更する。**
他にも名前を変更したいMCACC MEMORYがあるときは選んで変更します。

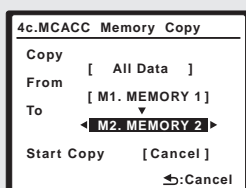
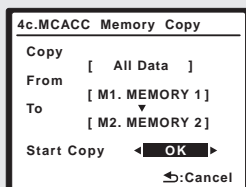
4 **戻るボタンを押す。**
[Memory Rename]を終了します。

設定データをコピーする (MCACC Memory Copy)

「Auto MCACC」や「Manual MCACC」で設定されたMCACC MEMORYを、他の5つのMEMORYのいずれかにコピーすることができます。MCACC MEMORYは全部で6つまで設定することができます。

システムセットアップで使用するボタン

1 [4. Data Management]を選んで決定する。

2 [MCACC Memory Copy]を選んで決定する。
コピーしたいMCACC MEMORY(From)と、コピーされるMCACC MEMORY(To)の選択画面になります。

3 **コピーしたいMCACC MEMORYを選ぶ。**

4 コピー先のMCACC MEMORYを選ぶ。

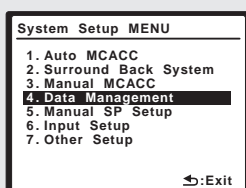
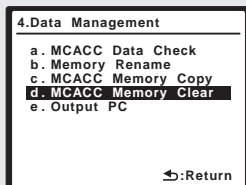
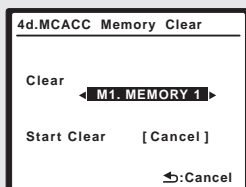
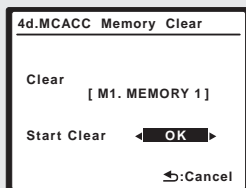
5 [OK]を選んで決定する。

設定内容のコピーが開始されます。
[Cancel]を選ぶとコピーは行われません。
Completed!と表示されたらコピーは終了です。

6 戻るボタンを押す。

[MCACC Memory Copy]を終了します。

設定データを消去する (MCACC Memory Clear)

6つあるMCACC MEMORYの中から、必要のないMEMORYを消去します。

1 [4. Data Management]を選んで決定する。

2 [MCACC Memory Clear]を選んで決定する。

消去したいMCACC MEMORYの選択画面になります。

3 消去したいMCACC MEMORYを選ぶ。

4 [OK]を選んで決定する。

手順3で選んだMCACC MEMORYの消去を開始します。
[Cancel]を選ぶと消去は行われません。
Completed!と表示されたら消去は終了です。

5 他にも消去したいMCACC MEMORYがあるときは手順2～4を繰り返す。

6 戻るボタンを押す。

[Data Management]を終了します。

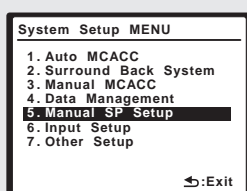
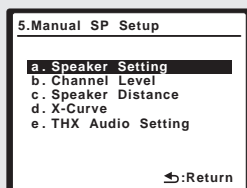
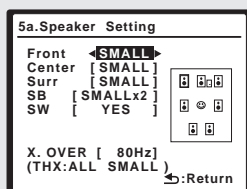
スピーカーやサブウーファーの音を調整する ～Manual SP Setup～

「リスニング環境を測定して最適な設定をする」（→12ページ）でオートセットアップを行った場合は、すでに設定されています。必要に応じてお好みで再設定できます。

スピーカー接続と低音再生能力を設定する（Speaker Setting）

各チャンネルに接続されたスピーカーの有無や低域再生能力の大小を設定することで、再生するソースの全音域を最適なチャンネルへ配分します。お持ちのスピーカーシステムや視聴環境などに合わせて、正しく設定してください。[SMALL]（小）に設定されたスピーカーがあるとき、何Hz以下の低音域を他のスピーカー（サブウーファーを含む）で再生するか、またはLFE信号の何Hz以下の低音域を再生するかをX.OVER（クロスオーバー周波数）の設定で行います。サブウーファーの再生する音域成分については、次ページをご覧ください。

1

```
System Setup MENU
 1. Auto MCACC
 2. Surround Back System
 3. Manual MCACC
 4. Data Management
 5. Manual SP Setup
 6. Input Setup
 7. Other Setup
                      :Exit
```

2

3

- THX認証のスピーカーシステムをご使用の際は、すべて[SMALL]に設定してください。
- 工場出荷時、クロスオーバー周波数は80 Hzに設定されています。
- THXスピーカーをご使用の場合、クロスオーバー周波数は80 Hzに設定してください。
- それぞれのスピーカーの性能によりますが、小型スピーカーを使用している場合、クロスオーバー周波数は200 Hzに設定することをお勧めします。

システムセットアップで使用するボタン

1 [5. Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [Speaker Setting]を選んで決定する。

スピーカーシステムの設定になります。

3 それぞれのスピーカーについて、それらのサイズや再生能力に合わせて設定する。

スピーカーごとに以下を選べます。各項目の意味と設定方法については、次ページの説明をご覧ください。

Front （フロント）	[LARGE] [SMALL]
Center （センター）	[LARGE] [SMALL] [NO]
Surr （サラウンド）	[LARGE] [SMALL] [NO]
SB （サラウンドバック）	[LARGE × 2] [LARGE × 1] [SMALL × 2] [SMALL × 1] [NO]
SW （サブウーファー）	[YES] [PLUS] [NO]
X. OVER （クロスオーバー周波数）	[50Hz] [80Hz] [100Hz] [150Hz] [200Hz]

4 戻るボタンを押す。

[Speaker Setting]を終了します。

スピーカーシステム設定の目安

スピーカーシステム組み合わせ可能一覧

Front（フロント）	**[SMALL]**		[LARGE]		
Center（センター）	**[SMALL]** [NO]		[LARGE] [SMALL] [NO]		
Surr（サラウンド）	**[SMALL]**	[NO]	[LARGE]	[SMALL]	[NO]
SB（サラウンドバック）	**[SMALL ×2**/ ×1] [NO]	[NO]	[LARGE ×2/ ×1] [SMALL ×2/ ×1] [NO]	[SMALL ×2/ ×1] [NO]	[NO]
SW（サブウーファー）	**[YES]**		[YES] [NO] [PLUS]		

太字：工場出荷時の設定

[SMALL]　：低域再生能力が十分ではない小型スピーカー
（低音域は他の [LARGE] スピーカーやサブウーファーから出力）

[LARGE]　：低域再生能力のあるフルレンジ・スピーカー

[× 2/ × 1] ：サラウンドバックスピーカーの接続本数(2 本または 1 本)

[YES]　：サブウーファーを接続している場合

[PLUS]　：フロント / センターの低域成分をサブウーファーからも同時に出力させる、低域の再生量がもっとも多いモード
常に (2ch 再生時でも) サブウーファーから低域が出力されるため、量感のある重低音をお好みの方におすすめの設定 (詳しくは下図参照)

[NO]　：接続していない場合(該当 ch の成分は他のスピーカーより出力)

サブウーファーの [PLUS] はオートセットアップでは設定されません。お好みに応じて設定を変更してください。

サブウーファーの再生する音域成分

フロント、センタースピーカーの設定によってサブウーファーの再生する音域成分は、以下のようになります。

サブウーファーを[PLUS]に設定した場合、サブウーファーの低域成分とフロントの低域成分の打ち消し合いが発生し、十分な低音の効果が発揮されないことがあります。このような場合は、Auto MCACCでスピーカーの距離の設定（Speaker Distance）を行い（→12ページ）、PHASE CONTROLモードを「ON」にしてください（→43ページ）。

テストトーンを聞いて出力レベルを調整する（Channel Level）

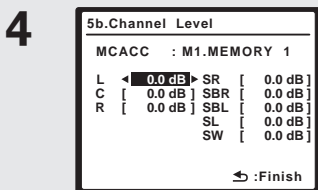
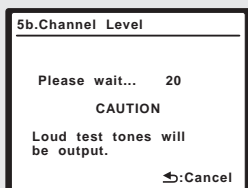
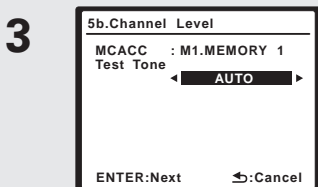
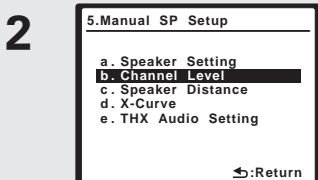
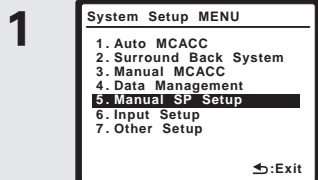
リスニングポジション（視聴位置）での各チャンネルの音量レベルが一定にそろうように調整します。実際に出力されるテストトーンを耳で確かめながら、手動で各スピーカーの出力レベルを調整します。MCACC MEMORY がOFFの状態でChannel Levelを選択すると、MCACC MEMORYの選択画面になるので、手動調整したいMCACC MEMORYを選んでください。

1

2

3

4

で各チャンネルレベルの調整を行うこともできます。CHレベルボタンを押すたびにチャンネルが切り換わります。（この場合OSD表示はされません）

システムセットアップで使用するボタン

1 [5. Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [Channel Level]を選んで決定する。

スピーカー出力レベルの設定になります。

3 設定方法を選んで決定する。

[MANUAL]：テストトーンを出力するスピーカーを手動で切り換えて調整します。
[AUTO]：テストトーンを出力するスピーカーが自動で切り換わります。

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0.0 dBになり、テストトーンが再生されます。

4 それぞれのチャンネルレベルを調整する。

−10.0 dBから＋10.0 dBの範囲内で、0.5 dB間隔で調整することができます。

サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため、実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

音圧計をお持ちの場合は、音圧レベルをCウェイト/スローモードで75 dB SPLに調整してください。

5 戻るボタンを押す。

[Channel Level]を終了します。

ホームシアター入門 各部の名称 接続 再生 応用操作 設定 リモコン エキスパート 参考／技術資料 困ったとき

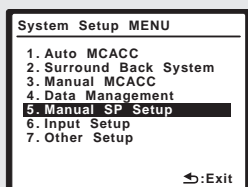
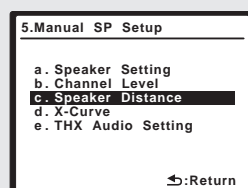
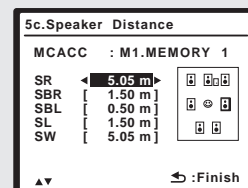
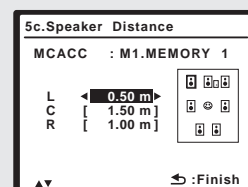
スピーカーまでの距離を調整する （Speaker Distance）

リスニングポジション（視聴位置）からスピーカーまでの距離を設定することにより、各チャンネルの遅延時間が自動的に算出され、リスニングポジションで適切なサラウンド効果を得ることができます。手動で設定する場合は、それぞれのスピーカーから視聴位置までの距離を測り、ここで指定してください。
MCACC MEMORYがOFFの状態でSpeaker Distanceを選択すると、MCACC MEMORYの選択画面になるので、手動調整したいMCACC MEMORYを選んでください。

1

2

5.Manual SP Setup
a. Speaker Setting
b. Channel Level
c. Speaker Distance
d. X-Curve
e. THX Audio Setting
:Return

3

システムセットアップで使用するボタン

1 [5. Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [Speaker Distance]を選んで決定する。

スピーカーまでの距離の設定になります。

3 設定するスピーカーを選んでスピーカーまでの距離を設定する。

0.01 mから9.00 mの範囲内で、0.01 m間隔で設定できます。

> サラウンドバックスピーカーを2本接続した場合は、それらの設置（「SBR」と「SBL」）および設定をリスニングポジションから等距離にしますと、THXモードの効果が最大限に発揮されます。

4 戻るボタンを押す。

[Speaker Distance]を終了します。

> より正確な距離の調整は、「スピーカーまでの距離の微調整（Fine SP Distance）」（→64ページ）をご覧ください。音像や定位感がさらに向上します。

広い部屋での高音域を抑制する（X-Curve）

広い視聴環境では、聴感上高域がきつく聞こえてしまう傾向があります。X-Curve（Xカーブ)は高域(2 kHz以上）の周波数を減衰させるカーブで、減衰の傾きは−0.5dB/oct〜−3.0dB/oct（0.5 dBステップ)の6種類から選択可能です。以下の表を目安に、部屋の広さや聴感によって、自由に調節してください。
この補正は｢EQ Adjust｣（→66ページ)の補正値には影響しません。

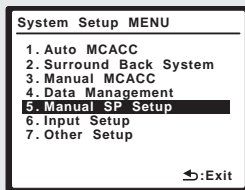
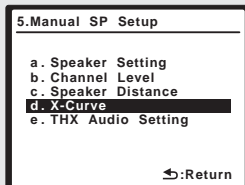
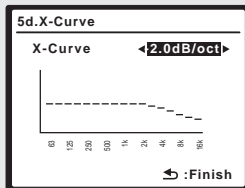
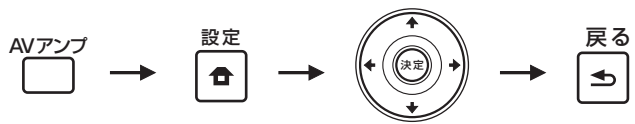
部屋の広さによる減衰カーブの目安

部屋の広さ	〜36 m²	〜48 m²	〜60 m²	〜72 m²	〜300 m²	〜1000 m²
減衰カーブ	−0.5dB/oct	−1.0dB/oct	−1.5dB/oct	−2.0dB/oct	−2.5dB/oct	−3.0dB/oct

1

System Setup MENU
1. Auto MCACC
2. Surround Back System
3. Manual MCACC
4. Data Management
5. Manual SP Setup
6. Input Setup
7. Other Setup
:Exit

2

3

システムセットアップで使用するボタン

1 [5. Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [X-Curve]を選んで決定する。

聴感上の高域補正になります。

3 ←→ボタンで高域減衰カーブを調整する。

−0.5dBから−3.0dB/octを0.5 dBステップの6段階で調整することができます。
[OFF]を選択するとX-Curveはフラットになり聴感上の高域は補正されません。

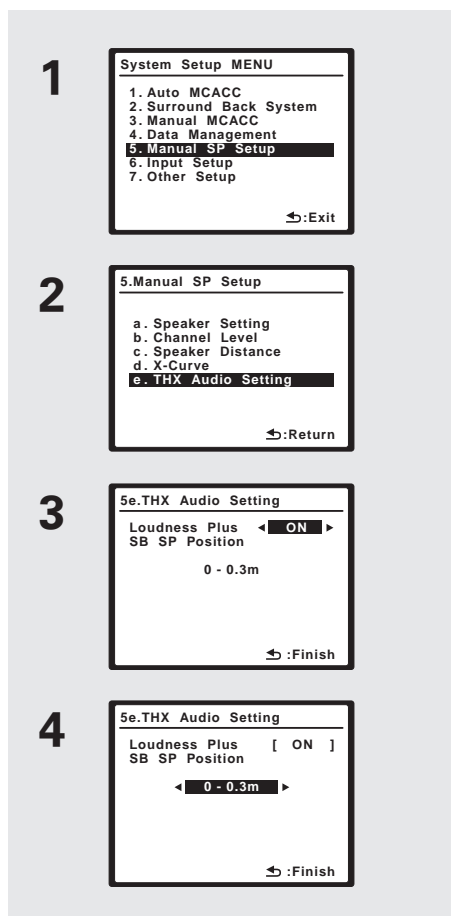
4 戻るボタンを押す。

[X-Curve]を終了します。

THXモードでは、Xカーブと同じような、高域を補正するRe-Equalizationという機能が働くため、Xカーブの設定は無効になります。

サラウンドバックスピーカー間の距離を設定する(THX Audio Setting)

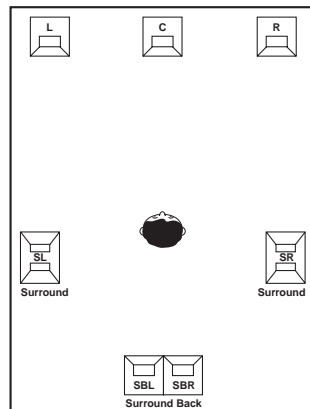
Loudness Plus：
ONにすることで、音量を下げた状態でもサラウンド感を損なうことなく再生します。詳しくは「THX」（→106ページ）をご覧ください。

SB SP Position：
THX Ultra2規格で新規に開発されたASA（Advanced Speaker Array）技術を用いた、THX SELECT2 CinemaとTHX SELECT2 Music、THX SELECT2 Gamesに最適な効果をもたらすための設定です。サラウンドバックスピーカー間の距離（0 m〜0.3 m、0.3 m〜1.2 m、1.2 m以上の3段階）に応じて処理を変化させます。THXの推奨するスピーカー配置は下図のとおりです。
「Speaker Setting」（→75ページ）でサラウンドバックスピーカーを[NO]または[×1]で設定したときは、この項目は選択できません。また、「Surround Back System」（→62ページ）で「Speaker B」または「Front Bi-Amp」、「ZONE 2」を選択したときも、この項目は選択できません。

1 [5. Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [THX Audio Setting]を選んで決定する。
サラウンドバックスピーカー間の距離の設定になります。

3 「Loudness Plus」の[ON]または[OFF]を選択する。

4 サラウンドバックスピーカー間の距離を選ぶ。
[0−0.3m]、[>0.3−1.2m]、[1.2m<]のいずれかを選びます。

5 戻るボタンを押す。
[THX Audio Setting]を終了します。

リアパネル端子に入力した音声/映像信号を設定する ～Input Setup～

各入力ファンクションごとに、割り当てる音声信号と映像信号の入力端子を変更することができます。以下の接続を行ったときは必ずここで設定してください。工場出荷時の設定は以下の表のとおりです。○は工場出荷時は設定されていませんが、割り当てることができる入力端子です。×は割り当てることができません。

- **リアパネルのデジタル音声入力端子に記載された工場出荷時の設定と異なる接続をしたとき。**
  →デジタル音声入力の設定(Digital In)
- **HDMI1、2端子に接続したHDMI対応機器を、HDMI1、2以外の入力で再生したいとき。**
  →HDMI入力の設定(HDMI Input)
  「HDMI Control」(→95ページ)を「ON」にしているときは、HDMI端子をHDMI以外の入力に割り当てることはできません。
- **コンポーネントビデオ映像入力端子、またはD4ビデオ映像入力端子に映像機器を接続したとき。**
  →コンポーネント/D4ビデオ映像入力の設定(Comp/D In)

入力ファンクション	入力端子		
	Digital	HDMI	Comp/D
DVD	COAX 1	○*[1]	○
BD	×	(BD)	×
TV SAT	OPT 1	○*[1]	○
DVR1	OPT 2	○*[1]	○
DVR2	OPT 3	○*[1]	○
VIDEO	固定	○*[1]	×
HDMI 1	×	HDMI-1	×
HDMI 2	×	HDMI-2	×
iPod USB	×	×	×
CD	COAX 2	×	×
CD-R	○	×	×

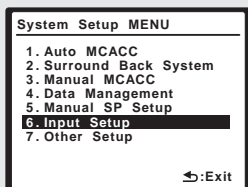
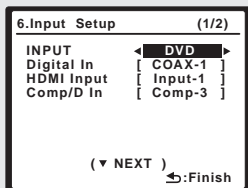
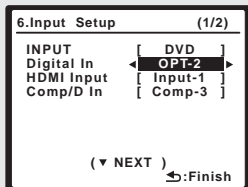
*[1] HDMI Controlの設定がONのときは設定できません。(→95ページ)

```
System  Setup  MENU
 1. Auto  MCACC
 2. Surround  Back  System
 3. Manual  MCACC
 4. Data  Management
 5. Manual  SP  Setup
 6. Input  Setup
 7. Other  Setup
                    :Exit
```

```
6.Input  Setup            (1/2)
 INPUT           ◀  DVD     ▶
 Digital In      [  COAX-1  ]
 HDMI Input      [  Input-1 ]
 Comp/D In       [  Comp-3  ]

         ( ▼ NEXT )
                    :Finish
```

```
6.Input  Setup            (1/2)
 INPUT           [   DVD    ]
 Digital In      ◀  OPT-2   ▶
 HDMI Input      [  Input-1 ]
 Comp/D In       [  Comp-3  ]

         ( ▼ NEXT )
                    :Finish
```

- 別の入力ファンクションで、同じ入力端子を選択することはできません。同じ入力端子を選んだときは、先に設定されていた入力ファンクションの設定がOFFに切り換わります。
- コンポーネント端子の使用については、「映像機器の接続について」(→26ページ)をご覧ください。
- 同じ入力ファンクションで複数の機器を選択することはできません。

システムセットアップで使用するボタン

1 [6. Input Setup]を選んで決定する。

2 変更したい入力ファンクションを選ぶ。

3 変更したい設定を選んで、割り当てたい入力端子を設定する。

詳しくは、上記の説明をご覧ください。
たとえば、光デジタル端子(IN2)を使ってDVDプレーヤーを接続したときは、「Input」で「DVD」を選び「Digital In」の[COAX-1]を[OPT-2]に変更します。また、D4 VIDEO IN1に入力した映像信号を再生したいときは、「Comp/D In」の設定を[D4 In-1]に設定します。
フラットテレビの映像入力と本機の音声入力を合わせたいときは、99ページの「フラットテレビの入力連動設定～PDP In (SR+)～」をご覧ください。

4 戻るボタンを押す。

[Input Setup]を終了します。
システムセットアップを終了するときは、設定 を押します。

ディスプレイに表示される入力名を変更する

ディスプレイに表示される入力名を変更することができます。DVD入力を選択すると、工場出荷時の設定では「DVD」と表示されますが、この表示を自由に変更することができます。たとえば、接続した機器の名称（DVR-DT90）などに変更すれば、どこの入力ファンクションにどんな機器が接続されているのかを簡単に確認することができます。

1 [6. Input Setup]を選んで決定する。

2 名前を変更したいファンクションを選ぶ。

3 (▼ Next)に従って次のページを表示させる。

⬇ボタンを押して(2/2)ページを表示させます。

4 「Input Name」で[Rename]を選んで決定する。

工場出荷時に戻したいときは[Default]を選んで決定します。

5 ⬅ ➡ボタンでカーソルを動かして、⬆⬇ボタンで入力する文字を選ぶ。

入力できる文字は以下のとおりです。

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
0123456789
!Ó#$%&Õ()*+,Ð./:;<=>?@[\ ]ö_{|}~ (スペース)

⬆⬇ **ボタン**を押し続けると文字がスクロールします。

6 手順5を繰り返して入力ファンクション名を入力する。

7 決定ボタンを押して入力ファンクション名を決定する。

他にも名前を変更したい入力ファンクションがある場合は、手順２～６を繰り返します。

8 戻るボタンを押す。

[Input Setup]を終了します。

システムセットアップを終了するときは、設定 を押します。

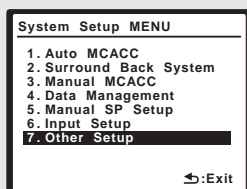
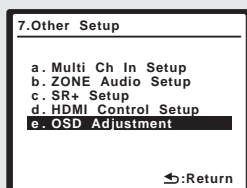
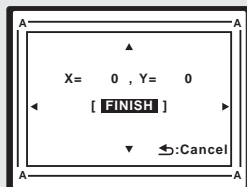
その他の機器の設定をする　～Other Setup～

システムセットアップ画面の位置を調整する

OSD(オンスクリーンディスプレイ)を、お持ちのテレビの中央で表示できるように調整します。OSDに表示されるシステムセットアップなどの文字が切れないようにする機能です。

1

2

3

システムセットアップで使用するボタン

1 [7. Other Setup]を選んで決定する。

2 [OSD Adjustment]を選んで決定する。

OSD画面の調整になります。

3 ⬆⬇⬅➡ボタンでカーソルを押して画面内の枠を中央に調整する。

4 決定ボタンを押す。

5 戻るボタンを押す。

[OSD Adjustment]を終了します。

マルチチャンネル入力を設定する（Multi Ch In Setup）

マルチチャンネル入力でのサブウーファーレベルを上げることができます。

1 [7. Other Setup]を選んで決定する。

2 [Multi Ch In Setup]を選んで決定する。

マルチチャンネル入力の設定になります。

3 「SW Input Gain」を「＋10dB」にする。

サブウーファーの出力レベルが10 dB上がります。収録されているままのレベルで出力したいときは「0dB」にします。

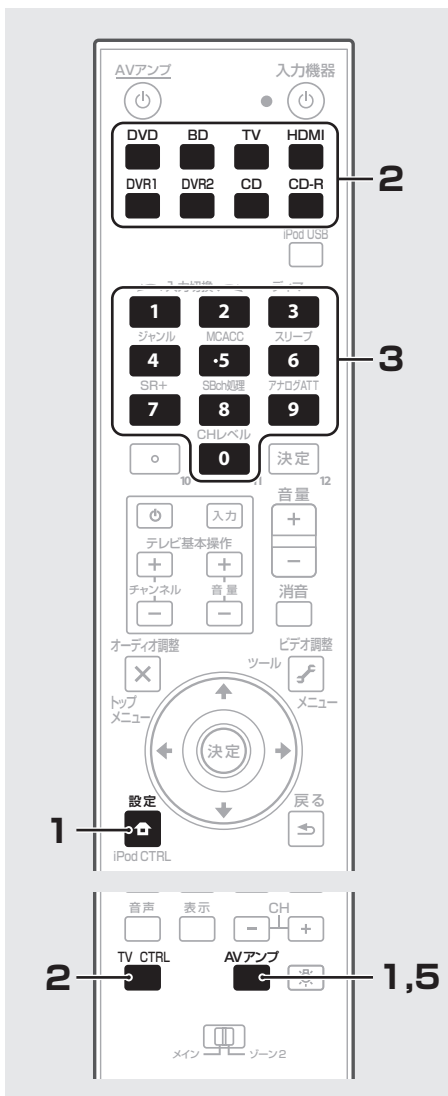
4 戻るボタンを押す。

[Multi Ch In Setup]を終了します。

他機器を操作するためのリモコン設定をする

付属のリモコンを使って、本機以外のパイオニア製品や他社の機器(ビデオデッキ、テレビ、DVD、CDプレーヤーなど)を操作することができます。お手持ちの機器のプリセットコードがリモコンに登録されている場合は、該当するコードを呼び出すだけで操作できるようになります。

他機器のリモコン信号を本機のリモコンに呼び出す（プリセットコード設定）

本機付属のリモコンには、複数のAV機器(他社製品を含む)のプリセットコードが登録されています。86ページの「メーカーコードリスト」を参照して、登録する機器のプリセットコードを呼び出します。
各ボタンの役割は「リモコンで他機器を操作する」（→87ページ)をご覧ください。

1 AVアンプボタンを押しながら設定ボタンを押す。

リモコンのLEDランプが点滅します。
設定を中止するにはAVアンプボタンを押します。

2 操作したい機器のマルチコントロールボタンを押す。

テレビ基本操作ボタンにお手持ちのテレビのプリセットコードを登録する場合は、ここでTV CTRLボタンを押します。
リモコンのLEDランプが点灯に変わります。

3 数字ボタンでその機器に該当するプリセットコード(86ページ)を入力する。

- 操作したい機器にリモコンを向けて⏻入力機器ボタンを押します。
  正しく設定されている場合は操作したい機器の電源がONまたはOFFに切り換わります。
- メーカーコードが正しく入力されても間違って入力されても手順1へ戻ります。
- 機器の電源がON/OFFしない場合で、その機器に別のメーカーコードがある場合は、手順2から別のコードでやり直してみてください。

4 他の機器もプリセットコードを設定したいときは手順2 ～ 3を繰り返す。

5 AVアンプボタンを押して設定を終了する。

- iPod USBボタンにはプリセットコードを登録することができません。
- プリセットのコード番号は、数字が大きいほど新しい機器に対応しています。
- 正しく設定できているようでも、一部のボタンのみ違うコード番号も複数あります。実際に操作できるかを確認してください。

パイオニア製の他機器コードに関する諸注意

- HDD内蔵DVDレコーダーの4コードは、PIONEER DVR 487、488、489、493に対応しています。
- 2005年夏以前に発売されたフラットテレビをお持ちの方は、667、638（地上波対応）や639（BSデジタル対応）など、必要に応じてお試しください。一部海外向けのコードも内蔵されているため、TVの10ch/11ch/12chが誤動作するものもあります。
- TVのコード番号670はHDD内蔵フラットテレビの録画再生機能に対応しています。誤動作防止のため、通常TV系コードを使用する場合は、コード番号669以下のコード番号を選んでください。

メーカーコードリスト

以下のメーカーコードを本機のリモコンにプリセットすることで、その機器を本機のリモコンで操作することができるようになります。
メーカーコードにあるメーカーのプリセットコードをすべて呼び出しても、メーカーや機器によっては操作できなかったり異なる働きをすることがあります。

DVD

メーカー	/コード
PIONEER	000,003,009,018
PIONEER(BDP)	020,021,023
AKAI	007
DENON	003,010
HITACHI	012
MICROSOFT (video game)	017
PANASONIC	003
PHILIPS	013
SAMSUNG	005
SHARP	006
SONY	002
SONY (video game)	016,019
TOSHIBA	001,022
VICTOR	004

LD

メーカー	/コード
PIONEER	100,111
KENWOOD	103
MITSUBISHI	100
PANASONIC	105,106
PHILIPS	104
SONY	101

CATV

メーカー	/コード
PIONEER	700,718
DXアンテナ	732,733
FUJITSU	722,723,724
HITACHI	721
NEC	720
PANASONIC	725,726,728
SA	706,731
TOSHIBA	719
愛知電子	734
住友電工	730
マスプロ	729

CD

メーカー	/コード
PIONEER	300,348
DENON	309
KENWOOD	310,311,321
MARANTZ	312,323,324
ONKYO	307,308,320
PANASONIC	304,326
PHILIPS	312,322
SANYO	313
SONY	301,316,317,318
TEAC	305,306,324,325,327
VICTOR	303
YAMAHA	314,315,328

CD-R

メーカー	/コード
PIONEER	345
PHILIPS	346
YAMAHA	347

TAPE

メーカー	/コード
PIONEER	800,814
DENON	810
KENWOOD	804,807
ONKYO	808,809
PANASONIC	803
SONY	801,806
TEAC	805
VICTOR	802
YAMAHA	811,812

MD

メーカー	/コード
PIONEER	900,902,907,908
DENON	906
KENWOOD	903
ONKYO	905
SHARP	902
SONY	901
TEAC	904

VCR

メーカー	/コード
PIONEER	400,437
FUNAI	441
HITACHI	465,472
MITSUBISHI	420,421,422,423,424,466,467
ORION	424
PANASONIC	432,433,462,463,473
SANYO	425,468
SHARP	418,419,469
SONY	460,461,475,476,477,478
TOSHIBA	464,474
VICTOR	407,428,429,430,431

DVR

メーカー	/コード
PIONEER	480,481,482,483,484,486,487,488,489,493
KENWOOD	480
MITSUBISHI	480
PANASONIC	491,492
SHARP	496
SONY	490,494
TOSHIBA	485

TV

メーカー	/コード
PIONEER	600,631,632,633,634,635,636,637,638,639,667,668,669,670,678,679,688
AIWA	660
EPSON	681
FUJITSU	629,666
FUNAI	658
HITACHI	606,624,625,664
MITSUBISHI	609,682
NEC	659
PANASONIC	608,622,671
PHILIPS	607
SAMSUNG	673,674,675
SANYO	614,621,685
SHARP	602,619,627,661
SONY	604,684
TOSHIBA	605,626,663
UNIDEN	687
VICTOR	613,665,683
YAMAHA	686

SAT

メーカー	/コード
PIONEER	231,232,233,234
AIWA	562,563,564
HITACHI	556
MASPRO	559,560,561
PANASONIC	226,558
SHARP	554
SONY	557
TOSHIBA	228,555
VICTOR	227,551,552,553

リモコンで他機器を操作する

- 以下のリモコン操作を行うには、あらかじめ操作したい機器のリモコンコードを登録しておく必要があります。詳しくは「他機器のリモコン信号を本機のリモコンに呼び出す(プリセットコード設定)」(➞85ページ)をご覧ください。
- 実際に操作を始める前に、操作したい機器の他機器操作ボタンを押して、リモコンをその機器の操作モードにしてください。各機器の詳しい機能については、それぞれの取扱説明書をお読みください。
- 機種によっては操作できないボタンもあります。

機器 / ボタン	DVDプレーヤー BDプレーヤー LDプレーヤー	DVDレコーダー	ビデオデッキ	CDプレーヤー CDVプレーヤー MDレコーダー カセットデッキ	テレビ CATV BS/CSデジタルチューナー 地上デジタルチューナー	チューナー
入力機器⏻	電源の入／切(スタンバイ)					
⏮	前チャプター (トラック)頭出し				地上アナログ	
⏭	次チャプター (トラック)頭出し				CSデジタル	
⏸	一時停止				地上デジタル	
▶	再生				入力切換	
⏩	早送り				番組表の表示	
⏪	早戻し					
■	停止				BSデジタル	
数字ボタン	チャプター／チャンネルの選択		チャプター(トラック)の選択		チャンネルの選択	周波数/ ステーションの選択
●(10)	[DVD/BD プレーヤー] CLEAR	[LDプレーヤー] 10/0			10	放送局の ダイレクト選局
決定 (12)	[BDプレーヤー] 決定 [LDプレーヤー] A/B面の切り換え	12	決定ボタンと して使用	[CDチェンジャー] ディスクの選択	12	クラス(A, B, C) の選択
トップメニュー	トップメニューの 表示	トップメニューの 表示/セットアップ 画面(DISC NAVI)の 表示			元の画面	AM/FM切換
メニュー	ディスクのメニュー の表示 [BDプレーヤー] ツールメニューの表示	ディスクメニューの 表示				
⬇⬆⬅➡ + 決定	各メニュー画面の操作					⬇⬆：周波数選択 ⬅➡： ステーション選択
設定	[DVD/BDプレーヤー] [DVDレコーダー] セットアップ画面の表示				ホームメニューの表示	
CH +/−		チャンネルの選択			チャンネルの選択	
音声	音声(言語)の選択				音声切換、衛星切換	
表示	表示の切換				表示の切換	
戻る	[DVD/BDプレーヤー]、[DVDレコーダー] 戻る				戻るまたは EXITの選択	
AUTO/ DIRECT		[HDD内蔵 DVDプレーヤー] HDD操作の選択			青ボタンとして使用	
STEREO/ A.L.C.		[HDD内蔵 DVDプレーヤー] DVD操作の選択			赤ボタンとして使用	
STANDARD		[ビデオ一体型HDD/ DVDレコーダー] VCR操作の選択			緑ボタンとして使用	
ADV SURR	[BDプレーヤー] ディスクメニューの表示				黄ボタンとして使用	

* DVDプレーヤーによっては、10以上を選ぶときに＋10方式ではなくENTER方式で番号を決める機種がありますが、その機種も本機リモコンでは●(10) ボタンで操作することができます。

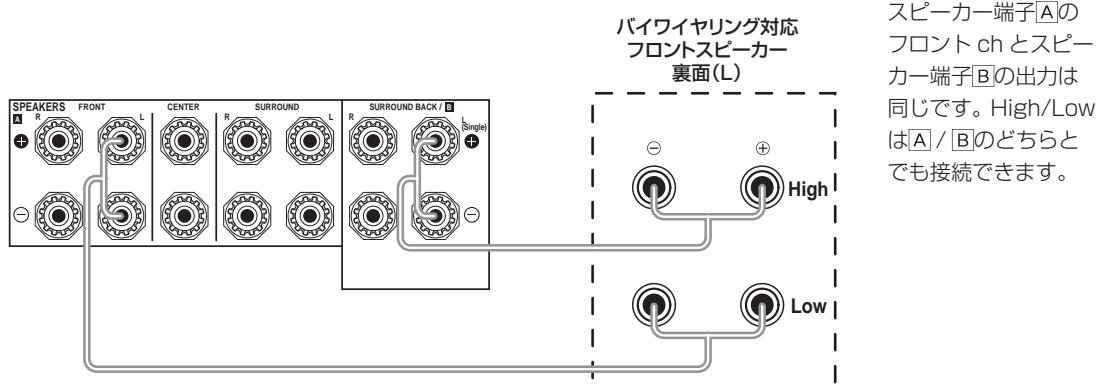
スピーカーの応用接続

SURROUND BACK端子は、サラウンドバックスピーカーを接続するだけでなく、フロントスピーカーの高音質化や、別エリアでのステレオ再生に使用できます。（ただし、メインシステムは最大5.1chまでとなります。）

フロントスピーカーを高品位接続する　～バイアンプ接続～

フロントch用スピーカーがバイワイヤリング対応であれば、さらに高品位なBi-Amp再生が可能です。

・接続

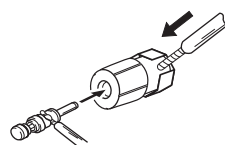
スピーカー端子Aのフロント ch とスピーカー端子Bの出力は同じです。High/LowはA / Bのどちらとでも接続できます。

・サラウンドバックシステムの設定(→62ページ)
「Front Bi-Amp」を選択してください。
サラウンドバック ch は自動的に「NO(無し)」に固定されます。

・スピーカーシステムの切り換え(→56ページ)
A+B（SP►AB)が通常再生状態となります。

ネットワークが着脱できるスピーカーの場合、ネットワークが外れた状態では効果が得られませんのでご注意ください。

フロントスピーカーの Bi-Amp 接続をするときは、アンプへの悪影響を防ぐため、スピーカーに付属されている High-Low のショート金具は必ず外してください。詳しくはスピーカーの取扱説明書もご覧ください。

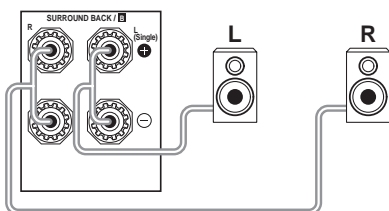
Bi-wire(バイワイヤ接続の場合)

「Normal」または「Speaker　B」でシステムを組む場合は、Bi-Ampではなく Bi-wire接続が可能です。スピーカー端子Aに、バイワイヤリング対応スピーカーのHighとLowの2本を並列に接続してください。

1 本はバナナプラグを用いると便利です

この方法で異なる 2 つのスピーカーを接続しないでください。

別の部屋でのステレオ再生用スピーカーを接続する　～ Speaker B 接続～

寝室やキッチンなど、メインのリスニングルームとは別の場所でステレオ再生が可能です。

・接続

・サラウンドバックシステムの設定（→ 62 ページ）
「Speaker B」を選択してください。
サラウンドバック ch は自動的に「NO(無し)」に固定されます。

・スピーカーシステムの切り換え（→ 56 ページ）
B または A ＋ B を選択してください。

別の部屋で本機の音や映像を再生する ～マルチゾーン機能～

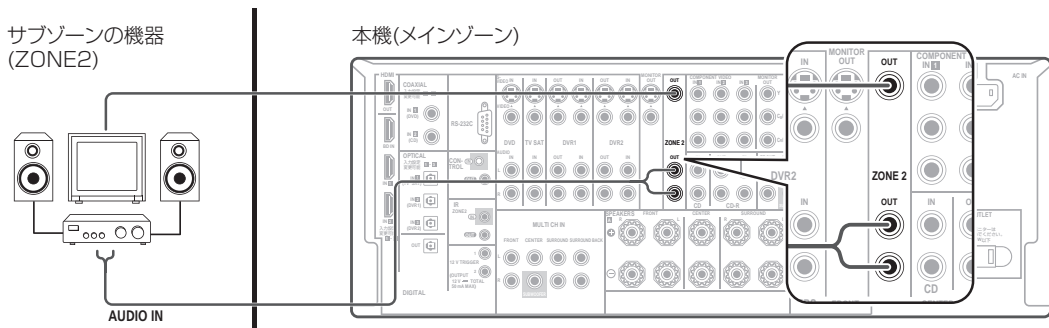
本機を操作して、本機のある部屋(メインゾーン)とは別の部屋(サブゾーン)で本機につないだ機器の再生を楽しめます(マルチゾーン機能)。メインゾーンとサブゾーンで同時に同じソースを再生することはもちろん、別々のソースを再生することもできます。

別の部屋	入力できる信号
ZONE2	USBを除いたすべてのアナログ信号を「ZONE 2」OUT端子から出力します。 「Surround Back System」の設定を[ZONE 2]にすることで、スピーカー端子からの音声出力も可能です。また、コンポジットビデオ信号も出力します。

- ZONE2で再生できる音声はステレオ(アナログ)音声で、HDMIで入力された音声は再生できません。MULTI CH IN入力はフロントL、Rの2chのみの再生となります。また、リスニングモードや低音/高音の調整などの各種音声機能は使えません。
- ZONE2の映像出力は、ビデオ(コンポジット)出力のみ対応しています。Sビデオ、コンポーネントは使用できません。
- IRレシーバーがあるときは、IR ZONE 2 IN端子にIRレシーバーを接続してさらにIR OUT端子に機器をつなぐと、その機器もIRレシーバーで操作することができます。

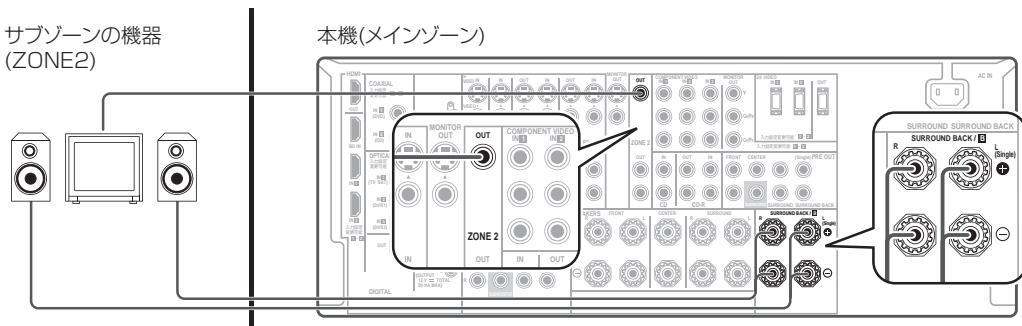
マルチゾーン接続(ZONE2)

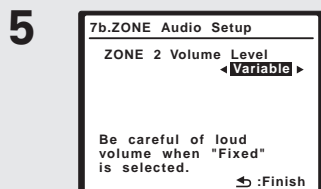
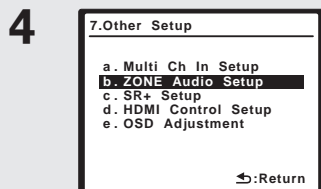
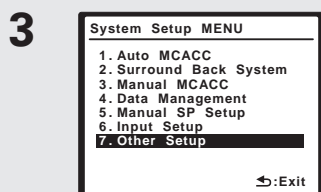
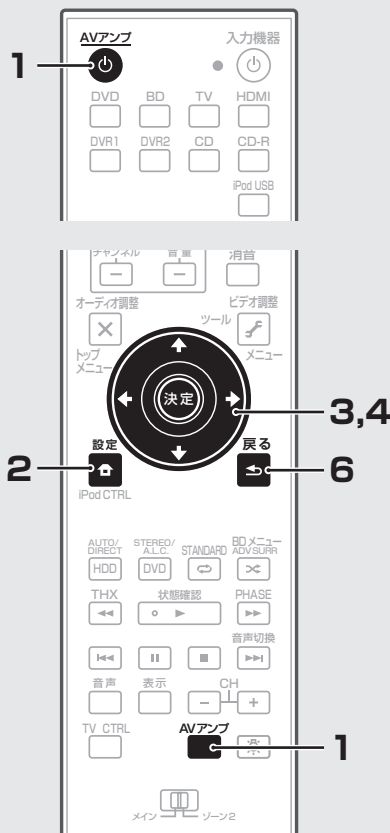
ZONE2 端子を使ったマルチゾーン接続

本機に別のアンプとテレビモニターを図のように接続します。

SURROUND BACK 端子を使用したマルチゾーン接続

本機にテレビモニターとスピーカーを図のように接続します。

・サラウンドバックシステムの設定(→ 62 ページ)
「ZONE 2」を選択してください。
サラウンドバック ch は自動的に「無し」に固定され、最大 5.1ch のシステムになります。

・スピーカーシステムの切り換え(→ 56 ページ)
スピーカーシステムは ON または OFF になります。

マルチゾーンの設定

本機のシステムセットアップで、サブゾーンの音声出力設定(ZONE Audio Setup)を行います。

1 本機の電源を入れて、AVアンプボタンを押す。

リモコンがアンプ操作モードになります。
システムセットアップ画像を表示するためには、テレビの電源を入れて入力を切り換えてください。

2 設定ボタンを押す。

システムセットアップが表示されます。

3 [7. Other Setup]を選んで決定する。

4 [ZONE Audio Setup] を選んで決定する。

5 ZONE 2 Volume Levelについて、適切な項目を選択する。

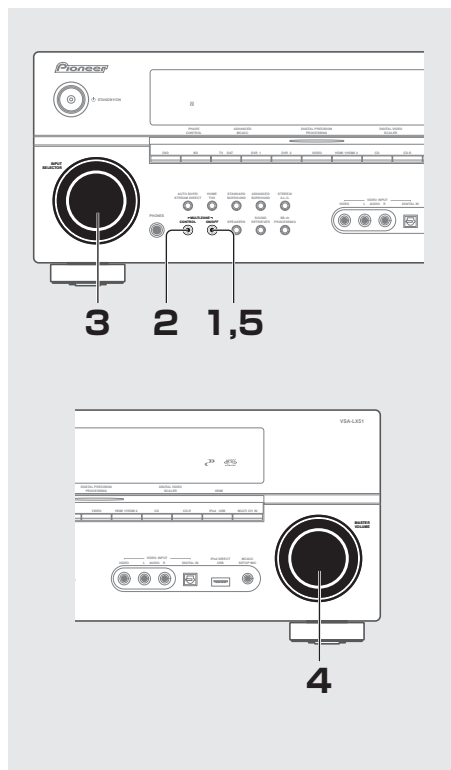
Variable：本機で音量の調整をする場合(サブゾーンのアンプをパワーアンプとして音声出力する場合)に選びます。
Fixed：サブゾーンのアンプを使って音量の調整をする場合に選びます(本機のサブゾーン側の音量は最大になります)。

> **注意** Fixedを選んだ場合、本機の音量は最大で固定されます。大音量での出力を避けるため、必ずサブルームのアンプを使って適切な音量に調整してください。

6 戻るボタンを押す。

マルチゾーンの設定を終了します。
システムセットアップを終了するときは、 を押します。

手順5のVolume Levelの設定で、[Fixed]はサラウンドバックシステムの設定が[ZONE 2]のときは選択することができません。

本機でマルチゾーンの操作をする

1 MULTI-ZONE ON/OFFを押す。

押すたびに以下のように切り換わります。
ZONE 2 ON：マルチゾーン機能をオンにします。
ZONE 2 OFF：マルチゾーン機能をオフにします。
マルチゾーン機能がオンのときは、表示部のMULTI-ZONEインジケーターが点灯します。

2 MULTI-ZONE CONTROLを押す。

押すたびに、メインゾーン操作とサブゾーン操作が切り換わります。

10 秒間操作がないと自動的にマルチゾーンコントロールモードが終了します。

3 INPUT SELECTORで入力ファンクションを切り換える。

たとえば、手順2でZONE2 ONを選び、手順3でDVDを選ぶと、DVD入力の音声と映像をZONE2で楽しむことができます。

4 MASTER VOLUMEダイヤルで音量を調整する。

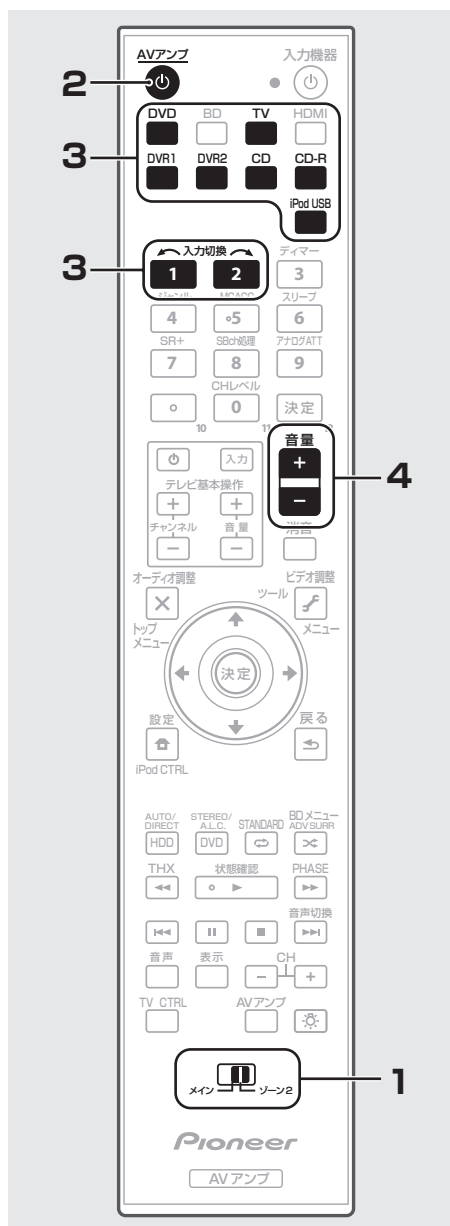
−80 dBから0 dBの範囲で調整できます。
ただし「ZONE 2 Volume Level」が「Fixed」のときは0 dBに固定されます。

5 MULTI-ZONE CONTROLを押す。

マルチゾーンの操作を終了します。

6 選んだ機器の再生をする。

- マルチゾーン機能では、電源の入／切もメインゾーンとサブゾーンで別になります。
- マルチゾーンの設定で [Fixed] が選ばれているとき、本機では音量を調整できません。
- スリープ機能が働くとメインゾーンとサブゾーンの両方の電源がスタンバイになります。
- システムセットアップ中は、マルチゾーン操作はできません。

リモコンでマルチゾーンの操作をする

1 **マルチゾーン切り換えスイッチをゾーン2にする。**

メインゾーン操作モードに戻すときはメインゾーンに切り換えます。

2 **AVアンプ⏻ボタンを押してマルチゾーン機能の電源を入れる。**

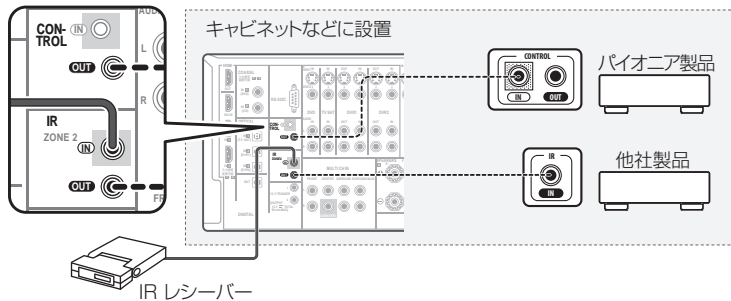
3 **入力ファンクションを切り換える。**

入力切換ボタンで機器を選びます。

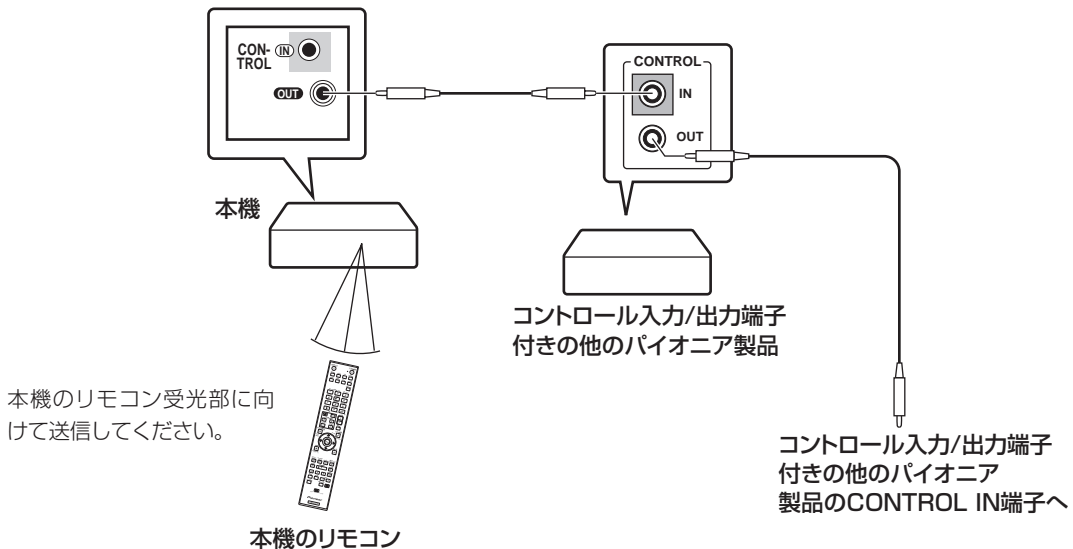
4 **音量+/−ボタンで音量を調整する。**

- 本機のリモコンで操作できるボタンは以下になります。
  AVアンプ ⏻ ： 本機の電源切り換え
  入力切換 ： 入力ファンクションの選択
  音量+/− ： 音量調整（ただし、システムセットアップの「Zone Audio Setup」で[Fixed] が選ばれているときは調整できません。）
- パイオニア製アンプをサブゾーンで使用している場合、本機のリモコン操作で同時にアンプが動作してしまいます。IRレシーバーでマルチゾーン操作をするときは、アンプのリモコン受光部を覆い隠すなどの対策をとってください。

IRレシーバーを使って集中コントロールする

ステレオ機器などを、キャビネット内などのリモコン信号が届かない場所に設置している場合でも、市販のIRレシーバーを使用して、リモコンでシステムの操作ができます。本機や接続した機器(パイオニア製品だけでなく、他社製品も含む)が操作できます。マルチルームのリモコン操作などにも使用できます。

- IR接続は、IR端子を装備している機器を使用してください。
- 接続に必要なケーブルの種類については、IRレシーバーに付属の取扱説明書を参照してください。
- IRレシーバーのリモコン受光部に蛍光灯から強い光が直接照射されている場合は、リモコン操作ができないことがあります。
- 他社製品ではIRという名称が使用されていない場合があります。お使いの機器に付属の取扱説明書で確認してください。
- フロントパネルのリモコン受光部とIRレシーバーのリモコン受光部が同時に受信した場合は、IRレシーバーが優先されます。

他のパイオニア製品をつないで集中コントロールする

コントロール入力/出力端子の付いた複数のパイオニア機器を、本機のリモコン受光部を使って集中コントロールすることができます。リモコン受光部を持たない機器や、受光部が信号を受けられないところに設置した機器もリモコン操作が可能になります。

- 本機のCONTROL IN端子にコントロールコードを接続すると、リモコンを本機に向けて直接操作することはできません(リモコン信号受光部が機能しなくなります)。
- 接続には市販のモノラルミニプラグ付きコード(抵抗なし)をお使いください。
- コントロール端子の接続をする場合は、必ずオーディオコード、映像ケーブルまたはHDMIケーブルの接続もしてください。デジタル接続だけでは、システムコントロールは正しく動作しません。

HDMIコントロール機能でHDMI機器を連動動作する

HDMIコントロール機能に対応したパイオニア製フラットテレビやブルーレイディスクプレーヤーなどを、HDMIケーブルで本機と接続することでこれらの機器との連動動作を実現します。HDMIコントロール機能で連動できる動作について、詳しくはそれぞれの取扱説明書をご覧ください。

WEB、カタログで使用している [KURO LINK] という機能名称は、取扱説明書および製品での表示は [HDMI Control] となっております。

- HDMIコントロール機能に対応していない機器では、ここでの機能を使用することができません。
- パイオニア製ではない機器とは正しく連動動作できないことがあります。

HDMI コントロール機器を接続する

本機にはフラットテレビのほかに、最大3台のHDMI機器を接続して連動動作させせることができます。接続にはHDMIケーブルをご使用ください。一部のHDMIケーブルではHDMIコントロール機能が動作しない場合があります。接続のあとは「HDMIコントロールモードを設定する(HDMI Control Setup)」(→95ページ)を行ってください。

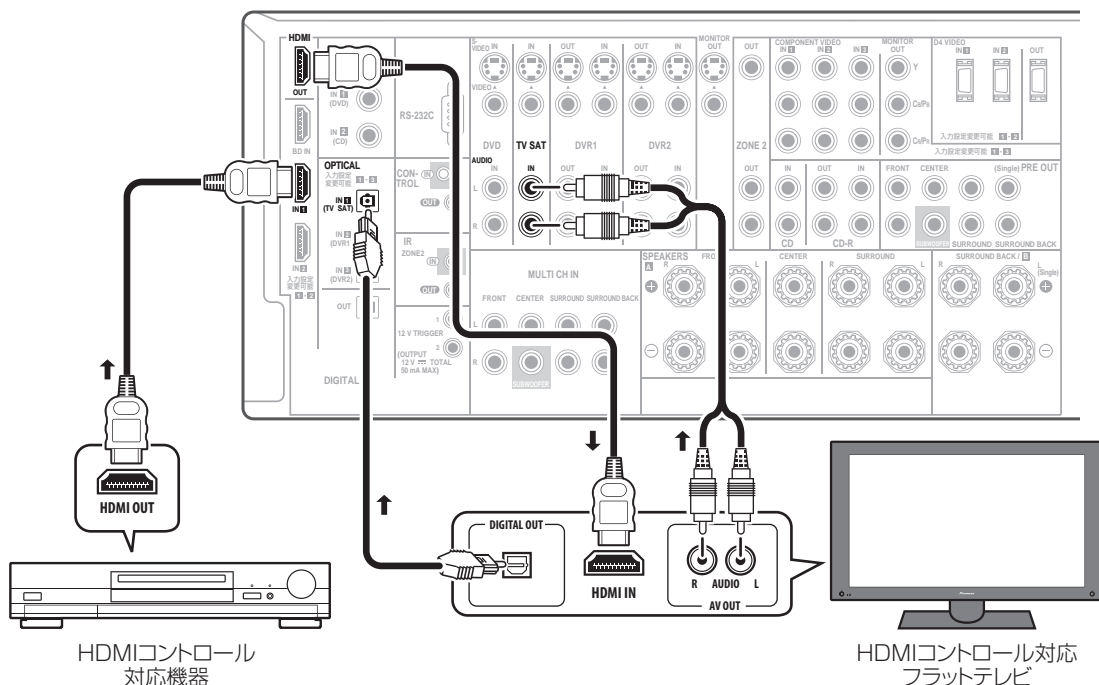
機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

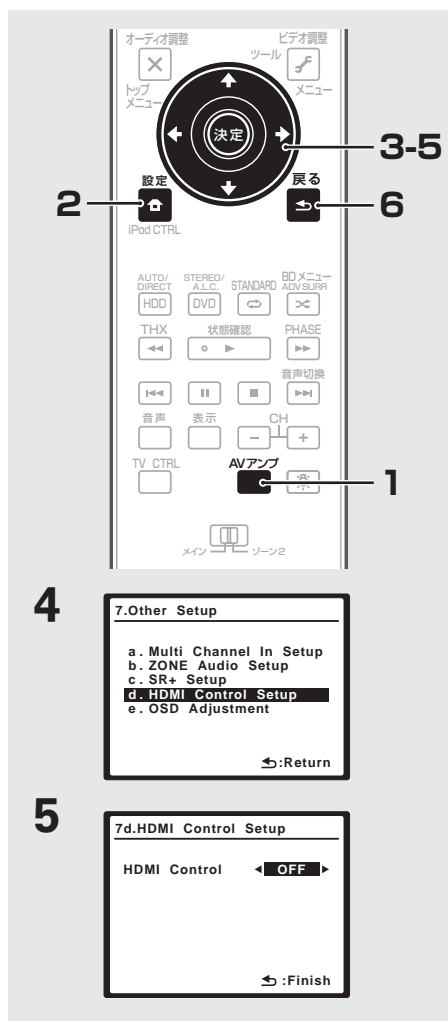
- HDMIコントロール機器の接続終了後、電源コードをコンセントに差し込むと本機の電源が入ります。この際、15秒間のHDMIに関する初期化動作を行います。初期化中はHDMIインジケーターが点滅しますので、点滅が終了してから本機の操作を行ってください。「HDMIコントロールモードを設定する(HDMI Control Setup)」(→95ページ)を「OFF」にすることで、この処理は行われなくなります。
- 本機のHDMIコントロール機能を十分に発揮するために、HDMI機器は本機に接続してください。HDMI機器が本機ではなくフラットテレビに直接接続されると、HDMIコントロール機能が働かないことがあります。

HDMIコントロールについてのご注意

- 本機とフラットテレビは直接接続してください。本機以外のアンプやAVコンバーター(HDMIスイッチ)などに接続してから本機に接続すると、誤動作の原因となります。
- 本機のHDMI入力にはソース機器(ブルーレイディスクプレーヤーなど)を直接接続してください。本機以外のアンプやAVコンバーター(HDMIスイッチ)などを接続すると誤動作の原因となります。

HDMIコントロール対応機器

HDMIコントロール対応フラットテレビ

HDMI コントロールモードを設定する（HDMI Control Setup）

本機のHDMIコントロール機能を有効にするかどうかを設定します。
本機の設定以外にも、本機と接続するHDMIコントロール機能に対応した機器の設定も必要です。詳しくは、それぞれの取扱説明書をご覧ください。

1　リモコンをアンプ操作モードにする。

システムセットアップを表示するためには、テレビの電源を入れて入力を切り換えてください。

2　設定ボタンを押す。

システムセットアップが表示されます。

3　[7. Other Setup] を選んで決定する。

4　[HDMI Control Setup] を選んで決定する。

5　HDMIコントロール機能のON/OFFを選択する。

ON：HDMIコントロール機能が有効になります。本機の電源を切っても、HDMIコントロール機能に対応したソース機器を再生すれば、その映像と音声をHDMI出力からテレビに出力します。
OFF：HDMIコントロール機能は無効になり、連動動作することはできません。本機の電源を切ると、接続したソース機器の映像と音声はHDMI出力されません。

6　戻るボタンを押す。

HDMIコントロールモードの設定を終了します。
システムセットアップを終了するときは、設定 を押します。

- HDMI Controlを ON に設定すると、入力端子の設定のHDMI入力（HDMI Input）は自動的にOFFになります。
- HDMI Controlを ON に設定すると、SR+機能が使用できなくなります。

連動動作を開始する前に動作確認する

接続と設定が終了したら、下記の確認作業を必ず行ってください。

1　すべての機器をスタンバイ状態にする。

2　フラットテレビ以外のすべての機器の電源を入れる。

3　フラットテレビの電源を入れる。

4　フラットテレビの入力をHDMIにする。

5　本機のHDMI入力を切り換える。

6　手順5で選んだHDMI入力に接続した機器を再生する。

フラットテレビに映像が表示されることを確認します。

7　手順5〜6を繰り返し、すべてのHDMI入力を確認する。

アンプ連動モードを使う

フラットテレビのリモコンでアンプ連動モードにすることができます。アンプ連動モードでの動作は以下の説明をご覧ください。これらの機能はフラットテレビのメニュー画面で設定します。詳しくは、HDMIコントロール機能対応のパイオニア製フラットテレビの取扱説明書をご覧ください。
なお、フラットテレビのHDMIコントロール設定がONで、フラットテレビの電源が入っているときに本機の電源を入れると自動的にアンプ連動モードになります。

アンプ連動モードでの連動動作について

アンプ連動モード使用中は、本機と接続したHDMIコントロール対応機器が以下のように連動動作します。

- 本機の音量、消音などを操作したときに、その状態をフラットテレビの画面に表示します。
- HDMIコントロール対応機器の再生操作に連動して本機の入力が自動的に切り換わります。
- HDMIコントロール対応のフラットテレビでチャンネルを切り換えると、本機の入力が連動して切り換わります。
- 本機の入力をHDMI以外に切り換えても連動モードは継続されます。

アンプ連動モードの解除

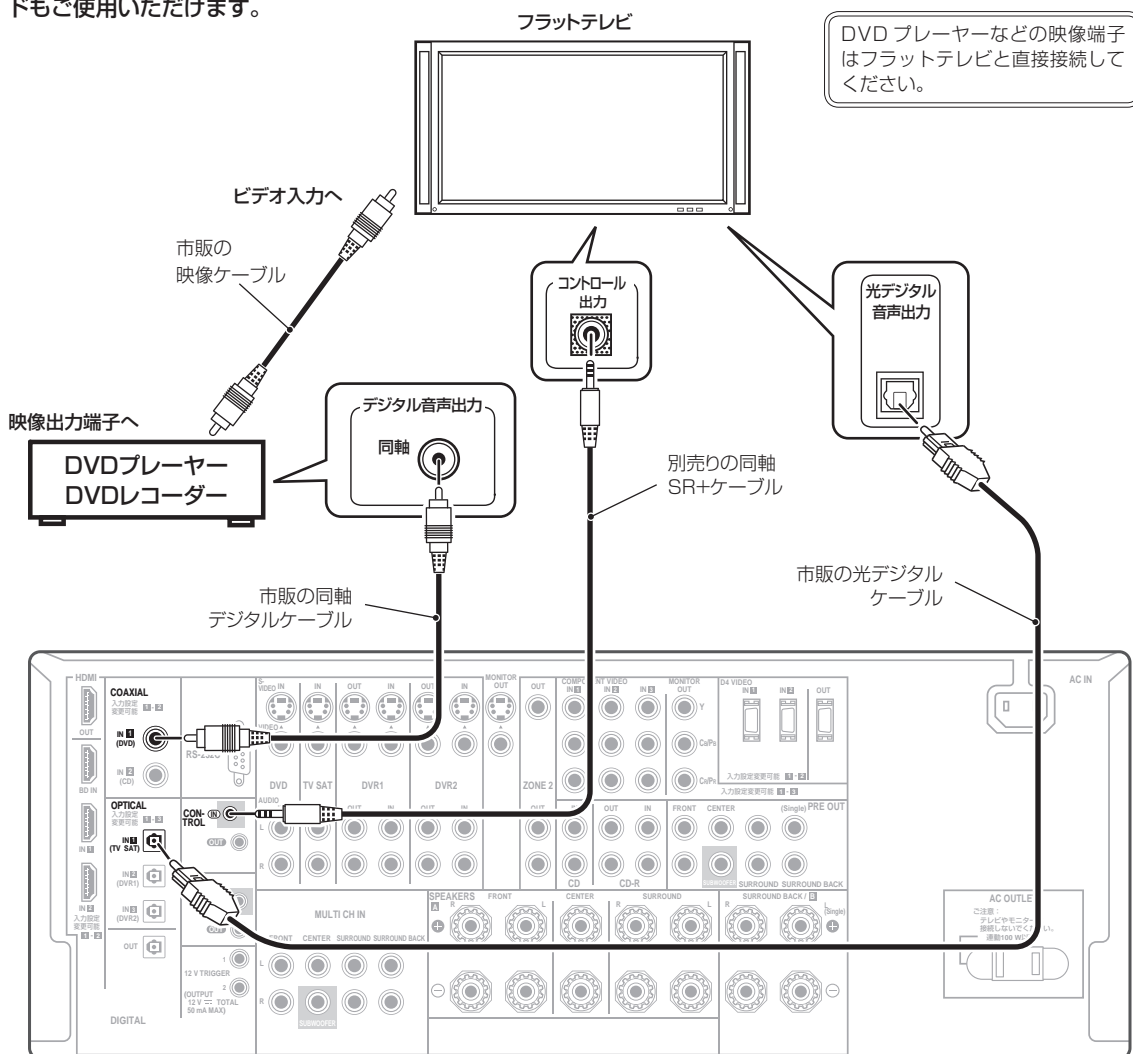
- アンプ連動モードを解除すると、フラットテレビでHDMI入力またはテレビ放送を視聴していた場合、本機の電源が切れます。
- アンプ連動モードのときに、本機の電源を切ることでアンプ連動モードは解除されます。このとき再度アンプ連動モードにするには、フラットテレビのリモコンでアンプ連動を選ぶか、本機の電源を入れます。
- アンプ連動モードのとき、フラットテレビのリモコンでフラットテレビから音を出すように操作すると、アンプ連動モードが解除されます。

パイオニアのフラットテレビと連動操作する

SR+に対応したフラットテレビ(2003年以降に発売されたモデル)を、SR+ケーブルで接続することでシステム動作が可能になります。フラットテレビの画面を見ながら本機のシステムセットアップをしたり、音量やリスニングモードの確認ができます。また、本機とフラットテレビの入力を連動させて切り換えることができます。本機とフラットテレビをシステム動作させるには、下記の接続および設定が必要となります。

フラットテレビとの接続

このシステム動作を実現するためには、専用のSR+ケーブル(パイオニア部品番号:ADE7095)が必要となります。詳しくはパイオニア部品受注センターへご連絡ください(→125ページ)。市販の4極ミニジャック(両端とも)付コードもご使用いただけます。

DVD プレーヤーなどの映像端子はフラットテレビと直接接続してください。

本機にSR+ケーブルを接続すると、本機のリモコン受光部はリモコン信号を受け付けなくなりますので、リモコンはフラットテレビに向けて操作してください。フラットテレビの電源が切れているときは、リモコンで本機の操作ができません。

フラットテレビとの連動モードを設定する（SR+ Setup）

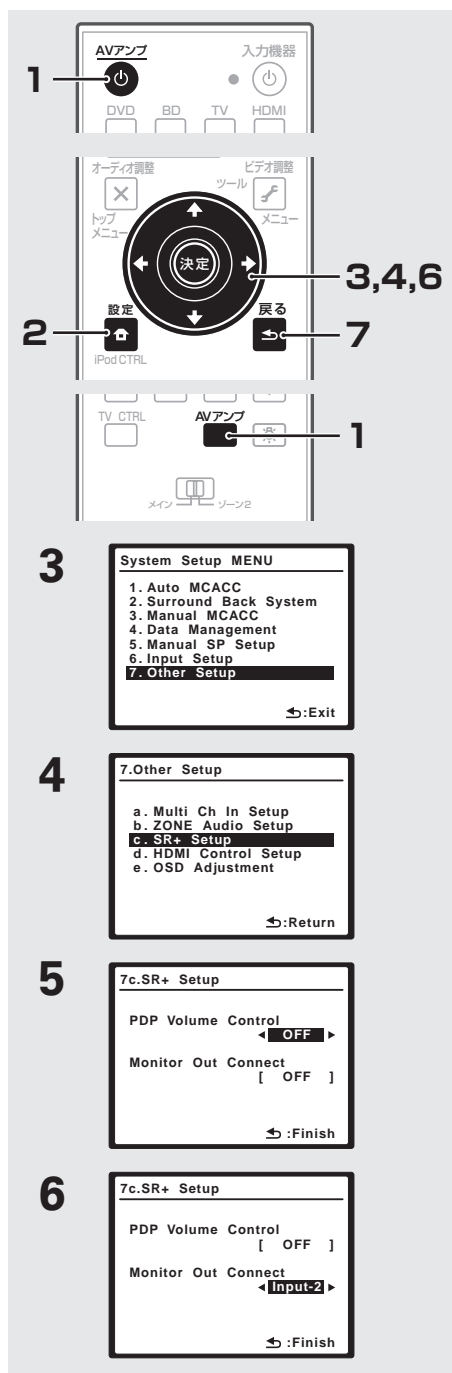
本機とフラットテレビの連動について、以下の2つの設定を行います。

PDP Volume Control：音量連動モードの設定

連動モードを実行したとき(→99ページ)に、フラットテレビの音量を下げるかどうかを設定します。
「ON」に設定すると、連動モードを実行したとき瞬時にフラットテレビの音から本機の音に切り換えることができます。

Monitor Out Connect：システムセットアップ表示連動の設定

本機のシステムセットアップを表示するために、接続したフラットテレビの入力を設定します。システムセットアップを開始したときに自動的にフラットテレビの入力も切り換わり、また、本機のシステム表示とフラットテレビのSR+表示が重ならないように連動させます。

- 本機とフラットテレビをSR+ケーブルで接続して、本機とフラットテレビの電源を入れてください。
- 本機の音声入力とフラットテレビの映像入力の連動設定は「フラットテレビの入力連動設定 ～PDP In (SR+)～」(→99ページ)で設定します。
- HDMIコントロール機能がONのときはフラットテレビとの連動操作を行うことはできません。HDMIコントロール機能を[OFF]にしてください(→94ページ)。

1 本機の電源を入れて、AVアンプボタンを押す。

リモコンがアンプ操作モードになります。
システムセットアップを表示するためには、テレビの電源を入れて入力を切り換えてください。

2 設定ボタンを押す。

システムセットアップが表示されます。

3 [7. Other Setup]を選んで決定する。

4 [SR+ Setup] を選んで決定する。

5 PDP Volume Controlについて、音声連動を選択する。

ON：連動モードを実行するとフラットテレビの音量を消音します。
OFF：音声連動しません。

6 Monitor Out Connectについて、本機のMONITOR OUT出力からフラットテレビのどの入力へ接続したのかを選択する。

「Input-1」～「Input-5」（「Input-」の入力数はフラットテレビによって異なります）、「OFF」から選びます。システムセットアップ時に、ここで設定した入力にフラットテレビの入力が切り換わります。
工場出荷時は「OFF」に設定されています。

7 戻るボタンを押す。

連動モードの設定を終了します。
システムセットアップを終了するときは、設定 を押します。

フラットテレビの入力連動設定 ～ PDP In (SR+) ～

本機の音声とフラットテレビの映像の入力を連動させるための設定です。ソース機器の映像出力を直接フラットテレビの映像入力に接続した場合、本機の入力切り換えと連動してフラットテレビの映像入力も自動で切り換わります。フラットテレビに内蔵されているテレビチューナーの音声出力を本機に接続したときにも利用できます。例としてDVDの音声を本機のDVDに、映像をフラットテレビのビデオ入力2に接続した場合を説明します。

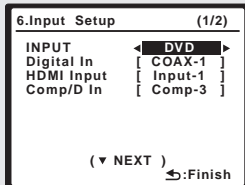
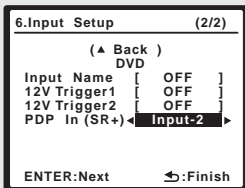
2

```
6.Input Setup          (1/2)
 INPUT          ◀   DVD   ▶
 Digital In     [ COAX-1 ]
 HDMI Input     [ Input-1 ]
 Comp/D In      [ Comp-3 ]

        (▼ NEXT )
                    ↺:Finish
```

4

```
6.Input Setup          (2/2)
        (▲ Back )
          DVD
 Input Name     [   OFF   ]
 12V Trigger1   [   OFF   ]
 12V Trigger2   [   OFF   ]
 PDP In (SR+)◀   Input-2  ▶

 ENTER:Next         ↺:Finish
```

ここから読む場合は、59ページの手順1～3を行ってから以下の手順へお進みください。

1 **[6. Input Setup]を選んで決定する。**

2 **PDPの映像入力に合わせたい本機の音声入力を選ぶ。**

例）「DVD 」を選びます。

3 **(▼ Next)に従って次のページを表示させる。**

⬇ボタンを押して(2/2)ページを表示させます。

4 **「PDP In (SR+)」で、本機の音声入力とフラットテレビの映像入力の連動を設定する。**

例）「Input-2 」を選びます。
フラットテレビ(PDP)のBS デジタル放送を選ぶときは、本機の入力をTVに切り換えてからPDPの入力を切り換えてください。

5 **戻るボタンを押す。**

フラットテレビの入力連動設定を終了します。

システムセットアップを終了するときは、[設定]を押します。

連動モードを実行する

本機とフラットテレビがSR+ケーブルで接続されていることを確認してください。

- フラットテレビの電源がOFFのとき、または正しく接続されていないときは連動モードは働きません。
- 入力連動モードを設定していない入力のときは、フラットテレビの画面は切り換わりません。
- フラットテレビと本機に表示される音量値は異なります。また、フラットテレビの画面に表示される音量値は目安です。
- SR+ケーブルを接続した状態でフラットテレビの電源が切れているときは、リモコンで本機の操作ができません。
- 入力がiPod USBのときはMonitor Out Connectで設定された入力に連動します(→98ページ)。

1 **フラットテレビの電源を入れる。**

2 [AVアンプ] **リモコンをアンプ操作モードにする。**

3 [SR+ 7] **連動モードをONにする。**

表示部に SR+ ON と表示されます。
連動モードを解除したいときは、再度 SR+ ボタンを押します。

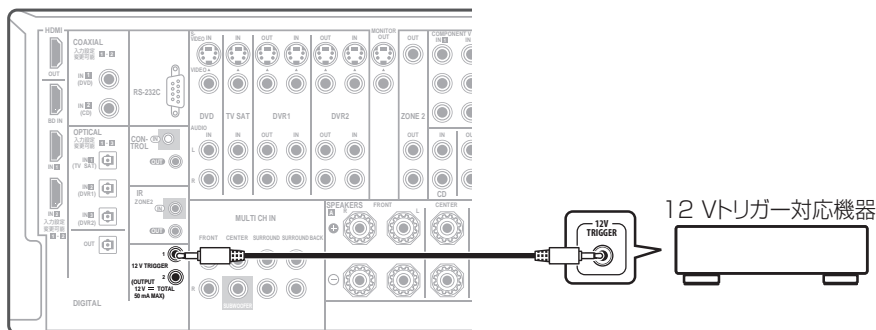
4 **システム動作を確認する。**

以下の操作を行うと、本機とフラットテレビが連動して動作します。

- 本機の入力を切り換えると、フラットテレビの入力が切り換わります。
- 本機の音量を調整すると、フラットテレビの画面に音量値が5秒間表示されます。
- その他、本機の各種操作内容および設定状況を表示します。

12 Vトリガー対応機器との連動

連動機器を接続する

12 Vトリガー対応機器を本機に接続することで、システム動作を行います。本機の入力ファンクションを選ぶだけで、「12 V TRIGGER」端子に接続された機器へ制御信号が送られます。連動設定については「12 Vトリガー端子の連動設定」（→下記）をご覧ください。

- 接続には市販のモノラルミニプラグコード（抵抗なし）をお使いください。
- 12 V TRIGGER端子からは最大でDC OUT 12 V/50 mA(2端子トータル)が出力されます。

12 V トリガー端子の連動設定

設定した入力ファンクションが選ばれたときに、電源などの操作を連動させるための制御信号が12 Vトリガー端子から出力されます。本機には2つの12 Vトリガー端子があり、それぞれについて設定することができます。

1

```
System Setup MENU
 1. Auto MCACC
 2. Surround Back System
 3. Manual MCACC
 4. Data Management
 5. Manual SP Setup
 6. Input Setup
 7. Other Setup
                    ⮌:Exit
```

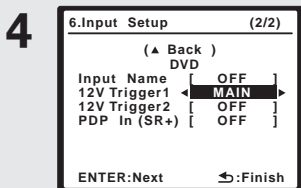
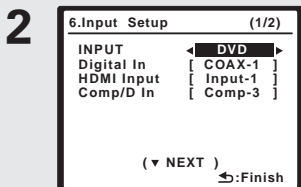
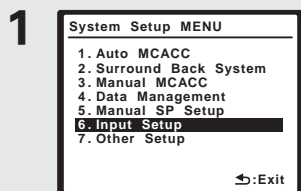
2

```
6.Input Setup            (1/2)
 INPUT          ◀   DVD   ▶
 Digital In     [ COAX-1  ]
 HDMI Input     [ Input-1 ]
 Comp/D In      [ Comp-3  ]

          (▼ NEXT )
                    ⮌:Finish
```

4

```
6.Input Setup            (2/2)
          (▲ Back )
            DVD
 Input Name     [   OFF   ]
 12V Trigger1 ◀    MAIN   ▶
 12V Trigger2   [   OFF   ]
 PDP In (SR+)   [   OFF   ]

 ENTER:Next         ⮌:Finish
```

ここから読む場合は、59ページの手順1～3を行ってから以下の手順へお進みください。

1 [6. Input Setup]を選んで決定する。

2 連動設定したい入力ファンクションを選ぶ。

3 (▼ Next)に従って次のページを表示させる。

⬇ボタンを押して(2/2)ページを表示させます。

4 12V Trigger1または2を選ぶ。

5 [MAIN]、[ZONE 2]、[OFF]から選ぶ。

[MAIN]： メインルームで、手順2の入力ファンクションが選ばれたときに連動します。
[ZONE 2]：ZONE2で、手順2の入力ファンクションが選ばれたときに連動します。
[OFF]： 連動しません。

6 戻るボタンを押す。

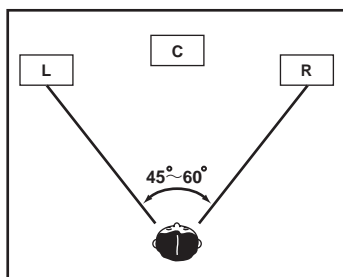
[Input Setup]を終了します。

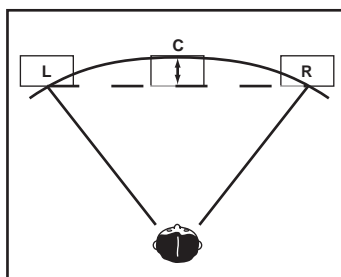
スピーカーの配置について

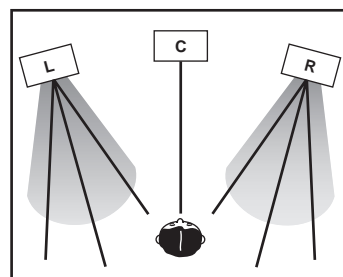
スピーカーの配置はマルチチャンネルサラウンド再生において重要な役割を果たします。
以下の図を参考にしながらリスニングルームに合わせたスピーカーの配置をお試しください。

スピーカーを床に直接設置すると、建物に直接振動が伝わり音質が変わってしまったりします。また、柔らかすぎる棚の上なども音質に影響がありますので、専用スタンドやコンクリートブロックなどの使用をお勧めします。

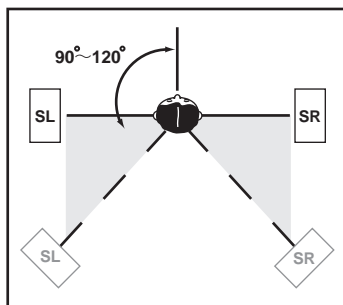
フロント & センター

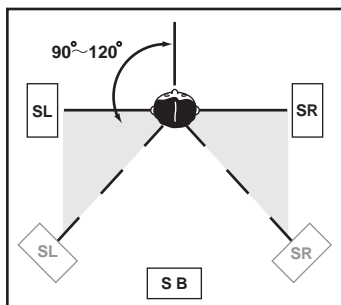
リスニングポイントからの角度

センター（C)を使用する場合は広めに、センター（C)を使用しない場合は狭く配置することをお勧めします。（上図の範囲）

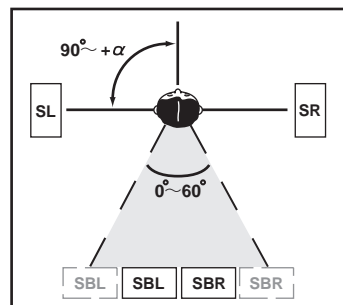
奥行き

センター（C)はフロント(L/R)と同一面からフロントまでの距離を超えない位置に。フロントよりも前方だと音場感を損ねます。

スピーカーの向き

中抜け感を防ぐために多少内振りに。ただし、あまり内振りにしすぎると広がり感などを損ねます。

サラウンド & サラウンドバック

サラウンドバック無しの場合

サラウンドスピーカー（SL/SR)は耳の位置より上方60 cm〜1 mでやや下振りにします。DVDオーディオ用の配置と両立したいときは後方寄りに配置します。SLとSRが真正面で向き合わないように多少左右に振ってみてください。

サラウンドバック 1 本の場合

サラウンドバック 2 本の場合

サラウンドバックスピーカー（SB/SBL/SBR)も耳の位置より上方60 cm〜1 mでやや下振りにします。サラウンドバック2本の場合はSBLとSBRを隣接させリスニングポジションから等距離に設置(設定)するとTHXモードの効果が最大限発揮されます。

サブウーファー

特に制限はありませんが、他のスピーカーの低音出力との打ち消し合いが起こらないような場所に配置してください。
また、壁の近くに設置すると建物との共振により低音が極端に増強される場合がありますのでご注意ください。

デジタル音声フォーマットについて

DVDソフトのパッケージのほとんどに以下のような表示がされています。
1枚のディスクに複数の音声が収録されている場合が多く、どの音声を聴くのか選択することができます。

1. 英　語　(5.1ch サラウンド)
2. 日本語（ドルビーサラウンド）
3. 英　語　(DTS 5.1ch サラウンド)

収録音声数　　録音方式　　音声記録方式

ドルビーデジタルはDVDの標準音声フォーマットであるため、単に「5.1chサラウンド」と記載されている場合は、「ドルビーデジタル(5.1ch)」であることを示します。

デジタル音声の記録方式について

デジタル音声のフォーマットは、下記の「デジタル記録方式」と「収録チャンネル」の組み合わせにより細分化されています。

デジタル記録方式

非圧縮デジタル方式
PCM（Pulse Code Modulation)方式が一般的で、CDやDVDの2chトラックなどに用いられています。サンプリング周波数やビット数の数字が大きいほど高音質となり、通常のCDは44 kHz/16 bitですが、DVD は48 kHz/20 bitや96 kHz/24 bitなどで記録されています。DVDオーディオは、この高音質を保ったままマルチch収録が可能で、192 kHzの2ch信号も収録できます。SACDも非圧縮マルチch記録ですが、PCMとは違う高速⊿Σ変調1ビット方式を採用しています。DVDオーディオやSACDのデジタル伝送にはHDMI接続が必要となります。

圧縮デジタル方式
ドルビーデジタルやDTS、MPEG-2 AAC などはすべて圧縮デジタル方式です。各フォーマットとも聴感心理学などを用いて、音質変化を感じさせない独自の圧縮方式を開発し、従来のデジタルケーブル(同軸または光ファイバー)でのマルチch伝送を可能にしています。

収録チャンネル

2ch ステレオ信号
左右の2つのチャンネルに別々の音が記録されている信号で、通常の音楽用CDなどはほとんどがこのタイプです。

2ch サラウンド信号(ドルビーサラウンド信号)
フロント左/右、センター、サラウンドの4ch信号を所定の演算で2chに変換してある信号です。そのまま2chで再生しても違和感なく楽しめますが、所望のデコード処理(ドルビープロロジックサラウンド再生など)により、製作者の意図どおりの再生となります。

マルチch サラウンド信号
3ch以上の独立した信号が収録されたものをマルチch信号と呼びますが、5.1ch収録が最も一般的です。
フロント左/右、センター、サラウンド左/右の5chと、LFEと呼ばれる超低音域専用の0.1chに独立した信号が記録されています。近年では6.1ch信号も登場し、上記の5.1chに加えサラウンドバックch信号が収録されています。

デジタル音声の再生方式について

マルチチャンネルサラウンド再生

3本以上のスピーカー（サブウーファーを除く)で多チャンネル再生することを指します。音場の立体感や移動感が増し、迫力ある臨場感が期待できます。音源となるソフトがマルチch収録ならばソフトに忠実に再生し、ソフトが2chの場合は、マトリックスデコード処理(ドルビープロロジックⅡxやNeo:6技術など)を施し、マルチch再生させることが可能です。

(2ch)ステレオ再生

2ch信号をそのまま再生する場合と、マルチchソースを2chにダウンミックスして再生する場合の双方を意味します。設定やソースにより、サブウーファーから音が出る2.1ch再生も「ステレオ再生」と呼ぶことがあります。

デコードとは
デジタル信号処理回路などにより、圧縮記録されたデジタル信号を、もとの信号に変換させる技術です。また、2chの音源をマルチch化させる演算技術をマトリックス・デコードと言い、5.1ch信号を6.1chに伸長させる技術もデコードと呼ぶことがあります。

ドルビー

DOLBY TRUE HD

ドルビーデジタル

ドルビーデジタルは、ドルビーのマルチチャンネル音声システムのディスクリート・デジタルサラウンド方式の名称です。映画業界の主流であり、DVD ビデオの標準音声方式としても採用されるなど、デジタル時代の標準フォーマットとなっています。独立した各チャンネルに記録された自然で高度な立体音像と、低域専用 ch により、臨場感あふれるマルチ ch サラウンドを再現します。人間の聴覚特性を応用した圧縮技術により、聴覚上の音質低下を招きません。この信号を伝送するには、デジタル接続が必要です。その他にも以下のような機能を持つ柔軟性の高いフォーマットです。

1) モノ、ステレオ、プロロジック対応の構成および 5.1ch 音声の再生に最適なダウンミキシング
2) 広範囲のビットレートにわたる動作
3) ダイナミックレンジ情報を伝達する機能
4) ダイアログノーマライゼーション機能
   ダイアログノーマライゼーション機能とは、平均的音量レベルが異なるさまざまなソフトでも、一定の音量で再生されるように自動調整する機能です。「Dial. Norm.」と表現されることもあります。

ドルビーデジタルサラウンド EX

ドルビーデジタルサラウンド EX は、映画「スターウォーズ・エピソード 1」の製作に向けて、ドルビーラボラトリーズとルーカスフィルム社で共同開発された、6.1ch 再生が可能な新しい音響フォーマットです。新たに加えられたサラウンドバック ch により空間表現力、定位感が高められ、中央から離れた客席からでも 360 度の回転や頭上を通過するような移動音効果・音像をより生々しく体感することが可能となりました。フィルム上ではサウンドトラックのサラウンド L/Rch にエンコードされるため、既存のドルビーデジタル(5.1ch)環境での再生互換性があります。この技術により製作された映画のリストは、ドルビーラボラトリーズのウェブサイトでご覧になれます。
http://www.dolby.com/

プロロジック IIx 製品は、プロロジック IIx の持つさまざまな機能を、選択して搭載することが可能です。プロロジック IIx 搭載、とキャッチフレーズされた商品でも、必ずしもまったく同じ機能を持っているとは限らないことにご注意ください。

ドルビープロロジック
ドルビープロロジック IIx

ドルビープロロジックIIx は、ドルビープロロジック、ドルビープロロジックII、ドルビーデジタルEX をさらに改良し、ステレオ音声や5.1ch音声を、すべて最大 7.1ch まで拡張できるマトリックス・デコード技術です。
ステレオ音声のマルチch化方式として、ドルビープロロジックは4chに、ドルビープロロジックIIは5ch化していましたが、それらをさらに進化させ、メインの7chを創り出します。
また5.1chソースに対し、ドルビーデジタルEXはモノラルのサラウンドバックchを生成していましたが、これをステレオ化することで最大7.1ch 再生が可能になりました。今まで以上に自然でシームレスな移動感、滑らかで包み込むような、音楽および映画サウンドを体感できます。
本機には複数のモードを搭載しているため、お好みに応じて切り換えることが可能です。

■ 2ch ソース用
MOVIE/MUSIC/PRO LOGIC

■ 5.1ch ソース用
MOVIE/MUSIC/DIGITAL SURROUND EX

MOVIE（DDPRO LOGIC IIx MOVIE）
7.1ch 化します。映画再生に適したモードで、特にドルビーサラウンド・エンコード作品に効果的です。ドルビーデジタル EX に迫るセパレーションや移動感などが得られます。

MUSIC（DDPRO LOGIC IIx MUSIC）
7.1ch 化します。音楽再生に適したモードで、通常のステレオ録音されたソース(CD など)を再生するときにも効果的です。サラウンド ch は定位よりも広がり感を重視しています。

PROLOGIC（DDPRO LOGIC）
従来のドルビープロロジックと同等の再生モードです。
ソースのクオリティを問わず、幅広くお使いいただけるモードです。

SURROUND EX
左記参照
サラウンドバック ch を使用しない場合は、自動的に従来のプロロジック II モードになります。

■2chソースに対するプロロジックとプロロジックIIxの違い

	プロロジック	プロロジック II	プロロジック IIx
効果的なソース	ドルビーサラウンドエンコード処理されたステレオ音声	すべてのステレオ音声	すべてのステレオ音声 / Dolby Digital 5.1ch ソース
デコードチャンネル数	4.1ch (サラウンド モノラル)	5.1ch (サラウンド ステレオ)	7.1ch (サラウンド、サラウンドバック ステレオ)
周波数特性	サラウンド 7 kHz 帯域制限	全チャンネル フルバンド	全チャンネル フルバンド

ドルビーデジタルプラス

ドルビーデジタルプラスは、高精細映像放送番組やパッケージメディア向けに開発された次世代音声技術です。HD DVDの必須音声として、ブルーレイディスクのオプション音声として、それぞれのフォーマットに採用されたこの技術は、将来の放送の要求を満たす高い効率性ときたるべき高精細映像時代に求められる音声の可能性を実現するための機能と柔軟性を結合させたものです。
音声出力については、ディスクリートチャンネル出力によるマルチチャンネルサウンド出力を行い、従来を越える音質で最大7.1チャンネル*出力します。また、従来のドルビーデジタルデコーダーでは通常のドルビーデジタル信号として出力するため、完全互換性を持っています（この際、処理遅延や音質劣化はありません）。
最大6 Mbpsのビットレート性能で、HD DVDでは3 Mbps、ブルーレイディスクでは1.7 Mbpsが最大規格となります。
ケーブル1本で高精細映像・音声のデジタル接続を可能にするHDMIでサポートされています。

* ドルビーデジタルプラスは、8チャンネル以上のチャンネル数をサポートしていますが、現在HD DVDおよびブルーレイディスクそれぞれの規格では、最大音声チャンネル数が8チャンネルに制限されています。

ドルビー TrueHD

ドルビー TrueHDは、次世代高精細光ディスク向けに開発されたロスレス符号化技術です。HD DVDの必須音声として、ブルーレイディスクのオプション音声として、それぞれのフォーマットに採用されたこの技術は、1ビット精度で復元可能な記録・再生を実現し、次世代高精細光ディスクの要である高精細画像を完全なものにします。高精細映像と組み合わせることで、ドルビー TrueHDは高精細映像と最高品位のサウンドで、かつてないホームシアター体験を実現します。
最大18 Mbpsのビットレートで、24 bit/96 kHz、最大8ch*の独立チャンネルを記録することが可能です。
また、ドルビー TrueHDはダイアログノーマライゼーションやダイナミックレンジコントロールに対応しています。ダイアログノーマライゼーションは、再生中に他のドルビーデジタル、ドルビー TrueHDプログラムに移行する際も同一のボリュームレベルを維持することが可能で、ダイナミックレンジコントロールは音量を下げても収録された音源の細部まで聞きとることが可能な(音源の細部を聞くために大音量にする必要がない)音声再生のカスタマイズです。
ケーブル1本で高精細映像・音声のデジタル接続を可能にするHDMIでサポートされています。

* ドルビー TrueHDは、8チャンネル以上のチャンネル数をサポートしていますが、現在HD DVDおよびブルーレイディスクそれぞれの規格では、最大音声チャンネル数が8チャンネルに制限されています。

DTS

dts-HD™ Master Audio

DTS

デジタルシアターシステムズ（Digital Theater Systems）の略で、低圧縮率と高転送レートがもたらす豊富な情報量により、高音質マルチチャンネルサラウンド再生を実現します。音楽用にも独自録音によるDTS-CDがあります。

DTS 96/24

5.1chすべてを96 kHz/24 bitの高音質で再生するサラウンドフォーマットで、スタジオのマスター音源のクオリティを踏襲しています。DVDの限られた記録エリアで、高音質/高画質を両立させるために開発されました。本機は、DTS 96/24対応デコーダーを搭載しているので、既存のDTS対応のDVDプレーヤーと、DTS 96/24 に対応するデコーダー（AVアンプ等）をデジタル接続することで、再生することができます（専用プレーヤーは必要ありません）。従来のDTSデコーダーでは通常のDTS信号として再生されるため、完全互換性を持っています。

DTS-ES

2000年11月に発表されたサラウンドフォーマットで、「DTS Extended Surround」の略称です。従来の5.1chにサラウンドバック(SB) chを加えたもので、かつてない音像・定位感をもたらすことが可能になりました。「DTS-ES ディスクリート6.1」と「DTS-ES マトリックス6.1」の2種類があり、どちらも従来のDTS 5.1chデコーダーとの下位互換性を有しています。

DTS Neo:6

すべての 2ch ソースを 6.1ch 化するマトリックスデコード技術です。Cinema モード /Music モードがあります。

CINEMA （Neo6: CINEMA）
6.1ch 化します。映画再生に適したモードで、2ch でも映画館特有の移動感などをお楽しみいただけます。

MUSIC （Neo6: MUSIC）
6.1ch 化します。フロントからは原音をそのまま再生するため音質の変化が無く、音楽再生に適しています。また、センター / サラウンド / サラウンドバック ch の音声が音場にナチュラルな広がり感を加えます。

DTS-HD Master Audio

DTS-HD Master Audio（DTS-HD マスターオーディオ）は、プロフェッショナルスタジオで作られるマスター音源を、その品質のままに伝送することが可能なフォーマットです。DTS-HD Master Audio が伝送する音声は可変データ転送レートで、Blu-ray disc フォーマットにおいては毎秒最高 24.5 Mbps、HD-DVD フォーマットにおいては 18.0 Mbps であり、スタンダード DVD よりも格段に高い転送レートを持っています。この高いデータ転送レートによって、7.1ch の音声すべてを 96 kHz/24 bit の高音質で伝送することを可能にしています。

DTS-EXPRESS

DTS-EXPRESS は最大 5.1ch までのロービットレート技術です。DTS-EXPRESS が伝送する音声は固定データ転送方式で、24 kbps ～ 256 kbps までをサポートしています。HD DVD disc の SUB AUDIO として、ブルーレイディスクのオプション音声として収録される他、放送コンテンツやメモリーオーディオコンテンツへの応用が想定されています。本機は PRIMARY AUDIO として伝送されてきた場合にのみ再生が可能です。

MPEG-2 AAC

MPEG-2オーディオの標準方式の1つで、BS デジタルや地上デジタル放送で採用されている音声符号化規格です。高圧縮率ながら高音質を確保できる点が特長で、番組内容によりマルチチャンネル設定が可能なフォーマットです。

■米国におけるパテントナンバー

08/937,950	5,297,236	5,481,614	5,490,170
5,848,391	4,914,701	5,592,584	5,264,846
5,291,557	5,235,671	5,781,888	5,268,685
5,451,954	07/640,550	08/039,478	5,375,189
5 400 433	5,579,430	08/211,547	5,581,654
5,222,189	08/678,666	5,703,999	05-183,988
5,357,594	98/03037	08/557,046	5,548,574
5 752 225	97/02875	08/894,844	08/506,729
5,394,473	97/02874	5,299,238	08/576,495
5,583,962	98/03036	5,299,239	5,717,821
5,274,740	5,227,788	5,299,240	08/392,756
5,633,981	5,285,498	5,197,087	

Windows Media Audio 9 Professional

Windows Media Audio 9 Professional（WMA9 Pro)は、マイクロソフト社が従来のWindows Media Audio（WMA)のテクノロジーをさらに進化させて開発したディスクリート・デジタルサラウンドフォーマットです。WMAは圧縮効率の高さを特徴とし、インターネット配信によるストリーミング再生やダウンロード再生などWindows PCでの音楽再生に用いられる圧縮音声の標準フォーマットとなっています。
そしてこのWindows Media 9シリーズでは、WMAの特徴を継承しながら、さらにマルチチャンネル対応に拡張しました。WMA9 Proコーデックは、96 kHz/24 bitの解像度によるクリアな音質・5.1ch/7.1ch完全ディスクリート処理による高い臨場感を確保しながら、低ビットレートでデジタルサラウンドサウンドを実現します。またその高い圧縮効率により、CD/DVDなどのデジタルメディアだけでなく、高速ブロードバンド通信によるストリーミング配信にも対応しています。
本機はWMA9 Proデコーダーを内蔵していますので、WMA9 Pro対応プレーヤー *と同軸または光ファイバーケーブルでデジタル接続することによって、WMA9 Proでエンコードされた音声をデコードして再生することができます。
* WMA9 Pro対応プレーヤーとしては、PC、DVDプレーヤー、セットトップボックス等が考えられます。ただし、それらの機器の同軸または光デジタル出力端子からWMA9 Pro音声を出力できる場合のみ、本機でデコードして再生することができます。

	WMA	WMA9 Pro
最大ディスクリートチャンネル数	2ch	5.1ch/7.1ch
最大量子化ビット数	16 bit	24 bit
最大サンプリング周波数	48 kHz	96 kHz
対応ビットレート	128 kbps～192 kbps	128 kbps～768 kbps
S/PDIF 伝送	非圧縮	圧縮

THX

THXは、THX社によって確立された独自の規格と技術の集大成です。「映画館でもホームシアターでも、映画のサウンドトラックは映画監督の意図どおり、できるかぎり忠実に再生して欲しい」というジョージ・ルーカス監督の情熱によって誕生しました。THXはホームシアターの音場最適化に関する数々の特許技術を開発しています。

THX Select2

ホームシアター機器が THX Select2 認証されるには、下記の技術を備え、かつ品質と動作に関する一連の厳しい試験に合格しなくてはなりません。こうして製品搭載が許諾される THX Select2 のロゴは、ご購入いただいたホームシアター製品が長年にわたって素晴らしい性能を維持する保証となります。THX Select2 規格は、プリアンプ・パワーアンプの性能、操作性、デジタル・アナログの両分野にわたる何百もの性能要求を含め、製品の全体像を網羅しています。

THX Cinema

映画のサウンドトラックは、ダビングステージ(ミキシング専用大型映画館)で制作されます。DVD などに収録する音声もそのサウンドトラックのままで、ホームシアター向けの変更は加えません。家庭と映画館との空間的な違いによる音色の差を補正し、映画館の音場を正確に再現します。

THX Surround EX

「THX Surround EX - Dolby Digital Surround EX」はドルビーラボラトリーズとルーカスフィルム社のTHX部門との共同開発によるものです。リスナーの後方に位置するよう加えられたサラウンドバックchは、ミキシング段階で Dolby Digital Surround EX 技術によって符号化され、映画館での上映時に復元されます。従来の5.1chスピーカー構成では表現しきれなかった後方部の繊細な描写力・空間の奥行きや広がり感・音像定位などが得られるようになりました。一般家庭でこの新技術を忠実に再生することができるのは、THX Surround EX のロゴが搭載された製品だけです。この製品は通常の5.1chソースでも「THX Surround EX 」モードでお楽しみいただけます。この場合のサラウンドバックchの音声は、所定の演算処理によって生成されますので、お好みに応じてご使用ください。

Re-Equalization

映画のサウンドトラックは、映画館での上映用に製作されているため、それを家庭用のオーディオ機器で再生すると、過度に明るく耳障りに聞こえます。Re-Equalizationは小型のホームシアターでも正確な音色バランスを再現します。

Timbre Matching

人間の耳は、音の到達方向によって音色の感じ方が変わります。映画館では数多くのサラウンドスピーカーが聴衆を囲むように配置されていますが、ホームシアターではリスナー両側の2本のみです。 この配置の違いから起こる音色の差を補正し、かつ前方から到達する音の性質に合わせることによって、フロント-サラウンド間の音のつながりをスムーズにします。

Adaptive Decorrelation

映画館ではサラウンドスピーカーが多数なのに対し、ホームシアターは通常2本です。そのため、広がり感やサラウンド感に欠けてしまったり、近接したスピーカーに音場が偏ってしまうことがあります。Adaptive Decorrelationは サラウンド信号間の時間と位相の関係を微妙に変化させることにより、2本のスピーカーでもリスニングエリアを拡大して、映画館と同様の効果をもたらします。

Advanced Speaker Array(ASA)

ASA処理は、サラウンドバックスピーカーを2本使用し、その2本を近接して設置した場合に最高能力を発揮します。この技術はTHX Select2 Cinema、THX Select2 MusicまたはTHX Select2 Gamesで使用します。

THX Loudness Plus

この技術は THX Ultra2 Plus™ と THX Select2 Plus™ の認証を受けた製品の特徴となる新しい音量調節技術で、どの音量レベルでも豊かで繊細なホームシアターサラウンド音場を創造します。リファレンスレベル（本機の 0 dB ポジション）以下での再生では音質や空間表現が変化することがありますが、各チャンネルの音量や周波数特性を最適化することによりこの変化を補正し、音量レベルにかかわらず、サウンドトラックの持つ真のインパクトを体験できるようになります。THX のリスニングモードを選択しているときは、それぞれのコンテンツタイプに応じて自動でこの技術が適用されます。

THX Select2 Cinema

Dolby DigitalやDTS等で収録された5.1ch映画ソースに適しています。このモードにおけるASA 処理は、サラウンド成分を分析し、雰囲気や方向感が最善になるようサラウンドバックに成分を振り分けます。
(*注)参照。

THX Select2 Music

マルチチャンネルのDVD音楽ソフトの中には、映画のサウンドトラックとはまったく違ったミキシングを行っているものがあります。 ASA 技術は、この DTS や Dolby Digital 等で収録された5.1ch音楽ソースに対し、音楽再生に適した後部音場の安定的な広がり感をもたらします。

THX Select2 Games

ステレオやマルチチャンネルとして収録されたゲームソフトの音楽再生に適しています。音場定位技術である「Advanced Speaker Array」（ASA）の処理を加え、360°取り囲むような音響空間を創り出します。

*注
本機は「6.1再生検出信号」（DTS - ES と Dolby Digital Surround EX）を自動検出しますが、それらの技術を用いて上映された映画でも、DVD化の際にこの検出信号を収録していないものがあります。この場合は手動で最適なモードに変更してください。Surround EX技術により製作された映画のリストは各ウェブサイトでご覧になれます。

Neural-THX Surround

Neural-THX® Surroundはステレオ素材からマルチチャンネルサラウンドを創り出します。楽器、音声、背景音などの詳細部分をきめ細かく再生し、豊かでディスクリート感に優れたサラウンドサウンドを創り出します。

参考／技術資料

伝送方式について

HDMI

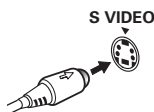
HDMI (High Definition Multimedia Interface)とは1本のケーブルで映像と音声を受信するデジタル伝送規格です。ディスプレイ接続技術のDVI (Digital Visual Interface)を家庭向けのオーディオ機器用にアレンジしたものであり、高い帯域幅のデジタル内容保護(HDCP)を実現した次世代テレビ向けのインターフェース規格です。

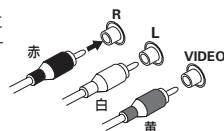
接続コードについて

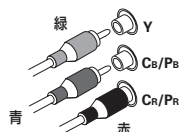
■ビデオコード

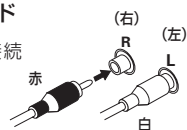
一般的な映像用コードで、コンポジットフォーマットの映像信号を伝送します。

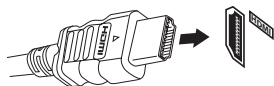
■Sビデオケーブル

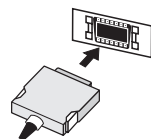
映像信号(Y)と色信号(C)を分離して接続することができ、コンポジットよりも高品位な映像品質を楽しめます。

■AVコード

オーディオコードとビデオコードの一体化したものです。

■コンポーネント映像ケーブル

映像信号のY、CB/PB、CR/PRの3つの信号からなり、Sビデオケーブルよりも高品位な映像品質を楽しめます(ビデオコード3本での接続も可能です)。
D端子変換ケーブルも市販されています。

■オーディオコード

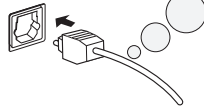
オーディオ機器の接続に使用します。

■HDMIケーブル

デジタル信号でテレビや衛星チューナーと接続することができます。1本で映像信号と音声信号の両方を伝送します。デジタル信号をアナログ変換しないため、鮮明で高品位な映像品質を楽しめます。

■D端子ケーブル

映像信号と映像コントロール信号を、1つのコネクタで接続できるケーブルです。コンポーネント映像ケーブルと同等の映像品質を楽しめます。

■同軸ケーブル / 光ファイバーケーブル

デジタル機器の接続に使用します。

同軸ケーブル
(またはオーディオ / ビデオコード)

光ファイバーケーブル

- 接続の際は端子の向きを合わせてください。誤った向きでむりやり挿入すると、端子が変形し、ケーブルを抜いてもシャッターが閉まらなくなることがあります。
- 長さは3m以下のものを使用してください。
- プラグにホコリが付着したときは、柔らかい布で拭いてから接続してください。

リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧

この表は出力する最大の出力チャンネル数を示したもので、厳密なデコードch数とは異なります。詳しくは「デジタル音声フォーマットについて」(→102ページ)をご覧ください。

- 表中の灰色で表示された部分は、本機により最適なモードが自動選択されます。ユーザーによる選択はできません。
- MULTI CH IN入力時は、リスニングモードの効果を加えることはできません。
- 入力信号によっては、サラウンドバック信号を生成できないものがあります。

サラウンドバックスピーカーを接続しているとき

	ch	入力信号 信号名称	インジケーター例	THX	STANDARD	AUTO SURROUND	DIRECT	PURE DIRECT
SBch処理モード ON	マルチch信号	DOLBY DIGITAL PLUS DOLBY TrueHD DTS-HD DTS-HD Master Audio WMA9 Pro PCM (6.1ch信号/7.1ch信号)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE *3	THX CINEMA THX MUSIC THX GAMES	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生	AUTO SURROUND と同様	AUTO SURROUND と同様
		DOLBY DIGITAL PLUS DOLBY TrueHD (176.4 kHz/192 kHzを除く) (5.1ch信号)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	THX SURROUND EX DD PLIIx Movie +THX *1 THX SELECT2 CINEMA *1 THX SELECT2 MUSIC *1 THX SELECT2 GAMES *1 DD PLIIx Music +THX DD EX +THX GAMES *4	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 DD PLIIx Music	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1		
		DOLBY TrueHD (176.4 kHz/192 kHz) (5.1ch信号)		ストレートデコード再生		DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1		
		DTS-EXPRESS DTS-HD Master Audio (5.1ch信号)		THX CINEMA *4 THX SELECT2 CINEMA *1 THX SELECT2 MUSIC *1 THX SELECT2 GAMES *1 THX MUSIC *4 THX GAMES *4	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生		
		DOLBY DIGITAL EX (6.1ch再生検出信号付)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	THX SURROUND EX DD PLIIx Movie +THX *1 THX SELECT2 CINEMA *1 THX SELECT2 MUSIC *1 THX SELECT2 GAMES *1 DD PLIIx Music +THX DD EX +THX GAMES *4	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 DD PLIIx Music	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1		
		DTS ES Matrix DTS ES Discrete (6.1ch再生検出信号付)		DTS ES Matrix + THX CINEMA DTS ES Discrete + THX CINEMA DTS + DD PLIIx Movie +THX *1 THX SELECT2 CINEMA *1 THX SELECT2 MUSIC *1 THX SELECT2 GAMES *1 DTS ES Matrix + THX MUSIC *4 DTS ES Matrix + THX GAMES *4 DTS ES Discrete + THX MUSIC *4 DTS ES Discrete + THX GAMES *4	DTS ES Matrix DTS ES Discrete DTS + DD PLIIx Movie *1 DTS + DD PLIIx Music	DTS ES Matrix DTS ES Discrete		
		DTS DTS96/24 (5.1ch信号等)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	DTS + Neo:6 + THX CINEMA DTS + DD PLIIx Movie +THX *1 THX SELECT2 CINEMA *1 THX SELECT2 MUSIC *1 THX SELECT2 GAMES *1 DTS + Neo:6 + THX MUSIC *4 DTS + Neo:6 + THX GAMES *4 DD PLIIx Music +THX *1	DTS+Neo:6 DTS + DD PLIIx Movie *1 DTS + DD PLIIx Music	DTS+Neo:6	ストレートデコード 再生	ストレートデコード 再生
		DOLBY DIGITAL MPEG-2 AAC PCM (5.1ch信号等)		THX SURROUND EX DD PLIIx Movie +THX *1 THX SELECT2 CINEMA *1 THX SELECT2 MUSIC *1 THX SELECT2 GAMES *1 DD PLIIx Music +THX DD EX +THX GAMES *4	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 DD PLIIx Music	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1		
		SACD (5.1ch信号)		THX SELECT2 MUSIC DD PLIIx Music +THX MUSIC	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 DD PLIIx Music	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1		
SBch処理モード AUTO	マルチch信号	DOLBY DIGITAL PLUS DOLBY TrueHD DTS-HD DTS-HD Master Audio WMA9 Pro PCM (6.1ch信号/7.1ch信号)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE *3	THX CINEMA	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生	AUTO SURROUND と同様	AUTO SURROUND と同様
		DOLBY TrueHD (176.4 kHz/192 kHz) (5.1ch信号)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生		
		DOLBY DIGITAL EX (6.1ch再生検出信号付)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	THX SURROUND EX	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1		
		DTS-ES (6.1ch信号/ 6.1ch再生検出信号付)		DTS ES Matrix + THX DTS ES Discrete + THX	DTS ES Matrix DTS ES Discrete	DTS ES Matrix DTS ES Discrete		
		上記以外の5.1chソース	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	THX SELECT2 CINEMA *1 THX CINEMA *4	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生		
		SACD (5.1ch信号)		THX SELECT2 MUSIC *1 THX MUSIC *4	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生		

	CH	入力信号 信号名称	インジケーター例	THX	STANDARD	AUTO SURROUND	DIRECT	PURE DIRECT
SBch処理モード ON/AUTO	2ch信号	DOLBYサラウンド	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	DD PLIIx Movie +THX DD PLIIx Music +THX MUSIC DD PLIIx Game +THX GAMES Neo:6 Cinema +THX THX SELECT2 GAMES *1 Neo:6 Music +THX MUSIC DD PL +THX CINEMA *2	DD PLIIx Movie DD PLIIx Music DD PLIIx Game DD PRO LOGIC *2 Neo:6 Cinema Neo:6 Music	DD PLIIx Movie	AUTO SURROUND と同様	AUTO SURROUND と同様
		DTSサラウンド				Neo:6 Cinema	AUTO SURROUND と同様	AUTO SURROUND と同様
		DOLBY DIGITAL PLUS DOLBY TrueHD (176.4 kHz/192 kHzを除く)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	DD PLIIx Movie +THX DD PRO LOGIC +THX *2 THX SELECT2 GAMES *1 DD PLIIx Music +THX MUSIC DD PLIIx Game +THX GAMES	DD PLIIx Movie DD PLIIx Music DD PLIIx Game DD PRO LOGIC *2	ステレオ再生	ステレオ再生	ステレオ再生
		DOLBY TrueHD (176.4 kHz/192 kHz)		ステレオ再生				
		DTS-HD Master Audio DTS-HD DTS-EXPRESS		THX CINEMA THX MUSIC THX GAMES	ステレオ再生			
		その他のステレオソース		DD PLIIx Movie +THX DD PLIIx Music +THX MUSIC DD PLIIx Game +THX GAMES Neo:6 Cinema +THX THX SELECT2 GAMES *1 Neo:6 Music +THX MUSIC DD PL +THX CINEMA *2	DD PLIIx Movie DD PLIIx Music DD PLIIx Game DD PRO LOGIC *2 Neo:6 Cinema Neo:6 Music Neural THX *5	ステレオ再生	ステレオ再生	ステレオ再生
		アナログ入力						ANALOG DIRECT
		PCM						ステレオ再生
		SACD		Neo:6 Music +THX MUSIC DD PLIIx Music +THX MUSIC	DD PLIIx Movie DD PLIIx Music DD PLIIx Game DD PRO LOGIC *2 Neo:6 Cinema Neo:6 Music			ステレオ再生

*1：サラウンドバックスピーカーを 1 本しか接続していないときは選択することができません。
*2：DD PRO LOGIC を選択するとサラウンドバックスピーカーから音は出ません。
*3：6.1ch 信号のときは「SBL」「SBR」が消灯して「SB」が点灯します。
*4：サラウンドバックスピーカーを 2 本接続しているときは選択することができません。
*5：入力信号がアナログ入力と PCM のときのみ選択することができます。

サラウンドバックスピーカーを接続していない、または SBch 処理モード OFF のとき

	CH	入力信号 信号名称	インジケーター例	THX	STANDARD	AUTO SURROUND	DIRECT	PURE DIRECT
SBch処理モード 関係なし(OFF)	マルチch信号	SACD (5.1ch信号)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE *1	THX MUSIC	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生
		DOLBY DIGITAL EX (6.1ch再生検出信号付) 上記以外の5.1/6.1/7.1chソース		THX CINEMA THX MUSIC THX GAMES	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生		ストレートデコード再生
	2ch信号	DOLBY サラウンド	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	DD PRO LOGIC +THX DD PLII Movie +THX CINEMA DD PLII Music +THX MUSIC DD PLII Game +THX GAMES Neo:6 Music +THX MUSIC Neo:6 Cinema +THX	DD PLII Movie DD PLII Music DD PLII Game DD PRO LOGIC Neo:6 Cinema Neo:6 Music	DD PLII Movie	AUTO SURROUND と同様	AUTO SURROUND と同様
		DTSサラウンド				Neo:6 Cinema	AUTO SURROUND と同様	AUTO SURROUND と同様
		DOLBY DIGITAL PLUS DOLBY TrueHD (176.4 kHz/192 kHzを除く)			DD PLII Movie DD PLII Music DD PLII Game DD PRO LOGIC	ステレオ再生	ステレオ再生	ステレオ再生
		DOLBY TrueHD (176.4 kHz/192 kHz)		ステレオ再生				
		DTS-HD Master Audio DTS-HD DTS-EXPRESS		THX CINEMA THX MUSIC THX GAMES	ステレオ再生			
		その他のステレオソース	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	DD PLII Movie +THX CINEMA Neo:6 Music +THX MUSIC DD PLII Game +THX GAMES DD PLII Music +THX MUSIC Neo:6 Cinema +THX DD PRO LOGIC +THX	DD PLII Movie DD PLII Music DD PLII Game DD PRO LOGIC Neo:6 Cinema Neo:6 Music Neural THX *2	ステレオ再生	ステレオ再生	ステレオ再生
		アナログ入力						ANALOG DIRECT
		PCM						ステレオ再生
		SACD		Neo:6 Music +THX MUSIC DD PLII Music +THX MUSIC				ステレオ再生

*1：5.1ch 信号のときは「SBL」「SBR」が消灯します。6.1ch 信号のときは「SBL」「SBR」が消灯して「SB」が点灯します。
*2：入力信号がアナログ入力と PCM のときのみ選択することができます。

ADVANCED SURROUND モードの種類と効果

理想の視聴空間形状や、各ソフトに収録された音声の研究などにより開発された、パイオニアオリジナルのサラウンドモードです。映画/音楽/TV放送/ゲームなど多岐にわたるいかなるソフトでも、快適なサラウンド再生が提供できるよう、多種のモードをご用意いたしました。各ソースはデコード処理(2chソースはマトリックス・デコード処理)後、それぞれに合わせたオリジナルの処理を加えています。以下をご参照のうえ、お好みに応じて選択してください。

ACTION
アクションシーンや戦闘、爆発シーンの迫力が、包み込むように再現され、映画の迫力や臨場感を楽しめます。
DRAMA
落ち着いた雰囲気でストーリー性重視の映画の再生に効果的です。
SCI-FI (Science Fiction)
セリフと効果音の分離が良いため、SF映画などのSE（特殊効果音）の多いソースに効果的です。
MONOFILM
古い映画やモノラル信号のテレビ放送などを楽しむのに効果的で、マルチチャンネルサラウンドで再生します。
ENT.SHOW (Entertainment Show)
ミュージカルのサラウンド感や、劇場ホールのような雰囲気をお楽しみいただけます。
EXPANDED (Expanded Theater)
2chで収録された音声を、5chまたは7chのサラウンド効果で再生できます。ドルビーサラウンドソフト再生時は特に効果的です。
TV SURROUND
テレビ放送のほとんどの割合を占めるモノラル信号やステレオ信号をマルチチャンネルサラウンドで再生します。
ADVANCED GAME
ゲームのスピード感、躍動感をより一層高めます。シューティングゲームやレーシングゲームなど、右へ左へ駆け巡るような流れのあるシーンの多いゲームに効果的です。
SPORTS
スポーツ中継の視聴に最適です。その場で観戦しているような臨場感を体感できるサラウンド再生です。
CLASSICAL
大型のコンサートホールをイメージしています。反射音の遅延時間帯が長く、さらに残響音を加えることでコンサートホール特有の美しい響きと、オーケストラの迫力が楽しめます。
ROCK/POP
楽器の分離感と臨場感があり、躍動感のあるサラウンドを楽しめます。
UNPLUGGED
アコースティック系の音楽ソースに最適なモードです。
EXT. STEREO (Extended Stereo)
標準のステレオ(2ch)音声を加工することなく、ステレオ音声のまま5本または7本のスピーカーで再生します。部屋のどの場所でも同じようなステレオ感が得られます。
PHONES SURROUND（ヘッドホン挿入時のみ）
ヘッドホンでありながら仮想立体音響を再現し、マルチチャンネルサラウンド再生時の臨場感をお楽しみいただけます。

デコード処理の方法は、各モードに最適な技術を組み合わせてありますのでお客様が変更することはできません。

工場出荷時の設定一覧

設定項目	初期値	参照ページ
スピーカーインピーダンス	8 Ω～ 16 Ω	25
サラウンドバックシステムの設定	Normal	62
スピーカーの有り無し / 低域再生能力	すべて SMALL（小）	75
サブウーファー	YES（有り）	75
スピーカー出力レベル（M1 ～ M6）	0.0 dB（補正無し）	77
スピーカーまでの距離（M1 ～ M6）	すべて 3.00 m	78
クロスオーバー周波数	80 Hz	75
定在波制御	ON（ただし全フィルター 0.0 dB、補正無し）	65
視聴環境の周波数特性の補正（M1 ～ M6）	全帯域 0.0 dB（補正無し）	66
X-Curve	OFF	79
サラウンドバックスピーカー間の距離	0 － 0.3 m	80
入力の設定	リアパネル表記のとおり（Input Setup 参照）	81
入力ファンクション	DVD	35
入力信号の種類	AUTO（入力信号により変化します）	36
SBch 処理モード	ON	42
リスニングモード	AUTO SURROUND	37
MCACC	M1:MEMORY1	41
PHASE CONTROL	ON	43
オーディオ調整機能の各項目	（オーディオ調整のページを参照）	44
ビデオ調整機能の各項目	（ビデオ調整のページを参照）	47
DIGITAL SAFETY	OFF	116
スピーカーシステム A/B	SP(A)：ON	56
ディスプレイの明るさ	一番明るい	55
SR ＋連動モードの設定	OFF	98
HDMI コントロール機能	ON	95
12V トリガーの連動設定	すべて OFF	100

本機のすべての設定を工場出荷時に戻す

設定オールリセットは以下の手順で実行します。操作は本体フロントパネルで行います。
設定オールリセットを行うと、上記のすべての設定が工場出荷時の状態になりますので**十分ご注意ください。**

① 本機が STANDBY モードのときに STEREO/A.L.C. ボタンを押しながら ⏻STANDBY/ON ボタンを 3 秒以上押し続ける

② フロントパネル表示部に「RESET ？」と表示されたら AUTO SURR/STREAM DIRECT ボタンを押し、「OK」表示後に HOME THX ボタンを押します

電源コンセントからコンセントを長時間抜いた状態にしていても、本機で設定した各種設定が消去されることはありません。

仕様

オーディオ部

実用最大出力(JEITA、1 kHz、10 %、6 Ω)
フロント .... 180 W+180 W
センター ....180 W
サラウンド .... 180 W+180 W
サラウンドバック.......................... 180 W+180 W

定格出力(ステレオ動作時)
20 Hz ～ 20 kHz、0.09 %、8 Ω
.... 110 W+110 W

定格出力(サラウンド動作時)
20 Hz ～ 20 kHz、0.09 %、8 Ω
フロント .... 110 W+110 W
センター ....110 W
サラウンド .... 110 W+110 W
サラウンドバック.......................... 110 W+110 W

入力端子(感度/インピーダンス)
LINE系 .... 335 mV/47 kΩ
周波数特性
LINE系................................5 Hz ～ 100 kHz、$^{+0}_{-3}$dB
出力端子(レベル/インピーダンス)
REC OUT系.................................. 335 mV/2.2 kΩ
トーンコントロール
BASS..±6 dB （100 Hz）
TREBLE .... ±6 dB （10 kHz）
LOUDNESS（ボリュームポジション−40 dB時）
.........................+4 dB/+2 dB （100 Hz/10 kHz）
SN比(IHF、ショートサーキット、Aネットワーク)
LINE系 ....103 dB
SN比(EIA、1 W （1 kHz))
LINE系 ....83 dB

ビデオ部(コンポジット、S)

入力端子(感度/インピーダンス) .... 1 Vp-p/75 Ω
出力端子(レベル/インピーダンス) .... 1 Vp-p/75 Ω
周波数特性 .... 5 Hz ～ 10 MHz
SN比...65 dB

ビデオ部(コンポーネント、D4)

入力端子(感度/インピーダンス)
Y入力レベル .... 1 Vp-p/75 Ω
C_B/P_B、C_R/P_R入力レベル ....0.7 Vp-p/75 Ω
出力端子(レベル/インピーダンス)
Y出力レベル .... 1 Vp-p/75 Ω
C_B/P_B、C_R/P_R出力レベル ....0.7 Vp-p/75 Ω
周波数特性 .... 5 Hz ～ 100 MHz
SN比..65 dB

HDMI部

入力端子 .... 19 ピン× 3
出力端子 ....19 ピン(5 V,100 mA)

電源部・その他

電源 ....AC 100 V、50 Hz/60 Hz
消費電力 .... 320 W
待機時消費電力................ 0.6 W (HDMI Control OFF)
................................0.75 W (HDMI Control ON)
予備電源コンセント
連動... 1 （100 W 最大）
外形寸法(幅×高さ×奥行)
.... 420 mm × 173 mm× 433 mm
質量 .... 13.5 kg

付属品

リモコン 1
電源コード 1
単3形乾電池 2
セットアップ用マイク(5 m) 1
保証書 1
取扱説明書

●仕様および外観は改良のため予告なく変更することがあります。

お手入れについて

通常は柔らかい布でから拭きしてください。汚れがひどい場合は水で5～6倍に薄めた中性洗剤に柔らかい布を浸してよく絞ったあと、汚れを拭き取り、そのあと乾いた布で拭いてください。アルコール、シンナー、ベンジン、殺虫剤などが付着すると、印刷、塗装などがはげることがありますのでご注意ください。また、化学ぞうきん等をお使いの場合は、化学ぞうきん等に添付の注意事項をよくお読みください。

音のエチケット

楽しい音楽も時と場所によっては気になるものです。隣近所への思いやりを十分にしましょう。
ステレオの音量は、あなたの心がけ次第で大きくも小さくもなります。
とくに静かな夜間には小さな音でも通りやすいものです。夜間の音楽鑑賞にはとくに気を配りましょう。近所へ音が漏れないように窓を閉め、お互いに心を配り、快い生活環境を守りましょう。

故障かな ? と思ったら

故障かな ? と思ったら以下を調べてみてください。意外なミスが故障と思われがちです。また、本機以外の原因も考えられます。ご使用の他の機器および同時に使用している電気機器も、あわせてお調べください。
以下の項目を調べても直らない場合は、修理をご依頼ください。

音について

「音が出ない」「音がおかしい」「ノイズが出る」など、音についての疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
入力切換を合わせても、音が出ない	入力端子の接続が正しくない。 デジタル入力の設定が正しくない。 音声入力信号の選択が正しくない。 消音(ミュート)状態(音量インジケーターが点滅)になっている。 セットアップ用マイクが接続されている。 スピーカー出力がOFFになっている。 音量が下がっている。	接続を再確認する。 設定を修正する。 音声切換ボタンで正しい入力信号を選択する。 リモコンで消音(ミュート)を解除する。 セットアップ用マイクを抜く。 SPEAKERS(音声入力)ボタンを押して、ON(SP▶A)にする。 MASTER VOLUMEを調整する。	**81** **36** **35** **12** **56** **35**
フロントスピーカー以外の音が出ない	スピーカーシステムの設定がフロントch以外すべてNOになっている。 リスニングモードがSTEREOまたはフロントサラウンド･アドバンスモードになっている。	スピーカーシステムの設定を修正する。 サラウンド再生用のリスニングモードを選択する。	**75** **37**
サラウンドバックスピーカーから音が出ない	SBch処理モードの設定がOFFになっている。 SBch処理モードの設定がAUTOで「6.1ch再生検出信号」の記録されていないソースを使用している。 サラウンドバックシステムの設定が[Front Bi-Amp]、[Speaker B]または[ZONE 2]になっている。 スピーカーシステムの設定でサラウンドまたはサラウンドバックchの設定が[NO](無し)になっている。 接続が正しくない(サラウンドバックchを1本のスピーカーで接続していてR ch側に接続している)。	ONを選択する。 ONを選択する。 [Normal]を選択する。 サラウンドバックchの設定を修正する。 接続を再確認する(サラウンドバックchを1本のスピーカーで接続しているときはL ch側に接続する)。	**42** **42** **62** **75** **24**
特定のスピーカーから音が出ない	スピーカーシステムの設定が[NO](無し)になっている。 スピーカーの接続が外れている。 ソフトのサウンドトラックが意図的にそのように録音されている。 スピーカーの出力レベル設定が小さい。 サラウンドバックシステムの設定で[Speaker B]が選択されているときのスピーカーシステムの選択が合っていない。	スピーカーシステムの設定を修正する。 スピーカーの接続を確認する。 リスニングモードによっては効果音のみ出力される場合があります。 スピーカーの出力レベル設定を上げる。 スピーカーシステムで「A+B」または「B」にする。	**75** **24** **37** **77** **56**
表示部にマルチチャンネル信号のプログラムフォーマットインジケーターが点灯しているが、音が出ていないスピーカーがある	再生しているソースのプログラムフォーマットにはそのチャンネルの情報が記録されているが、そのチャンネルに音声が収録されていない。	故障ではありません。収録内容をご確認ください。	
デジタル機器の音が出ない	デジタル接続が正しくない。 デジタル入力の設定が正しくない。 音声入力信号の選択が正しくない。 デジタル出力レベル調整機能が付いているCDレコーダーなどのデジタル出力レベル設定が低すぎる。 再生ソフトのデジタルフォーマットに対応していないプレーヤーである(または出力しない設定になっている)。	デジタル接続を再確認する。 デジタル入力の設定を修正する。 接続されているデジタル機器に応じて、音声切換ボタンでDIGITALを選択する。 プレーヤーのデジタル出力設定を適切に修正する。(DTS CDの場合は0.0 dBに設定してください。) 対応フォーマットの音声トラックを選択する(または出力させる設定にする)。	**33** **81** **36** **16**
PCM以外の信号の音が出ない	音声入力信号の選択が「PCM」になっている。	音声切換ボタンで正しい入力信号を選択する。	**36**

症　状	原　因	対　応	参照
録音ができない	アナログ信号をデジタルで、デジタル信号をアナログで録音しようとしている。 コピープロテクト信号の入ったデジタル信号である。 REC端子の接続が正しくない。	アナログ信号はアナログ録音、デジタル信号はデジタル録音のみ可能です。 コピープロテクト信号の入ったデジタル信号は録音することができません。 正しく接続し直す。	**54** **32**
無入力でもノイズが聞こえる	電源そのものにノイズが残っている。	パソコンなどのデジタル機器とタコ足配線になっていないか確認する。	
MULTI CH IN 端子に接続した機器で、DVD オーディオを再生したが 2ch にダウンミックスされているような音になっている	MULTI CH IN端子に接続したものではない信号を再生している。(デジタルPCM出力など) プレーヤーの出力設定が間違っている。	入力切換ボタンで入力を切り換え、マルチチャンネル入力の再生をする。 プレーヤーの取扱説明書をご覧ください。	**53**
スピーカーの設定をフロントのみ「LARGE」としていてマルチ ch の DVD オーディオを再生したが、マルチ ch 音声がダウンミックスされない	ダウンミックス禁止のソフトを再生している。	故障ではありません。	
DTS CD のサーチ中にノイズが出る	サーチ中にCDに含まれるデジタル情報を読み取ってしまう。	故障ではありません。サーチ中はアンプの音量を下げ、スピーカーから出る音を抑えてください。	
DTS の LD を再生するとノイズが出る	音声入力信号の切り換えでANALOGが選択されている 。	機器を正しくデジタル接続し、音声切換ボタンでDIGITALを選択する。	**36**

サブウーファーの接続／再生について

音についての問題の中でも、特に接続したサブウーファーについての疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
サブウーファーから音が出ない	サブウーファーあり／なしの設定が [NO](無し)に設定されている。 再生しているソース(シーン)や音楽に超低域成分(LFEチャンネル)が含まれていない。 接続が外れている(または、間違っている)。 サブウーファー側の電源がOFFになっている。 サブウーファー側の自動スタンバイ機能が働いている。	[Speaker Setting] 設定を確認して、サブウーファーの設定を [YES](有り)または [PLUS] にする。 故障ではありません。収録内容をご確認ください。 サブウーファーの接続を確認して、外れているまたは間違っているときは接続し直す。 サブウーファーの電源を確認する。 サブウーファーの機能を確認する(詳しくはサブウーファーの取扱説明書をご覧ください。)	**75** **24**
サブウーファーからの音が小さい	低域成分がない、または少ないソースやディスク(CDなど)を再生している。 サブウーファー出力レベルの設定値が小さい。 クロスオーバー周波数の設定が低い。 サブウーファー側のボリューム設定が小さい。	再生しているソースの低域成分が少なく、サブウーファーの音量が不足している場合は、[Speaker Setting]でサブウーファーの設定を[PLUS] にする。 [Channel Level] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。 [X.OVER] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。 サブウーファーのボリュームレベルを上げる。	**75** **77** **75**

映像について

「映像が出ない」「メニュー画面(OSD画面)が表示されない」など映像についての疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
入力切換を合わせても、映像が出ない。または違う入力の映像が出る	TVモニター側の入力切り換え設定が正しくない。	TVモニターの取扱説明書をお読みになり、正しい入力に切り換えてください。	
	ソース機器とHDMI端子で接続しているが、TVモニターをHDMI端子で接続していない。	ソース機器とTVモニターはHDMI端子を使って本機と接続する。	**27**
	ソース機器とTVモニターを接続しているコードの種類が違っていてビデオコンバート機能がOFFに設定されている。	ビデオコンバート機能をONにする。	**47**
	映像によっては著作権の関係で映像が出力されない場合があります。	解像度の設定を変更するか、ビデオコンバーターの設定をOFFにしてください。	**47**
コンポーネント端子やD端子、Sビデオ端子に接続したソース機器の映像が出ない	入力設定(Input Setup)の「Comp/D In」の設定が正しくない。	入力の設定(Input Setup)を正しく行う。	**81**
	COMPONENT VIDEO IN 1とD4 VIDEO IN 1を同時に接続している。	COMPONENT VIDEO IN 1とD4 VIDEO IN 1はどちらか一方のみを接続する。	
	COMPONENT VIDEO IN 2とD4 VIDEO IN 2を同時に接続している。	COMPONENT VIDEO IN 2とD4 VIDEO IN 2はどちらか一方のみを接続する。	
録画ができない	録画機器とソース機器の接続端子が合っていない。	録画機器の接続端子とソース機器の接続端子を(コンポジットまたはSビデオで)合わせる。コピープロテクト信号の入った映像信号は録画することができません。	**54**
コンバート後の出力映像が出ない、または乱れる	コピープロテクト信号が極端に大きい、または画質劣化の激しいビデオテープを再生している。	コンバート回路またはモニターTVの仕様です。コンポジットまたはS端子の出力映像でお楽しみください。	**26**

操作について

「操作できない」「電源が切れる」など操作時にある疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
大音量で再生したときに電源が切れる	スピーカーコードの芯線がスピーカー端子からはみ出して、リアパネルに接触しているか、+/−が接触し、保護回路が働いている。	スピーカーコードの芯線をもう一度しっかりねじり直し、アンプまたはスピーカー側のスピーカー端子からはみ出ないように接続する。	**24**
	スピーカーの実動作上の最低インピーダンスが非常に低いため、保護回路が働いた。または、低周波の過大な入力が持続した。	ボリュームを下げて再生する。チャンネルごとの周波数特性の補正で低域(63 Hzまたは125 Hz)のレベルを下げる。DIGITAL SAFETY機能をSAFETY 1または2にすると、さらに数dB音量が上げられる場合があります。スタンバイモード時に、ADVANCED SURROUNDボタンを押しながらSTANDBY/ONボタンを押すと、SAFETY 1 ON、SAFETY 2 ON、SAFETY OFFが切り換わります。(SAFETY 1またはSAFETY 2を選ぶと一部の機能が使用できなくなることがあります)	**66**
電源が突然切れてPHASE CONTROL インジケーターが点滅する	スピーカーコードの芯線がスピーカー端子からはみ出して、リアパネルに接触しているか、+/−が接触し、保護回路が働いている。	スピーカーコードの芯線をもう一度しっかりねじり直し、アンプまたはスピーカー側のスピーカー端子からはみ出ないように接続する。	**24**
	本機のアンプ回路の故障です。	すみやかに使用を停止し、修理を依頼してください。この症状のあとに電源のON/OFFを繰り返すのはおやめください。	**125**
電源が突然切れてDIGITAL PRECISION インジケーターが点滅する	本機の故障です。	すみやかに使用を停止し、修理を依頼してください。この症状のあとに電源のON/OFFを繰り返すのはおやめください。	**125**
操作ボタンを押しても動作しない	空気が乾燥して静電気などの影響を受けている。	電源プラグを一度コンセントから外して、再び差し込む。	
AMP ERR またはMCACC インジケーターが点滅して自動的に電源が切れる	本機のアンプ回路の故障です。	すみやかに使用を停止し、修理を依頼してください。この症状のあとに電源のON/OFFを繰り返すのはおやめください。	**125**

症　状	原　因	対　応	参照
AMP OVERHEAT と点滅表示したまま音が出なくなる	本機内部の温度が許容値を超えた。	通風がよくなるように設置を変える。 一度電源を切り、冷えてから使用する。	**5**
12V TRG ERR と点滅表示される	12 Vトリガー端子に不具合が生じている。	一度電源を切り、12 Vトリガーの接続を見直してください。	**100**
音声切換ボタンを押しても入力が DIGITAL にならない	接続またはデジタル入力の設定が正しくない。 MULTI CH IN入力になっている。	機器の接続を再確認し、「デジタル入力の設定」を正しく修正する。 MULTI CH IN入力以外に切り換える。	**81** **35**
5.1ch ソースを再生しているのに、5.1ch 再生されない	DVDプレーヤーのデジタル出力設定がOFFになっている。 DVDプレーヤーのドルビーデジタルまたはDTS出力設定がOFFになっている。	DVDプレーヤーのデジタル出力設定をONにする。 DVDプレーヤーのドルビーデジタルまたはDTS出力設定をONにする。	**16**
DVD オーディオを再生するとプレーヤーには 96 kHz と表示されるが、本機では表示されない	MULTI CH IN端子はアナログ入力端子なので、デジタル情報を表示することはできません。	故障ではありません。プレーヤーの取扱説明書もご覧ください。	
96 kHz のソフトを再生しても表示が 96 kHz にならない	プレーヤー側で96 kHz出力がOFFになっている。	プレーヤーの96 kHz出力をONにする。	**16**
リモコン操作ができない	リモコンの電池が消耗している。 距離が離れすぎている。角度が悪い。 途中に信号を遮る障害物がある。 蛍光灯などの強い光がリモコン信号受光部に当たっている。	電池を交換する。 7 m以内、左右30°以内で操作する。 障害物を取り除くか、操作する場所を移動する。 リモコン信号受光部に光が直接当たらないようにする。	**5** **17**
他機器をリモコンで操作できない	プリセットコードの設定が間違っている。 電池切れの期間にメモリーが消去された。	正しいプリセットコードを設定する。 もう一度設定を行う。	**85**
フラットテレビとの SR ＋による連動操作ができない	HDMIコントロール機能がONになっている。	HDMI Control SetupでOFFを選択する。	**95**
IR 接続をしているのに相手機器がリモコンで動作しない	接続でコントロール端子のIN/OUTを間違えている。 コントロールコード以外の接続をしていない。 他社製品の同用途端子と接続している。	正しく接続し直す。 アナログのオーディオコードまたはHDMIケーブルなどを接続する。 他社製品の動作はサポートしていません。	**93** **93**
HDMI コントロール機能によるアンプ連動操作ができない	HDMIコントロール機能がOFFになっている。本機の電源をテレビよりも先にONした。 テレビ側のHDMIコントロール設定がOFFになっている。	HDMI Control SetupでONを選択する。 テレビの電源をONしてから本機の電源をONにする。 テレビ側のHDMIコントロール設定をONにする。	**95** **95**

インジケーター／表示について

操作中のインジケーター表示などの疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
圧縮デジタル * のソフトを再生しても、対応するインジケーターが点灯しない	デジタル接続が正しくない。 デジタル入力の設定が正しくない。 音声入力信号の選択が正しくない。 プレーヤーが停止か一時停止になっている。 プレーヤーの音声出力設定が間違っている。 再生しているトラックがPCMなどになっている。	接続を再確認する。 デジタル入力の設定を正しく行う。 音声切換ボタンで正しい入力を選択する。 再生を開始する。 プレーヤーの音声出力設定を各フォーマットに対応するよう修正する。 プレーヤーの音声切り換え機能で圧縮デジタル*の音声を選択する。	**33** **81** **36** **16** **16**
圧縮デジタル * のソフトを再生してもすべてのプログラムフォーマットインジケーターが点灯しない	収録フォーマットが5.1ch(または「6.1ch再生検出信号」対応)ではない。	故障ではありません。再生しているソフトのパッケージをご確認ください。	**102**
圧縮デジタル * のソフトを再生しても、ⅮⅮDIGITAL または DTS などの表示にならない	デジタル信号が入力されていない。 ソフトの音声が2chフォーマットである。 ドルビーサラウンドエンコードされたソフトである。	音声切換ボタンでAUTOまたはDIGITALを選ぶ。 故障ではありません。再生しているソフトのパッケージをご確認ください。	**36** **102**

症　状	原　因	対　応	参照
Surround EX(またはDTS ES)ソフト再生時に、SBch処理モードの設定をAUTOにしてもEX(またはES)デコードしない	「6.1ch再生検出信号」が記録されていない(劇場公開時とDVD収録時は、まれに違う場合があります)。	SBch処理モードの設定をONにする。	42
Surround EX(またはDTS ES)ソフトを再生中、SL、SB、SRのインジケーターは点灯するが、EX(またはES)デコードしない	スピーカーシステムの設定で、サラウンドバックチャンネルが[NO](無し)に設定されている。	サラウンドバックchの設定を、接続したスピーカーに合わせて変更する。	75
	リスニングモードが正しくない。	SBch処理モードの設定をONまたはAUTOに変更し、リスニングモードをサラウンドにして再生する。	37, 42 109
DVD オーディオを再生しているのにディスプレイにはPCMと表示される	HDMI接続をしている入力で、DVDオーディオを再生するとPCMと表示されます。	故障ではありません。	

圧縮デジタル＊：ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AAC などの総称として使用します。

MCACC（音場補正）について

MCACC（音場補正)に関する疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
音場補正のオート設定を何度行ってもエラーになる	マイクとスピーカーとの間に障害物がある。	障害物を移動させる。	12
	スピーカーコードの接続が正しくない。	スピーカーコードの接続を正しく行う。 サラウンドバックスピーカーを1本だけ接続するときは、L(Single)端子に接続してください。 5.1chのスピーカーセットを接続するときは、FRONT L/R、CENTER、SURROUND L/RおよびPRE OUTのSUBWOOFERに接続してください。	24
測定結果のサブウーファーの距離が実際の距離より長い	サブウーファー内部ローパスフィルターの遅延特性の影響で、再生音にディレイがかかっている。	MCACCでは、こういった遅延特性を考慮したうえで距離を特定して、正確なディレイ時間を設定するようにしています。	15
スピーカーの大、小設定が誤った設定になる	耳に聞こえにくい周波数の騒音がある。 マイクの位置によって微妙な音響特性の変化を検出している。	エアコンなどモーターを使用した機器の電源を切ってみる。 [Speaker Setting]で正しい設定にする。	75
音場補正したが、音がおかしい	スピーカー端子の位相が反転している(＋/－が逆に接続されている)。	正しく接続する。	24
Acoustic Cal EQ で自動測定された補正カーブを手動で調整中に「OVER!」がディスプレイに表示される	調整値の組み合わせによっては補正レベルが許容量を超える。	「OVER!」の表示が消えるまで、さまざまな帯域のレベルを下げる。	66

EQ 補正後の残響特性表示に関する疑問

症　状	原　因	対　応	参照
PC または OSD 画面上での EQ 補正後残響周波数特性表示のグラフがフラットにそろわない	グラフの傾斜は残響特性を示しています。部屋の残響特性そのものは、EQ補正だけでは直すことができないため、グラフの傾斜角度は補正前後でも同じになります。	補正により、各周波数ごとのグラフがEQの補正分だけ水平移動します。補正の効果は、指定した時間軸上のあるポイントでそろうことが確認できます。	PC表示用アプリケーションソフト取扱説明書
		残響特性(グラフの形状)そのものは、視聴環境を改善しないと変化しません。	67
	さまざまな原因によって、ALL CH ADJUSTで補正を行っても周波数特性のグラフはフラットにならないことがあります。	MCACCでは、無理な補正をせず、音質的に最良となるよう自動的に補正を行います。	
Manual MCACC の EQ Adjust で調整した補正量が補正後表示のグラフに反映されない	残響周波数特性の表示では、各帯域を分析フィルタで分析したものを表示します。一方、EQ補正は専用のフィルタを使用して信号の補正を行っており、分析フィルタとEQ補正専用フィルタの形状の違いがグラフに反映されない原因です。	問題ありません(Auto MCACCの場合は、このフィルタ形状による違いも考慮したうえで補正を行っています)。	

症　状	原　因	対　応	参照
スピーカーシステムの設定で［SMALL］と設定されたスピーカーの低域が補正されていない	[SMALL]に設定されたスピーカーは、EQによる低域の補正は行いませんが、残響特性の表示はスピーカーから出る音の純粋な特性を示すため、低域補正をしていない状態での特性がそのまま表示されます。	MCACCはスピーカーの再生能力に応じて適切な補正を行っているため、[SMALL]に設定されたスピーカーの低域補正には問題ありません。	

HDMI 接続／再生について

HDMIケーブルでつないだ機器の音を再生するときの疑問や症状です。
HDMIインジケーターが点滅し続けるときは以下の症状、原因、対応をご確認ください。

症　状	原　因	対　応	参照
映像と音声の両方が出ない	本機はHDCPに対応しています。ご使用の機器がHDCP対応かどうかをご確認ください。	HDCP非対応のときはコンポーネントビデオ、D4ビデオ、Sビデオ、コンポジットビデオコードのいずれかで接続してください。	27
	ソース機器の仕様によっては、AVアンプを通してのHDMI接続ができない場合があります。	ソース機器の仕様を確認し、非対応のときはソース機器と本機をコンポーネントビデオ、D4ビデオ、Sビデオ、コンポジットビデオコードのいずれかで接続してください。	27
映像が出ない	ソース機器によっては、設定した解像度で映像が出力されない場合があります。	解像度の設定を変更してみてください。	
	映像信号はDeepColor だが再生機器がDeep-Colorに対応していない。	DeepColorに対応した機器で再生する。	
	映像信号はDeepColor だがHDMIケーブルがDeepColorに対応していない。	High Speed HDMIケーブルを使ってください。	
「NOT SUPPORT」と表示される	映像信号とディスプレイの能力が合っていない。	ソース機器の解像度やDeepColorの設定などを変更してみてください。	
音声が出ない、またはとぎれる	オーディオ調整機能のHDMI設定が「THROUGH」になっている。	「AMP」に設定してください。	45
	DVI機器と接続しているときは、音声が出ません。	別途音声の接続を行ってください。	32-33
	アナログ映像をHDMI出力しているときは音声接続が必要です。	別途音声の接続を行ってください。	32-33
	ソース機器の設定が正しくない。	ソース機器を正しく設定してください。	
	オーディオ調整機能のHDMI設定が「THROUGH」で、マルチチャンネル音声を入力している場合、すべてのチャンネルの音声はHDMI出力されません。	アナログまたはデジタル音声接続を行ってください。	32-33
映像が乱れる	ビデオデッキなど映像信号に乱れがあるとき（早送りなど）は映像の品位によって映像が歪んだり乱れたり映らなくなることがあります。また、ディスプレイ側の性能によっては同様の症状が出ることもあります。	ビデオコンバート機能をOFFにして入力と同じビデオフォーマット（コンポーネントビデオ、D4ビデオ、Sビデオ、コンポジットビデオコードのいずれか）で接続、再生してください。	48
HDCP ERROR と表示される	HDCPに対応していない機器が接続されている。	コンポーネントビデオ、Sビデオ、コンポジットビデオコードのいずれかで接続してください。HDCPに対応した機器でも表示されることがありますが、映像がとぎれなく出力されているときは不具合ではありません。	

HDMI 接続に関するご注意

本機を経由してソース機器(DVDプレーヤーやビデオ、セットトップボックスなど)とTV(モニター)をHDMIケーブルを使って接続すると、映像や音声が出力されないことがあります(ソース機器の仕様により、AVアンプを経由してTVに映像や音声を出力できないことがあります)。 このようなときは、接続しているソース機器のメーカーにお問い合わせください。
AVアンプを経由してTVに映像や音声を出力できないソース機器をそのままお使いになるときは、下記の接続例1または接続例2の接続方法に変更すると映像や音声を出力できます(詳しい接続方法については26〜27ページ、32〜33ページをご覧ください)。

接続例 1

■ ソース機器と本機をコンポーネント映像ケーブル (またはD端子ケーブル)、および音声ケーブルで接続してください。
■ 本機と TV を HDMI ケーブルで接続してください。

- 上記の接続では、ソース機器からのコンポーネント映像信号を本機がデジタル映像信号に変換してTVに出力します。このため、映像信号を変換したときに多少画質が変わります。

接続例 2

■ ソース機器と TV を HDMI ケーブルで直接接続してください。
■ 本機とソース機器を音声ケーブルを使って接続してください。このとき TV の音量は最小にしてください。

- HDMI入力端子が1系統のTVからは、直接接続したソース機器の映像のみ出力されます。
- ソース機器によっては、2チャンネル音声しか出力されないことがあります(これは、ソース機器がTVの音声チャンネル数に合わせるためです)。
- ソース機器を切り換えるときは、本機とTVの入力を両方切り換えてください。
- HDMI端子に入力される映像をTVで見るときは、TVの入力をHDMIに切り換えます。このときTVの音量は最小に調整してください。

USB 再生について

USBメモリーを再生するときの疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
USB マスストレージ機器が本機で認識されない。	接続が正しくない。 USBメモリーのフォーマットで、FAT12、NTFS、HFSは本機で再生することができません。 USBハブを使用している。	本機の電源を切ってから再度接続し、電源を入れてください。 USBメモリーのフォーマットがFAT16またはFAT32であるかどうか確認してください。FAT12、NTFS、HFSは本機で再生することができません。 本機はUSBハブには対応しておりません。	**51**
USB ERROR3 と表示され、USB メモリーの再生ができない。	さまざまな原因が考えられます。	「USB ERROR(USBエラー)について」のすべての項目を確認、実行し、それでもUSB ERROR3が表示されるときは、パイオニアカスタマーサポートセンターへご連絡ください。	**52, 125**
USB メモリーのファイルを再生できない。	著作権保護のかかったWMAやMPEG-4 AACのファイルを本機で再生することはできません。 本機で対応していない圧縮フォーマットを再生している。	著作権保護のかかっていないファイルを再生してください。(パソコンなどでCDなどの音楽データを取り込む場合、設定によっては著作権保護がかかることがあります)。 圧縮フォーマットが本機で対応しているかどうか確認してください。	**52**
リモコンの ► ボタンを押しても USB メモリーのファイルを再生しない。	リモコンがUSBモードになっていない。	リモコンのiPod USBボタンを押してリモコンをiPod USBモードにしてください。	**51**

エラーメッセージについて

システムセットアップでのMCACC(音場補正)時に表示されるメッセージの意味

「Connect microphone.」：
「Connect Mic!」：
フロントパネルのMCACC SETUP MIC端子に、付属のマイクを接続してください。

「Too much ambient noise!」：
「Noisy!」：
周辺の騒音が大きすぎ、測定に誤差が生じる可能性があります。
・エアコンなどモーターを使用した機器や、超音波ねずみ駆除装置などの電源を一時的にOFFにするか遠ざけるなどの処置を行ってみてください。
・周囲が比較的静かな時間帯に、もう一度やり直してください。

「Check Microphone」：
「Mic Err」：
マイクからテスト信号が検出できなくなりました。
・オートセットアップ用マイクの接続や接続コードの断線をチェックしてください。
・スピーカーが正しく接続されているか確認してください。
・測定中はできるだけボリュームを変化させないでください。

「ERR」：
「ERROR Front」「ERROR Surr.」「ERROR SB」：
Speaker Level測定後のYes/No Check判定で、以下のような間違った接続を検出しました。
・フロント、サラウンドに表示された：スピーカーがL/Rの片方しか検出されませんでした。
・サラウンド「NO」、サラウンドバック「ERR」の場合：サラウンドの接続は検出されずサラウンドバックの接続が検出されました。
・サラウンドバック（1本接続時）の場合：R ch側から検出しました（1本のみ接続するときは、L ch側を使用してください）。

「Subwoofer/Level is too high. Turn volume down.」：
「SW Volume down」：
[YES]と設定したサブウーファーの出力信号が大きすぎます。サブウーファー本体のボリュームを適正値に下げてください。

「Subwoofer/Level is too low. Turn volume up.」：
「SW Volume Up」：
[YES]と設定したサブウーファーの出力信号が検出できません。サブウーファー本体の電源を確認し、ボリュームを適正値に上げてください。

「Select MCACC memory.」：
「Select Mem◄M1►」：
Manual MCACC、またはManual SP SetupのChannel Level、Speaker Distanceを行う際、MCACC MEMORYの選択がMCACC OFF になっています。調整を行いたいMCACC MEMORYを選んでください。

保証とアフターサービス

保証書（別添）

保証書は、必ず｢販売店名・購入日｣などの記入を確かめて販売店から受け取っていただき、内容をよくお読みのうえ、大切に保管してください。

保証期間はご購入日から 1 年間です。

補修用性能部品の保有期間

当社は、この製品の補修用性能部品を製造打ち切り後 8 年間保有しています。性能部品とはその製品の機能を維持するために必要な部品です。

修理に関するご質問、ご相談

お買い求めの販売店へご相談・ご依頼ください。

修理を依頼されるとき

修理を依頼される前に取扱説明書の｢故障かな？と思ったら｣の項目をご確認ください。それでも異常のあるときは、必ず電源プラグを抜いてから、販売店へご依頼ください。ご転居されたり、ご贈答品などで、お買い求めの販売店に修理のご依頼ができない場合は、「ご相談窓口のご案内･修理窓口のご案内」（→ 125 ページ)をご覧になり、修理受付センターにご相談ください。

連絡していただきたい内容

- ご住所：
- お名前：
- お電話番号：
- 製品名：AV マルチチャンネルアンプ
- 型番：VSA-LX51
- お買い上げ日：
- 故障または異常の内容(できるだけ詳しく)：
- 訪問ご希望日：
- ご自宅までの道順と目標(建物や公園など)：

■ 保証期間中は：

修理に際しては、保証書をご提示ください。保証書に記載されている当社の保証規定に基づき修理いたします。

■ 保証期間が過ぎているときは：

修理すれば使用できる製品については、ご希望により有料で修理いたします。

本製品は家庭用オーディオ機器（オーディオ・ビデオ機器）です。下記の注意事項を守ってご使用ください。

1. 一般家庭用以外での使用（例：店舗などにおけるBGMを目的とした長時間使用、車両・船舶への搭載、屋外での使用など）はしないでください。
2. 音楽信号の再生を目的として設計されていますので、測定器の信号（連続波）などの増幅用には使用しないでください。
3. ハウリングで製品が故障する恐れがありますので、マイクロフォンを接続する場合はマイクロフォンをスピーカーに向けたり、音が歪むような大音量では使用しないでください。
4. スピーカーの許容入力を超えるような大音量で再生しないでください。

S26_Ja

愛情点検

長年ご使用のAV機器の点検を!

このような症状はありませんか	・電源コードや電源プラグが異常に熱くなる。 ・電源コードにさけめやひび割れがある。 ・電源が入ったり切れたりする。 ・本体から異常な音、熱、臭いがする。

ご使用中止	故障や事故防止のため、すぐに電源を切り、電源プラグをコンセントから抜き、必ず販売店にご相談ください。

サービスステーションリスト

サービス拠点のご案内

サービス拠点への電話は、修理受付センターでお受けします。（沖縄県の方は沖縄サービスステーション）
また、認定店は不在の場合もございますので、持ち込みをご希望のお客様は修理受付センターにご確認ください。

●北海道地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

拠点	FAX	〒	住所
☆札幌サービスセンター	FAX 011-611-5694	〒064-0822	札幌市中央区北2条西20-1-3　クワザワビル
旭川サービス認定店	FAX 0166-55-7207	〒070-0831	旭川市旭町1条1丁目438-89
帯広サービス認定店	FAX 0155-23-7757	〒080-0015	帯広市西5条南28丁目1-1
函館サービス認定店	FAX 0138-40-6473	〒041-0811	函館市富岡町2-18-7

●東北地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

拠点	FAX	〒	住所
☆仙台サービスセンター	FAX 022-375-4996	〒981-3121	仙台市泉区上谷刈6-10-26
山形サービス認定店	FAX 023-615-1627	〒990-0023	山形市松波1-8-17
郡山サービス認定店	FAX 024-991-7466	〒963-8861	郡山市鶴見坦1-9-25　クレールアヴェニュー伊藤第2ビル1F D号
盛岡サービス認定店	FAX 019-659-1895	〒020-0051	盛岡市下太田下川原153-1
青森サービス認定店	FAX 017-735-2438	〒030-0821	青森市勝田2-16-10
八戸サービス認定店	FAX 0178-44-3351	〒031-0802	八戸市小中野3-16-8
秋田サービス認定店	FAX 018-869-7401	〒010-0802	秋田市外旭川字梶の目345-1

●東京都内

受付　月～土　9:30～18:00（日・祝・弊社休業日は除く）

拠点	FAX	〒	住所
世田谷サービスステーション	FAX 03-3419-4234	〒155-0032	世田谷区代沢4-25-9
北東京サービスステーション	FAX 03-3944-7800	〒170-0002	豊島区巣鴨1-9-4　第三久保ビル1F
多摩サービスステーション	FAX 042-524-5947	〒190-0003	立川市栄町4-18-1　エクセル立川1 F

●関東・甲信越地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

拠点	FAX	〒	住所
☆千葉サービスセンター	FAX 043-207-2555	〒263-0014	千葉市稲毛区作草部町1369-1　椎の実ハイツ1F
松戸サービス認定店	FAX 047-340-5052	〒270-0021	松戸市小金原4-9-23
水戸サービス認定店	FAX 029-248-1306	〒310-0844	水戸市住吉町307-4
つくばサービス認定店	FAX 0298-58-1369	〒305-0045	つくば市梅園2-2-6
☆埼玉サービスセンター	FAX 048-651-8030	〒331-0812	さいたま市北区宮原町1-310-1
川越サービス認定店	FAX 049-233-6581	〒350-0804	川越市下広谷1128-11
宇都宮サービス認定店	FAX 028-657-5882	〒321-0912	宇都宮市石井町3373-1
群馬サービス認定店	FAX 0270-22-1859	〒372-0801	伊勢崎市宮子町1191-17　パサージュ808伊勢崎101号
新潟サービス認定店	FAX 025-374-5756	〒950-0982	新潟市中央区堀之内南1-20-11
佐渡サービス指定店　横山電機商会	FAX 0259-63-3400	〒952-1209	佐渡市金井町千種1158-1
☆神奈川サービスセンター	FAX 045-943-3788	〒224-0037	横浜市都筑区茅ヶ崎南2-18-1　ベルデユール茅ヶ崎
横浜サービス認定店	FAX 045-348-8661	〒240-0043	横浜市保土ヶ谷区坂本町250
神奈川西サービス認定店	FAX 046-231-1209	〒243-0422	海老名市中新田4-10-53　中山ビル1F
三宅島サービス指定店　勝見電機	FAX 04994-6-1246	〒100-1211	三宅村大字坪田
松本サービス認定店	FAX 0263-48-0575	〒390-0852	松本市大字島立180-5　パイオニア松本拠点1F
長野サービス認定店	FAX 026-229-5250	〒380-0935	長野市中御所1-24
甲府サービス認定店	FAX 055-228-8003	〒400-0035	甲府市飯田4-9-14

●中部地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

拠点	FAX	〒	住所
☆名古屋サービスセンター	FAX 052-532-1148	〒451-0063	名古屋市西区押切2-8-18
岡崎サービス認定店	FAX 0564-33-7080	〒444-0931	岡崎市大和町字荒田36-1　大和ビレッジB-1
津サービス認定店	FAX 059-213-6712	〒514-0821	津市垂水522-5
岐阜サービス認定店	FAX 058-274-5256	〒500-8356	岐阜市六条江東1-1-3
静岡サービス認定店	FAX 054-236-4063	〒422-8034	静岡市駿河区高松1-17-17
沼津サービス認定店	FAX 055-967-8455	〒410-0876	沼津市北今沢12-7
浜松サービス認定店	FAX 053-422-1401	〒435-0042	浜松市東区篠ヶ瀬町415　ビラモデルナ5号
金沢サービス認定店	FAX 076-240-0550	〒920-0362	金沢市古府3-60-1　K2ビル1F
富山サービス認定店	FAX 076-425-3027	〒939-8211	富山市二口町1-7-1
福井サービス認定店	FAX 0776-27-1768	〒910-0001	福井市大願寺3-5-9

●関西地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

☆大阪サービスセンター	FAX	06-6310-9120	〒564-0052	吹田市広芝町5-8
大阪南サービス認定店	FAX	0722-75-2625	〒593-8322	堺市西区津久野町1-8-15　ローズマンション1F
神戸サービス認定店	FAX	078-265-0832	〒651-0093	神戸市中央区二宮町1丁目10-1　ローレル三宮ノースアベニュー1F
姫路サービス認定店	FAX	0792-51-2656	〒671-0224	姫路市別所町佐土1-126
和歌山サービス認定店	FAX	0734-46-3026	〒641-0021	和歌山市和歌浦東3-1-25
京都サービス認定店	FAX	075-352-2588	〒600-8322	京都市下京区西洞院通五条東南角小柳町513-2　五条久保田ビル1F
奈良サービス認定店	FAX	0742-36-8713	〒630-8132	奈良市大森西町21-26
福知山サービス認定店	FAX	0773-24-5375	〒620-0055	福知山市篠尾新町2-74　カマハチマンション

●中国・四国地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

☆広島サービスセンター	FAX	082-248-9939	〒730-0041	広島市中区小町2-30　第二有楽ビル1F
岡山サービス認定店	FAX	086-244-8748	〒700-0975	岡山市今8-15-21
松江サービス認定店	FAX	0852-22-7779	〒690-0017	松江市西津田4-5-40　（有）テクピット内
福山サービス認定店	FAX	0849-31-2791	〒720-0815	福山市野上町3-12-9
鳥取サービス認定店	FAX	0857-28-8011	〒680-0934	鳥取市徳尾422-2
徳山サービス認定店	FAX	0834-33-5759	〒745-0006	周南市花畠町3-11　森広事務所1F
高松サービスステーション	FAX	087-861-4841	〒760-0078	高松市今里町1-16-1
徳島サービス認定店	FAX	088-669-6076	〒770-8023	徳島市勝占町中須92-1　大松ジョリカ地下1階103号
高知サービス認定店	FAX	088-802-3321	〒780-0051	高知市愛宕町3-12-13　晃栄ビル1F
松山サービス認定店	FAX	089-911-5608	〒791-8013	松山市山越5-12-8

●九州地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

☆福岡サービスセンター	FAX	092-412-7460	〒812-0016	福岡市博多区博多駅南2-12-3
北九州サービス認定店	FAX	093-941-8354	〒802-0044	北九州市小倉北区熊本1丁目9-4　植田ビル1F
博多サービス認定店	FAX	092-461-1643	〒812-0006	福岡市博多区上牟田2-6-7
長崎サービス認定店	FAX	095-849-4606	〒852-8145	長崎市昭和1丁目12-10　クリスタルハイツ平野
熊本サービス認定店	FAX	096-331-3323	〒862-0918	熊本市花立5丁目14-17
大分サービス認定店	FAX	097-551-2049	〒870-0921	大分市萩原3-23-15　日商ビル101
鹿児島サービス認定店	FAX	099-201-3803	〒890-0046	鹿児島市西田3-8-24　サニーサイド21 1F
宮崎サービス認定店	FAX	0985-27-3136	〒880-0821	宮崎市浮城町98-1

●沖縄県

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）

沖縄サービスステーション	TEL	098-879-1910	〒901-2113	浦添市大平2-2-6　ひろえハイツ102
	FAX	098-879-1352		

平成20年2月現在　　記載内容は、予告なく変更させていただくことがありますので予めご了承ください。

<各窓口へのお問い合わせの時のご注意>
「0120」で始まる フリーコールおよび フリーダイヤルは、PHS、携帯電話などからは、ご使用になれません。
また、【一般電話】は、携帯電話・PHSなどからご利用可能ですが、通話料がかかります。

ご相談窓口のご案内

パイオニア商品の修理・お取り扱い（取り付け・組み合わせなど）については、お買い求めの販売店様へお問い合わせください。

商品についてのご相談窓口

● 商品のご購入や取り扱い、故障かどうかのご相談窓口およびカタログのご請求について

カスタマーサポートセンター（全国共通フリーコール）

受付時間　月曜～金曜9:30～18:00、土曜・日曜・祝日9:30～12:00、13:00～17:00（弊社休業日は除く）

●家庭用オーディオ/ビジュアル商品　■ 0120−944−222　■一般電話　03−5496−2986

■ファックス　03−3490−5718

■インターネットホームページ　http://pioneer.jp/support/
※商品についてよくあるお問い合わせ・メールマガジン登録のご案内・お客様登録など

修理窓口のご案内

修理をご依頼される場合は、取扱説明書の『故障かな？と思ったら』を一度ご覧になり、故障かどうかご確認ください。それでも正常に動作しない場合は、①型名②ご購入日③故障症状を具体的に、ご連絡ください。

修理についてのご相談窓口

● お買い求めの販売店に修理の依頼が出来ない場合

修理受付センター

受付時間　月曜～金曜9:30～19:00、土曜・日曜・祝日9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

■電話　0120−5−81028（ゴーハイオニア）　■一般電話　03−5496−2023

■ファックス　0120−5−81029

■インターネットホームページ　http://pioneer.jp/support/repair.html
※インターネットによる修理受付対象商品は、家庭用オーディオ/ビジュアル商品に限ります

沖縄サービスステーション（沖縄県のみ）

受付時間　月曜～金曜9:30～18:00（土曜・日曜・祝日・弊社休業日は除く）

■一般電話　098−879−1910

■ファックス　098−879−1352

部品のご購入についてのご相談窓口

● 部品（付属品、リモコン、取扱説明書など）のご購入について

部品受注センター

受付時間　月曜～金曜9:30～18:00、土曜・日曜・祝日9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

■電話　0120−5−81095　■一般電話　0538−43−1161

■ファックス　0120−5−81096

平成20年2月現在　記載内容は、予告なく変更させていただくことがありますので予めご了承ください。　VOL.027

さくいん

本機を操作するときの主な用語や表示をまとめました。参照ページに進むと、それぞれに関連する情報があります。

五十音順

アルファベット / 数字順

インターネットによるお客様登録のお願い

http://pioneer.jp/support/

このたびは弊社製品をお買い上げいただき、まことにありがとうございました。弊社では、お買い上げいただいたお客様に「お客様登録」をお願いしています。左記アドレスからご登録いただくと、ご使用の製品についての重要なお知らせなどをお届けいたします。なお、左記アドレスは、困ったときのよくある質問や各種お問い合わせ先の案内、カタログや取扱説明書の閲覧など、お客様のお役に立てるサービスの提供を目的としたページです。

パイオニア株式会社

〒 153-8654 東京都目黒区目黒1丁目4番1号

JIS C 61000-3-2適合品 D50-5-10-1_A_Ja

JIS C 61000-3-2適合品とは、日本工業規格「電磁両立性－第3-2部:限度値－高調波電流発生限度値(1相当たりの入力電流が20A以下の機器)」に基づき、商用電力系統の高調波環境目標レベルに適合して設計・製造した製品です。

<ARA7258-A>